

---

# バカとテストと梁山泊

カイト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと梁山泊

### 【Nコード】

N3294N

### 【作者名】

カイト

### 【あらすじ】

この物語は、霧沢明人という武術の才能がまるでない少年が、同じくまるでない少年、白浜兼一と一緒に梁山泊という達人達が住まう場所で、死に物ぐるいで修業して成長していくという物語です。

## バカとテストと梁山泊（前書き）

始めましてカイトです。

始めての作品ですがよろしくお願ひします。

## バカとテストと梁山泊

「ほら早くきなよ兼ちゃんに明人」

「「まってよ龍斗君」」

「そのバッチかえしてよ」

「えーやだよ」

「二人ともやめなよ」

「二人とも次あったときは」

「えっなになに聞こえないよ」

「まっまた会おうね兼ちゃん龍斗君」

こうして別れた三人が長い月をへて再び出会う。  
その時止まっていた時間が再び動きだす。

「……………」

「ちよつとなにしてるのよ明人」

「早くしないと初日なのに遅刻するぞい」

「あつごめん。今行くよ」今君達はどうしているんだい。兼ちゃん、  
龍斗。

## 入学（前書き）

二話めです。よろしくお願ひします。

## 入学

僕は今年はれて高校生になり文月学園に入学した。  
今は自己紹介の真つ最中だ。

「木下秀吉じゃ。よろしくたのむ。」

今は僕の少ない友達の人、女の子のような容姿でよく男に告白されるけど、れっきとした男だよ。  
演技が上手いんだ。

「……土屋康太……」

無口な人だなあ。

「神無月中からきた坂本雄二だ」

恐そうな人だなあ

「おい、あの坂本か」

「ああ。かなりヤル奴で悪鬼羅刹と呼ばれてたらしいぞ。」

見た目どうりか！うう、イジメられないといいけど。

「ドイツカラキタ島シマタニナミ由美波デス。」

あれ？漢字間違えてる。いったほうがいいかな。

「島田さん漢字間違えてますよ。」

「へっ！あつアリガトウゴザイマス。」

よかったって。

「長月中からきた吉井明久です。これからよろしく。」

明久君か、セーラー服着てるけど多分男だろうな。

おっそろそろ僕か。

「次の人」

「霧沢明人です。これから一年間よろしくお願いします。」

よし、なんの変哲もない挨拶だった。これなら目立つこともないだろう。

それから時はすすみホームルーム

「それではホームルームを終わりにする。  
全員すみやかに帰るように」

「明人よ姉うえも待っているし早くいかんかのう」

「あつうん、今行くよ」

「遅い！いつまで待たせるのよ。」

「すまんのう姉うえ明人を待っていたので」

「ごめん優子」

「まっまあいいわ。さあ行きましょう」

「「わかった(ぞい)」」

今のこは木下優子、秀吉の双子のお姉さんだよ。二人ともすごいそつくりで始めてみたひとは、見分けがつかないくらいなんだ。「それでどうだったのクラスは。」

「とくにかわった人はいなかったよ。」

「そうまあ中学のときみたいにならないようにきおつけなさい。」

「うん。それより二人は何か部活入るの?」

「わしはやはり演劇部じゃの」

「私はとくにないかな。」

「そうなんだ。僕は剣道部に入ることにしたんだ。」

「そうなの。まっ気をつけてね。」

「へっなんで?」

「だってあなた」

「ユ~~~~~」

「あつ明人危ないぞい!」

「へっギャー」

「あなたものすごく運が悪いんだもの」

「キユーー」

「ああ気絶してしまったぞい」

「仕方ないわね秀吉右側を持ちなさい、私は左側を持つから。」

「わかったぞい。」

「こんなんではんと大丈夫かしら。」

初日から前途多難な明人であった。

## 剣道部（前書き）

三話めです。

まだまだ未熟ですがよろしくお願ひします。

## 剣道部

入学してから二ヶ月がたち学園にもなれてきたところに事件は起こった。

「おらおらどうした、せっかく相手してやってるんだから打つてこいよ」

「うっうっ」

こいつでいったって攻撃するひまなんか与えてくれないじゃないか。

「おらすきありー」

「がっ」

なっなんてやつだ喉をついてきた。

「きつきたないぞ喉なんて反則だ」

「うるせー!」

「うっ」

「いいか誰も相手がいねえへったくそなお前のためにわざわざこの剣道三段、唐木日向さまが相手してやってんだ。」

「おめーなんか反則なんて言うしかくなんてないんだよ。」

「そつそんなの横暴だ。」

「じゃかあしい！だいたい前々からから思っていたがお前うぜーんだよ。」

「なんでさ、僕が君に何かしたかい。」

「ああしたね、へったくそなお前見るとイライラしてしょうがねえんだよ。」

「そんなの言い掛かりにもほどがあるよ。」

「わかんねえ奴だな。じゃあもつとわかりやすいように言ってる。」

「お前…部、やめろ」

「えっ」

「えっじゃねえよ。お前みたいな才能ない奴はいくらがんばったって無駄だからやめろって言ってるんだ。」

「……………」

「わかったな、じゃ男と男の約束として握手しよう」

スッ

バシッ

「おいどういつつもりだ」

「つつつまり、僕が強くなれば剣道やってもいいって事だよね！」

「……………キャハハハハ」

「いい度胸だな雑魚！」

「なら一週間いや二週間俺と試合だ！お前が勝てば好きにしているぜ！！」

「わっわかったよ」

「はっ二週間後が楽しみだぜ。」

こうして明人は唐木日向と試合することになってしまった。  
明人に秘策はあるのだろうか。

「……………どっどっしよう〜。」

明人の運命はいったいどうなる。

## 梁山泊（前書き）

4 話目です。

よろしくお願ひします。

## 梁山泊

日向との決闘の約束をしてから三日、明人はとうとう

「うううどうしよう」

へこたれていた。

「もう情けないわね男ならしゃきっとしなさい」

「そんなこと言ったって」

後から聞いた話、日向君は中学のころ気に入らないってだけで三人のクラスメイトを病院送りにしたらしいんだ。

「そんな人と僕が戦ったら僕は僕は」

「姉うえどうにかならんかのう」

「私に言われてもねえ」

「もうすぐ僕は死ぬんだは、秀吉骨は拾ってねああそつだみんなに別れの電話しないと。」

「やつやめるじゃ明人。」

「まずは明久からだ。」

「だいがきているようね。」

「何かあつたきがするのよね。」

「うーん」思いだせないわ。

「離せー電話電話」

「だから少しは落ち着くのじゃ。」

「もう五月蠅いわね少し黙ってなさい！」

「キッ」

「ミギヤーかつ関節が骨がー」

「むっ酷いのじゃ」

なんてことをするのだろうもう少しで骨が外れるところだった。

「骨、関節ああ！思いだしたわ。」

「どうしたのじゃ姉うえ」

「明人聞きなさい！」

「イテテ何優子」

「あなたその日向って人に勝ちたい？」

「そりゃ勝てるんだったら勝ちたいよ」

「そうそれじゃ明日ここに書いてある住所に行ってきたさい。」

「えっなんで」

「その住所の書いてある家の裏に、いろんな武術を教える道場があるのよ。」

「もしかしたら剣道も教えてるかもしれないわ。」

「でも、いくら道場に入ったとしても後一週間ちよつとじゃ無理なんじゃ」

「つぐこべいわずいってらっしゃい。勝ちたいんでしょう。少しでも希望があるんだからそれに賭けてみなさい。」

「わっわかったよ、それじゃ明日行ってくる。」

「わかればいいのよ」

「がんばっての」

翌日

「えつとさっきの住所の裏だからここであつてるよな。」

「梁山泊」ほつ本当にここなのかなんだか嫌な予感しかないぞ

「ええいここまでできて何をびびっている僕、ここが最後の希望なんだ勇氣だすぞ」

「タノモー」

「……………」「あれ誰もいないのかな、しょうがないまま明日にしよう」

ドンッ

「いた、どうしてこんなところに木が」

「はてここに何かようかのう」

「ギャアー―」

なんだ今の老人はかくくニメートルはあったぞ。

「まあ待ちなさい」

はっ速い

「もしかしたらあなた武術の達人ですか」

「ほっ、達人という程ではないがの…生まれてこのかた負けた事はないぞ!!」

ここだ！優子がいった場所は。

「あ、あの…ボク…いや、自分は霧沢明人です！」

「知り合いの話をきいて来ました。よろしくお願いします。」

「ほうほう、若いのに挨拶がしっかりしてるの。よろしい着いてきなさい」

「はい！」

うわーすごい道場だな

「あの…この道場で剣道教えてます？」

「うむ、剣道も教えとるよ」

やった：まずは一安心だ

ズバズバズバム

「！！な、な、何ですかあれえ〜っ！？」

「ん、ああ。彼はタイ人のアパチャイ・ホパチャイ君28歳。」

「キイエエ」ズバツ

「うおおお」

「ガアアアア」

「ひいひいひいっ」

「キエエエエ」バキイ

「ぎゅ…ぶ…！！」

「あまり驚かんように。喜んで調子に乗るんじゃよ」

「こらーっ！やめんかアパチャイ！！」

「キヤー〜」ガガガ「すまんのう、つい最近初めての弟子ができて暴走ぎみでの」

「は、はあ」

「ギヤアアアアア殺されるー」

「……………あの今は」

「なにテレビじゃよテレビ」

「さっき言った弟子の悲鳴じゃないんですか」

「まさか、家は明るく楽しい道場じゃよ」

あ、あやしい

「では先生を呼んでくるのでしはしまたれい」

「あ、はい」

side out

優子・秀吉 side

「そういえば姉っえ」

「何よ秀吉」

「姉っえはなぜ昨日言っておった道場のことを知っていたのかと思  
つての」

「ああ、そのこと。ほら昔私、骨折したことがあったでしょ」

「ああ確か2・3年前のことじゃったかの」

「その時かよってた接骨院の先生にね、裏にあった大きな家のこと  
を聞いたのよ」「なるほどのう。そしたらそこが道場だったわけか  
のう」

「そういうことよ。それより明人大丈夫かしら」

「うむ？大丈夫とはどういうことじゃ」

「実はね、その道場すごく厳しくて今まできた人で三日もった人がいないって言ってたのよ」

「そ、そのこと明人には伝えたのかのう」

「まさか、そんなこと言ったらあの子絶対行かないじゃない」

「……姉うえも存外鬼畜じゃの」

「そう？これも明人のためよ。これをきに少しは男らしくなっても  
らわないと」

明人よ無事に帰ってくるのじゃ  
side out

明人side

「待たせたの、では皆のもの入ってくるのじゃ」「い、いったいどんな人が入ってくるんだらう。」

「やあ！アパチャイだよよろしくよ」

あ、さっきの人だなんだ見かけより優しそうじゃないか。

「霧沢明人ですよろしくお願ひしますアパチャイさん」

「なんね長老おいちゃん今忙しいね」

今度の人は中国人かな

「ありやそのこはなんね」

「なあに、新しい入門希望者じゃよ」

「おおそうだったかね、おいちゃんは馬剣星ねよろしくね」

「霧沢明人ですよろしくお願ひします馬先生」

「うむほかのものはどうした剣星よ」

「今向かっているところあるよ」

「何のようじじいボク今眠…い」

わー凄い綺麗な人だなあ

「おおきたか、少し我慢せい時雨。新たな弟子になるかもしれん少年じゃ」

「弟…子、ボク香坂しぐれよろしく」

「霧沢明人ですよろしくお願ひしますしぐれさん」

「ヂュチュ」

「あれ、ネズミが」

「ボクの友達鬪忠丸」

「そうですかよろしく鬪忠丸君」

「ヂュチュウ」

「アイヤー珍しいね」

「え、何がですか」

「鬪忠丸は余り人に懐かない」

「そんなんですか」

「う…ん、ましてや他人の頭の上なんて絶対のらない」

「へーえ」

なんだ皆いい人じゃないかこれなら続けられそうだな

「何のようだじじい俺は今忙しいだ！」

こ、恐そうな人だなあ。で、でもきつとこの人きつと優しいにきま  
って

「ああ、なんだこのガキヤー！」

ひい、見かけどおり恐い人だったー、この人が剣道の先生だったら  
どうしよう

「入門希望者じゃよ」

「なにー」

うう、どうしたんだろうじろじろ見て。

「おいじじい、こんな才能なさそうな奴を弟子にとるのかよ」

ガーンいきなり駄目だしされた

「これ逆鬼失礼じゃろ、おぬしはもういいからあっちいってれ」

「ケツ」

いっちゃった

「うう、やっぱり才能ないんだ僕」

「大丈夫よ明人、逆鬼ああ言ってるけど努力すれば才能なんて関係ないよ」

「うう、ありがとうございますアパチャイさん」

「失礼遅れた」

何か今までで一番まともそうな人だな。

「私は岬越寺秋雨だよ、よろしくね明人君」

「あ、はいてっどうして僕の名前を」

「なあにくるとちゅう話声が聞こえたのだよ」

「あ、そうでしたかよろしくお願いします岬越寺先生」

「むっ」

「ど、どうかしましたか」

「いや、何でもないよ」

（長老あの子は）

（お、秋雨君もきずきおったか。あの子は兼ちゃんによくにておる。きつとよきライバルになるじゃろつて）

（しかしよくにてますな才能のないところまでそっくりだ）

（まあそこは秋雨君たのんだぞ）

（はい、わかりました）

二人ともひそひそ何話してるんだろう「ときに明人君」

「はい何でしょうか」

「君はなぜここ梁山泊にきたのかね」

「あ、はい実はですね」

明人はここに来たけい話を話した。

「そついうわけだったのかね」

まさかここに来たけいまで一緒とは、ふふ鍛えがいがありそうだ。

「さてさっきの話からすると君は剣道を習いたいんだね」

「はい」

「しかし君はまったく武術をやったことがないんだね」

「は、はい」

「それだと君の先生はこのしぐれになるんだがね」

「あ、そうだったんですかよろしくお願いします香坂先生」

「う…んしぐれでいい」

「しかしね明人君、きみの体力ではしぐれの修業はちとぎつい」

「はあ」

「そこでだがね、期限までの最初の三日間は体力作りをしたいんだ  
がいいかね」

「は、はい解りました」

「やっぱりか。ま、しょうがないか」

「しぐれも少しまっけてくれ」

「う…んこわさないでね」

「はっは大丈夫だよ」

え、こわす！

「あ、あのこわれるとわいったい」

「なに、少し表現が違っただけだよ」

「あ、なんだそうだったんですか」

「ではがんばってくれたまえ明人君」

「はい！」これから始まる梁山泊の修業にたえられるのだろうか。

再会と修業（前書き）

「やっと僕の登場だよ」  
「すまんねおくれて。」

「まっただよ」

「まあまあ兼ちゃん」

それでは第五話

「」「」「」

## 再会と修業

前回梁山泊に弟子入りをすることになった明人。明人はここでの修業にたえられるのか。そしてもう一人ここで修業している少年がいた。

「おら兼一もつとしっかりつけ」

「はい！逆鬼先生」

ドスッ ドスッ ドスッ

「おし、そこまで」

「ありがとうございました」

「次の秋雨の時間は自習だ型の練習をしとけ」

「はい。あ、それと逆鬼先生」

「なんだ兼一」

「さつきから皆さん慌ただしいですけど何かあったんですか」

「新しい入門希望者がきたんですよ」

「あ、美羽さん」

「おい美羽俺の台詞とんなよ」

「あらごめんあそばし」

「それより美羽さん入門者で」

「さっきそこでお爺さまが話していましたよ」

「なんだって！ごうしちやいらんない」

「あ、兼一さん」

side out

「それでは明人君、修業の前に名簿を書いてくれ」

「はい」

「ここに住所指名年齢電話を書いてね」

「はい」

「では月謝として2万円いただくね」

「ええ高いー！」

「一万円でもいいね」

「……………」

「五千円でいいね」

いきなり四分の一！

「こら剣星はしたないぞ」

「ま、まあそれなら」

「ちょっとまったー」

ドカーーー

「ギャアー」

「あ、こら兼一君何をやっている」

「皆さん入門者はどこですか！」

「」「」「そこ」「」

「え、あつこれはしつれい」

「イテテあ、大丈夫で…す」

「あ、あのどうかしましたか」

「も、もしかして兼一君」

「そうだけど君は」

「僕だよ僕明人、霧沢明人だよ。昔よく一緒に遊んだじゃない」

「明人…ああ！明人君か懐かしいな久しぶり」

「なんだ兼一君の知り合いだったのか」

「はい、昔よく遊んだんですよ」

「それでは感動の再会はそこまでにして明人君、修業のほうを始めようか」

「はい。よろしくお願いします。」

「ん、ああ！ちよっとまった」

「なんだね兼一君」

「明人君ここに入るのはやめるんだ！」

「え、なんで兼ちゃん」

「いいかいここはね」

「チヨワー」ガッ

「うっ」

「あれ兼ちゃんどうしたの」

「なあに、疲れたんだらうそれよりいくぞ明人君」

「はい」

庭にて

「ではまずは易しくいくぞ」

「はい岬越寺先生」

：

：

：

「ギャアー―岬越寺先生易しいんじゃないですかアアアア」

「易しいよ〜」

ガーンこの人てきにはこれが易しいのか…

「先生―指がちぎれそうです!!」

「そういつてちぎれた者はまだいない」

「じわー!!」

「次は空見ヶ丘公園まで行こうね」

「空見ヶ丘つて三駅もさきじゃないですか。タイヤと先生引きずつて歩いてけつていうんですか」

「ちがう!走つてだ!!」

「ぐわああああ!!悪魔くっ!!」

「遅い!亀に抜かれるぞ!」ピシッ

「ムチはやめて〜」

「やめてほしければ走りたまえ！カタツムリのほづがいくらか俊敏だぞ」

兼一が言おうとしていたのはこのことだったのか〜

「はっ！！」 ガバツ

「あ、起きましたか兼一さん」

「美羽さん、そ、そうだ明人は」

「明人？ああさつきのかたですね、それならさつき秋雨さんと走り込みに行きましたよ」

「ああ、遅かったか」

「いやー兼一さんにそっくりなかたでしたね」

「え、そうですか」

「はい、初めて家にきた兼一さんのようでしたよ」

「そ、そうですか」

ギギー

「あ、噂をすればですわ」

「明人ー大丈夫」

「あ、あうあう」

「ああ、やっぱり。むしろ僕の時よりも酷い」

「いやー少しとばしてしまった、美羽これでは帰れんだろうっから今日は泊めてあげなさい。家には私から電話を入れておく。」

「はい、わかりましたわ」

「死なないでくれ明人」

明人はこの修業の中生きていけるのだろうか。

## 決意（前書き）

今回は短いですが、ごつごつ「らんく」ください。

## 決意

「う、ううここはそうか梁山泊か。生きてるんだな僕」

「あ、起きたんだね明人」

「兼ちゃん…ここはいつたいたいどういうところなの！あの人達はいつたいたいなんなのさ！」

「ここはね、スポーツ化した武術になじめない豪傑や、武術を極めてしまった達人たちが共同生活をしている場所。」

「あの人達はここを道場と言わないでこう言っているよ【梁山泊】と」

何かとんでもないところにきてしまったな。

「兼ちゃんはここにきてからどのくらいたつの」

「ううんだいたい二ヶ月くらいかな」

「二、二ヶ月！！」

「よくそんなにもったね兼ちゃん。僕なんて今にもくじけそうだよ。」

「なに言ってるのさ、僕だって初日はそうだったよ」

「じゃあどうして」

「ほら僕昔から弱虫だっただろ、嫌な事いつもすぐ逃げ出しちゃっ

てた」

「だから決めたんだもう逃げないって！」

そうなんだ。兼ちゃんはこんなにも成長してたんだな。それに引き換え僕は……よし！

「兼ちゃん！」

「な、なんだい」

「僕決めたよ、僕も逃げない！兼ちゃんにあってきずいたよ」

「僕は逃げる事ばかり考えていたけどそれじゃだめなんだ」

「何事にも逃げないで立ち向かっていくことが大切だったんだ」

「兼ちゃんのおかげでそのことにきずいたよ。」

これからは一緒に頑張っていくよ。よろしくね」

「……こちらこそよろしく」

よおし、これからは気合い入れていくぞー

「ほっほっさっそくいい影響を与えたようじゃな」

「ええ、あの二人ならきつといい弟子になりますよ」

「これからが楽しみじゃわい」

宿泊 梁山泊（前書き）

七話です。

よろしくお願いします。

## 宿泊 梁山泊

前回兼一の話しを聞き自分も逃げないと決意した明人。明人は梁山泊の修業にたえられるのだろうか。

「そつえば兼ちゃん今何時だい」

「7時だけど」

「もうそんな時間！急いで帰らないと」

「その必要はないですよ」

「あの、貴女は」

「あ、自己紹介がまだでしたわね」

「私は風林寺美羽、私のお爺さま風林寺隼人の孫娘ですわ。美羽って呼んでくださいまし。」

「そうでしたか、僕は霧沢明人です。よろしくお願ひします美羽さん」

「それで必要がないというのはどういう意味ですか」

「それはですね、明人さん今日から休みの間に泊まることになったんですの」

「「ええ！！」」

「なっ何ですか美羽」

「そうですね、さつきは今日だけって言ってたじゃないですか！」

「さあ、私は詳しくはしりませんので。詳しくは秋雨さんから聞いてくださいまし」

「はあ、そうですね」

「それでは皆さんところにまいりましょう。兼一さん明人さんの右側をもってください私は左側をもちます」

「え、大丈夫ですよ自分であるけますよ……あれたてないや」

「まあ仕方ないよあんな修業のあとじゃ」

「そうですね、秋雨さんには私からいっておきますから、さっいまはてを」

「ありがとう二人とも」

「おや、やっときたかね」

「岬越寺先生僕がとまるってどういことですか」

「実はね、さつき君の家に電話して事情を話したんだがね、木下優子という人がでてね、泊めてやってびしばし鍛えてやってくださいといわれてね」

優子ーなんてことをー

「あっははそんなに嬉しいかね」

「自分の悲劇を嘆いているんです！」

「まあそういうことじゃから諦めたまえ。覚悟決めたんじゃろ」

「！！聞いてたんですか、いったいどこらへんから聞いてました」

「」「」「最初から」「」

「皆きいてたんですか」

「まあ決めた事だし、これからよろしくお願いします」

「ああ任せておきたまえ、君はもう梁山泊という崖から落っこちている」

「落ちる？登るんじゃないんですか」

「登るといふ表現は途中で止めることができる。だからここでは登るのではなく落ちるといふ」「へーえ」

「ここに来たからには途中で死ぬ事はあっても達人になれぬということはないよ」

「死ぬって、もし死んだらどうするんですか」

「どうって、埋める」

「埋めるな！」

ほんと大丈夫かな僕

「まあ大丈夫だよ明人僕も泊まることになってるし一緒がんばろ」

「う、うん」

「まあ気難しい話しはここまでにしてそろそろ飯にしようかの」

「あ、はい今もってきますわ」

食事後

「とほほ、まさか食事までろくにくえんとは」

「まったくだよ、アパチャイさんと馬先生いつになったら自分のを食べてくれるんだろ」

グウ~~~~

「「お腹減った」」

「失礼ですわ」

「あ、美羽さんどうかしましたか」

「秋雨さんがもって行ってやれと」

「「あ〜ご飯だ」」

「どうぞめしあがってくださいまし」

「「いただきまーす」」

「「ごちそうさま」」

「はいおそまつさまでしたそれではおやすみなさい」

「おやすみ美羽さん」

「ご飯ありがとうございました」

「美羽さんてやさしいね」

「でしょ、僕はいつか美羽さんを守るくらい強くなりたんだ」

「僕は大切な人たちみんなを守るようになりたいよ」

「そうなんだ、これからがんばろうね」

「うん」

こうして夜はふけていった。

## 久々の帰宅（前書き）

八話目です。

よろしくお願ひします。

## 久々の帰宅

梁山泊に泊まり修業することになった明人達。  
その壮絶な修業を何とか堪えきることができたのだった。

「よし、そこまでだ。これで何とか修業に堪えうる体力はついたはずだ。次からは技の修業にはいれるよ、よかったね明人君」

「えー先生ずるいー」

「ん、何がだねケンイチ君」

「だってだって、僕の際は技の修業こんなに早く入んなかったのに明人だけずるい」

「何を言っている兼一君ずるくなんかないよ、ほら明人君を見てみたまえ」

「え、明人！大丈夫」

「うう、なっ何か杖になるものを」

「杖だね、えつとどこかなにか」

「兼一！アパチャイこれ作っよ。もってってやりなよ」

「ありがとうございますアパチャイさん」

「明人これ」

「あ、ありがとう」

「それにしてもよく耐え切った明人君。正直生き抜けるか不安だったのだよ」

「そ、そんなむちゃしないでくださいよ」

「すまんすまん、お詫びにこれをあげよう」

「お茶、ですか？」

「ささ飲んでみたまえ」

「はあ、いただきます」

ゴクツ ブツーーー

「にっ、苦い何なんですかこのお茶」

「お茶？誰がお茶なんていったかね、それは剣星秘伝の漢方薬だよ。ささ飲みたまえ疲れがとれるよ」

「い、いやですよこんなに苦いの」

「そうか、ではしかたがない」  
ガッ

「えっ！な、何するんですか馬先生、こ岬越寺先生なにを、やつ止めてお願い許してー」

ゴポゴポゴポ

「ギャアーーー」

「ああ明人嘆かわしい、まるで自分を見ているかのようだ」

「ゲホッゲホッ何するんですか！」

「まあそんなに怒らないで、それよりもう動けるだろう」

「えっあ、ほんとだ」

「それではそろそろ帰りなさい家の人も心配してるだろうし」

「はい先生、ありがとうございます」

「うむ」

梁山泊 side

「それでどうじゃったかね明人くんは」

「はい、やはり才能はないですなただ」

「ただなんじゃ」

「彼はもしかしたら観の目がすごくいいのかもしれない」

「なんと！観の目とな」

「はい、きつと普段の日常で鍛えられたのではないかと」

「ほっほ鍛えがいがありそうじゃ」

「ええ」

side out

「へー兼ちゃんはそんなことがあったんだ大変そうだね」

「ほんとだよ。おかげでラグナレクって組織にねらわれちゃうし」

「何か力になれることがあったらいいね」

「ありがとう明人、でも今は自分のことに専念してよ」

「う、うん」

「勝てるといいねその試合」

「ま、まあ精一杯頑張るよ。それじゃあ僕こっちだから」

「うんまたねー」

木下家 side

「姉うえ明人は大丈夫だろうかの」

「大丈夫よ秀吉、さっき道場に電話したらもう家に向かっているって」

ピンポン

「あっ噂をすれば秀吉あけてきて」

「わかったぞい」

「ただいまー秀吉」

「お帰りじゃ明人、姉うえもリビングでまっているぞい」

「お帰りなさい明人」

「ただいま優子」

「道場ねほうはどうだった」

「死ぬかと思っただけどなんとかがんばっていけそうだよ」

「そうそれはよかったわ」

「それとね兼一君にあえたんだ」

「兼一君で、昔遊んでたっていう」

「そうだよ、道場にかよってたんだ」

「よかったのう明人」

「うん」

「それじゃあ今日はごちそうにしましょう。明人が無事に帰ってきて  
たんだし」

「そうじゃの」

「無事って」

試合の日まで後一週間、明人は日向君に勝てるのだろうか。

## 技の修業（前書き）

九話目です。

よろしくおねがいます。

## 技の修業

学校後梁山泊にて

「では今日から技の修業に入る」

「はい、よろしくお願ひしますしぐ…香坂先生」

「しぐれで…いい」

「ところで皆さんはなんているんですか」

「いえ、しぐれさんがやりすぎないようにみはりをしよつと」

「アパチャイも見張るよ！」

「おいちゃんも」

「しっけい…な」

「そうですねよ、しぐれさんがそんな非常識なことをするわけないじゃないですか」

「だといいんですが」

「それで、まずはなにか【ヒュッ】らぁーっ！？」

「取れ…ナイフの使い方…だ」

「いきなり真剣でやる人がいますか!？」

「……だめか？」

「あたりまえです!!」

「アハハなんでこんなめに」

「やるのは剣道の試合なんですから竹刀でやってください。せつかく明人さんがもってきてくださったのですから」

「わかつ…た」

「さっどうぞ明人さん」

カタカタ「はっはい」

シュバババ ピツ

パク ズル ポキツ

「えっ!?!キヤー!?!」

パタ「あっ!?!」

「うほー」 カシヤ カシヤ

「……………」

「キヤー!」 カシヤ カシヤ カシヤ

「明人くしかつりく!?!」 バチバチ

「何を騒いどる？」

「撤退ですわ〜」

「まあ、なんだ。【ビィィィィ】要は当たらなければ、ナイフも竹刀もただの道具にすぎんて」

「じゃが、しぐれはどちらでも必ずあてるからのつ」

「冷静によく観察してスキをさぐるぬのじゃ」

「新聞紙でも大丈夫なのか？」

「かまえて……………」

「えっ？は、はい」

「…………今は剣道じゃないかまえてみて」

「え、でも」

「まあいいから今はしぐれの言つとおりにしておれ明ちゃん」

「明ちゃんて…………」

「明人…………早く」

「あ、はいこうですか」

「そこから左手にもって右手は腰、体を閉めて急所をかくす」

「い、いじですか」

「うん、いい…よ。試合のときもいじかまえてね」

「は、はあ」

「それじゃあ今から技見せるからかまえて…て」

「はい」

「いく…ぞ」 ダッ

「うわ、いっいまのは」

「これが出来たら…きっと勝てる。やってみ…て」

「はい、ヤアー」

「あまい」

「いー」

「もっとはやく」

「ででー」

三時間後

「はあ、はあ、はあ」

「うん、すこしはよくなった」

「よし、ではそろそろしぐねからもうちこんでやりなさい」

「う…ん」

「なにがそろそろ…！むりっす、しんじゃいます」

「明ちゃん、戦いにおいてもっとも大切な物はなんだと思うっ？」

「えっ…力？次に技かな？」

「ちがう…！勇気じゃ…！」

「兼ちゃんにも言ったが、勇気がなくば、相手のすきを冷静に見抜  
けぬ…！」

「勇気がなくば力はすくみ、勇気がなくば技はけっしてかからない  
じやろっ…！」

「…僕にはその勇気がない」

「ないなら、鍛えればよいではないか…！」

「え…？」

「なに…とも慣れじゃよ…！」

「しぐねや。…ギリギリのとけるまで追い込んでやりなさい」

「う…ん」

「な？え？え？追い込む？」

「大丈夫明ちゃん、技ができるくらいにするし、恐怖で死んだ者はおらんよ」

兼ちゃんから聞いたあざ名武器の申し子香坂しぐれさん…年齢不肖で…謎のかたまりみたいな女だけど…

「いく…よ」

「どこへ…？」

そのあざ名の意味だけは、この日、死ぬ程理解しました…

翌日学校

「明人日向と試合することになったんだって」

「やあ明久早耳だね」

「わしがしませたのじゃ」

「あっ秀吉」

「しかし大丈夫なのかお前が日向とやって、下手したら殺されるぞ」

「やあ雄二、皆も心配してくれてありがとう。でも大丈夫だよ」

「秀吉が言っていた道場ってまともなところなの」

「やだなあ美波まともなところだよ」

「凄く心配」

「康太までなにを」

「それじゃあ僕時間だから」

「あ、ちよつと」

「おい秀吉、明人のやつ本当に大丈夫なのか」

「なんか目がいつちやってるよ」

「まるで洗脳されてるかのよう」

「なんか少しやつれてるわよ」

「大丈夫じゃよ。あやつがこんなになっても止めてないんじゃない。今は明人を信じようぞ」

試合（前書き）

「とうとう日向君と試合だよ。どうしよう勝てるかな」

「勇気だ…せ」

「は、はら」

「それではどうし…ぞ」

## 試合

技の修業を始めて六日間とうとう試合一日前

「よしそこま…で」

「あ、ありがとう…じやい…ました」

「うむ、これな…らきつと勝て…る」

「は、はあ」

「ほつ明ちゃん、しぐれの修業を生きぬいたんじゃ自信持ちなさい」

「そ、そうですね。よし絶対勝つぞ」

「そのいき、絶対かつよう…に。負けたら切っちゃーう…ぞ」

「ええ!!--」

「なーんちゃっ…た」

「……て、でしよう」

「ううん、ボクン家…じゃ、たつていつの」

「これ、でたらめいうでない」

「あ、修業終わりましたの、おめでとつじやいますですわ」

「おめでとう明人」

「ありがとう、兼ちゃんに美羽さん」

「試合勝てるといいね」

「うん、ありがとう」

「おい、明人」

「な、なんですか逆鬼先生」

「しょーじきここまでもつとは思わなかったぜ。根性あんなおまえ」

「あ、ありがとうございます」初めてほめてくれた！

（僕のとぎと同じこと言ってますよ）

（てれやなんですわ）

「頑張るぞー」

翌日昼

「今日が試合の日だけど大丈夫なの明人？」

「大丈夫だよ明久」

「だが相手はあの日向だぞ」

「けんかで何人も病院送りにしたって噂」

「不安にさせないでよ二人とも」

「いつそのこと逃げちゃたらどう」

「それはだめだよ」

「どうしてよ」

「もう逃げないってきめたから！」

「それよりご飯食べようよ、いただきまーす」

「ヂュー…ゲプ」

「僕のお弁当がー！」

「どうしたの明人、うわっネズミだ」

「きたないわねー」

「ヂューー！！」

「なんだ、いつちよ前に怒こってやがんのか」

「あ、雄二うかつにさわっちゃ」

「ヂューー！！」「ガリッ」

「イテェー!?」

「こいつよくも!」

「ヂュチュチュユーチユイ」

「落ち着いてよ雄二、鬪忠丸君も」

「なんだ明人おまえのペットか?」

「うっん僕先生のだよ。それに美波、鬪忠丸はお風呂好きでとっても清潔だよ、汚いつていつちや失礼だよ、一説ではしゃもじより綺麗だつて言われるよ」

「あらそうだつの、ごめんね鬪忠丸」

「ヂュチュチュユウ」

「それと雄二、鬪忠丸は自分がみとめた人以外には自分を触らせないから迂闊に触らないほうがいいよ」

「そうか、しかしだな明人お前が触れるのわ解る、だが」

「うわ、何だよ鬪忠丸」

「なんで明久が触れてるんだ!」

「さあ、なんで鬪忠丸君」

「ヂュチュ」

「え、紙とペン、はい」  
サラサラ

「チュ」

「えーと、こ・い・つ・ば・か、だって」

「ムキー！ネズミにまで馬鹿扱い！？」

「はっはっは、こいつ頭いいな明久のことを一発でみぬくなんて」

「それより闘忠丸君何しにきたの？」

モゾモゾ「チュ」

「え、手紙？」

「なんて書いてあるんじゃない」「ええと、頑張れ明人、相手にのまれるな【しぐれ】……しぐれさん……ありがとうございます」

「いい人じゃのう」

「よし、勇気百倍頑張るぞー」  
ぐ~~~~

「まずは腹ごしらえじゃな。ほれわしの弁当わけてやるぞい」

「ありがとう秀吉」

放課後 部活終了後

「へっよく逃げないでいたな、それだけは褒めてやるぜ」

「誰が逃げるもんか！」

「威勢だけは言いようだな」

：

：

「心配で見にきちまったが大丈夫かあいつ」

「いざとなったら泊めよう」

「四人でかかれば大丈夫」

「……………」

「どうしたの秀吉？」

「ん、いや何でもないぞい」明人の目、昔見たあの時のようじゃ

「それじゃあいくぜ！おら〜」

「ちょっと、まだ防具付けてないよ！」

「へっそんなもん必要ねえよ、おらおら〜」

「グッ！」

「まずい、止めに入るぞ」

「ヂュチュー」

「なんだ！いくなつてのか」

「どいてよ鬨忠丸。明人殺されちゃうよ」

「まつんじゃ二人とも」

「秀吉！？」

「いいから見とるんじゃ、明人の目まだ死んでおらん」

「おらおらどうした雑魚。守るだけで精一杯か！」

「フン」「ビュッ」

「おっと、へへ当たらないぜ」

「次はこっちからいくぞ」

「へっ、なんだそのかまえは」

「うおおおおおー！」

「返り討ちだ！」

「でやっ！」

「ふっあまいぜ」スカッ

「なに！手だけだと！」

「うおおおー」「ビュッ

ドカツ」「グワアッ」

「香坂流…五月雨！」

「か、勝っちゃたよ」

「い、いや、それよりなんだあの技わ」

「あれは五月雨って技だよ」

「ッ！誰じゃ」

「あ、警戒しないで僕は白浜兼一、明人の友達さ」

「そうか、それならおまえに聞くあの技わなんだ」

「あの技は五月雨。もっている武器を一瞬で持ち替えて相手を切り付ける技だよ」

「凄い…」

「うん僕あんなの初めて見ちゃたよ」

「たしかにのう」

「ああ並の努力じゃなかったんだろうな」

「うん、僕もびっくりするくらい頑張ってたよ」

「お、日向がおきたぞい」「ググッ」

「大丈夫かい日向君」

「自分よりも相手の心配とは、お人よしだな明人」

「ち、チクシヨー！妙な技使いやがって！おいおまえらでてこい！」

「な、なんのまねだ日向君」

「ちょっとボコルだけで勘弁してやるうかと思ったが止めだ。おまえら、やっちまえ！」「クッ！」

「まずい、いくぞ明久」

「うん」

「まっつて皆！」

「何だよ白浜！」

「ここは僕だけでいく。皆は危ないからまっつてて」

「何いつてるの白浜君！」

「そうだ！おまえみたいな弱そうなやつがいつてなんぬる」

「死ににいくようなもの」

「グッわ、悪かったね見た目弱そうで、でも僕だって強いんだぞ、ウオオオオ」

「あつおい、たくあいつ、皆いくぞ」

「」「おう(じゃ)」「」

「明人お！無事…か？」

「ウワアアアコナイデー」

「グワ」

「なっなんだこいつ」

「めっちゃくちゃ強い」

「てゆうか近ずけない」

こ、こんな時のためしぐれさんに教えてもらっておいてよかったー

梁山泊 side

「おいしぐれ」

「な…に逆鬼」

「あの明人ってガキ大丈夫か？聞いた話しによればその日向ってやつ相当なワルらしいじゃねえか」

「試合に負けてたら大人数で襲ってくるんじゃないのか」

「大丈夫、いざとなった…ら闘忠丸が…いる。それ…に、兼一も見

に行った」

「おお、兼一がいったんなら安心だな」

「でも… 必要ない」

「えれえ自信だな」

「五月雨と一緒に… もう一つ技教えた」

「ほうどんな技だ」

「明人の観の目… をつかって相手の動きを見切って切り返す技」

「そのなも見切り切り」

「ネーミングセンスはイマイチだな」

「エッヘン！」

「いや、褒めてねえよ」

side out

「ウオオオオくらえ見切り切り」

「ガハッ！」

「チクシヨ―霧沢―おめえ いったいななんだ」

「日向君！」

「死ねえー！！！」

「クツ、見切り切り」

「グツその程度じゃ」

「ウオオオオ」

「なに！」

「デヤアアアア！！！」

「ぐわああああ」

「ちく…しょう」 バタッ

「はあ、はあ勝った…勝ったんだ！あの日向君に」

「ヤッタアアアアー」

明人は無事日向に勝つことができた。

これで明人は、無事平穏な生活を送れるようになるのだろうか。

勝利のさきにわ(前書き)

「勝つには勝つにはかっただけど大変なことになってしまった」

「まあ、がんばれ」

「いや〜〜」

## 勝利のさきにわ

前回からくも日向に勝利した明人。そのさきにはいつたいなにがあるのだろうか。

「勝った、僕は勝ったんだヤッタアアア―」

「「「「おめでとう明人」「「「「」

「え、皆！それに兼ちゃんもどうしてここに」

「おまえが心配でな」

「そういつこと」

「ありがとう皆」

「それにしても明人強くなったね」

「ああ、俺ももうかなわないかもな」

「そんな、まだまだだよ。それに白浜君のほづが僕よりもずっと強いよ」

「なに！こいつそんなに強いのか」

「信じられない」

「グスッ」

「ああ！兼ちゃん落ち込まないで。皆からかわないですよ」

「すまんすまん、そういえばまだ名のつてなかったな。俺は坂本雄二、雄二呼んでくれ」

「僕は吉井明久、明久てっよんでね」

「土屋康太…康太でいい」

「わしは木下秀吉じゃ、秀吉とよんでくれ」

「うんわかったよ、雄二君、明久君、土屋君それに秀吉さん」

「…兼一、よく間違われるのじゃがわしは男じゃ」

「え、まさか冗談やめてよ秀吉さん」

「いや冗談じゃないんじやが」

「またまたあゝ」

「兼ちゃん本当だよ。秀吉は男だよ」

「え、うそ！こんなに可愛いのに」

「だからそういったじゃろ」

「そうだったんだ、ゴメンね秀吉君」

「解ればいいのじゃ」

「それじゃあ帰るつよ昏」

「ああそつだな」

「遅っそくなりました！蹴りの古賀参上、日向しめるやつってだれ」

「き、君は」

「おや、君は白浜君じゃないか」

「おい兼一おまえの知り合いか」

「きおつけて皆、彼はラグナレクの蹴りの古賀だ」

「ラグナレクだと！」

「なに雄ニラグナレクって」

「ラグナレクってのはこちら一体をしめている不良グループだ」

「君よくしってるね、それより日向君知らない」

「日向ならそこでのびてるよ」

「ありや、日向まけちゃたの、なっさけないな。そこの君達だれが日向君を倒したの」

「え、明人だけど」

「馬鹿、明久なにばらしてんだ」

「あ！しまった」

「へーその君か」

「古賀君、明人にてをだしたらゆるさないぞ！」

「おーこわ、安心しなよ今日はなにもしないよ。でもきおつけなよ  
明人君これから君はラグナレクにねらわれるよ」

「どういづことー！」

「さー、どういづことでしょう。じゃーねー」

「あ、ちよつと、いっちゃった」

「ゴメン明人僕のせいで」

「大丈夫、これからのことは先生達にそうだんするよ。それに部活  
もやめなきゃいけないみたいだし」

「え、なんで？」

「わかんねえのか明久、いいかここに倒れているのは全員剣道部の  
一員、そのなか部活にのこったりしたらどうなる」

「…確実にやられるね」

「そういづことだ」

「これから大変だろうけど頑張れよ」

「いざとなったらてをかす」

「ありがとう皆」

梁山泊

「なるほど大変な事になったね明人」

「ええ、どうしましょう」

「実はね前から話していたんだがいい手がある」

「え、どんなですか」

「これから君は私達全員のもとで修業をおこなってもらおう」

「へえ？」

「なあに大丈夫、死なせはせんよ。弟子は生かさず殺さずだからね」

「いやでも」

「全員の許可はとってあるから心配無用だよ」

「だから」

「よかったのう明ちゃん。全員から修業受けれるなんて、兼ちゃんよりも豪華じゃよ」

「いや、無」

「ちなみに君に拒否権はないよ」

「えええ！」

「みんな君の身を思つてのことだ、頑張ってくれ」

「は、はあ」

「いらつしゃい地獄へ」

「お、おじゃまします」

「ふふ、二人とも頑張ってくださいまし」

ラグナレクに目をつけられてしまった明人はこれからどうなつてしまふのか。

そして梁山泊の地獄の修業に堪えられるのだろうか。

登場新島春男（前書き）

少し書きかたかえました。  
ではどうぞ。

## 登場新島春男

新「読者しょくんまたせたな！新島春男様の登場だー！」

兼「なに騒いでるんだ宇宙人」

新「いや、一樣なのっておこうと思って」

兼「そうか、それならすんだんだからあっちいけ、美羽さんとの食事の邪魔をするな」

新「つれないなー兼一、僕ら親友だろ」

兼「宇宙人を親友にもった覚えはない」

新「それでさあ兼一ちょっとたのまれごとしてくれなあ〜い」

兼「無視するな宇宙人、それで何だよたのみって」

新「いや、ただちょっとしめてもらいたい奴がいるんだ」

兼「やだ」

新「即答かよ！」

美「まあまあ兼一さん、話だけでも聞いてあげたら」

兼「美羽さんがいうなら」

新「おお、サツスガ兼一話しがわかる」

兼「いいからはやくはなせって」

新「わかったわかった、しめてもらいたい奴はこいつだ」

兼「なっ」

美「まあ」

新「こいつの名は霧沢明人文月学園の一年で、最近名の知れてきた奴だ。」

霧「クシユツ」

秀「なんじゃ明人かぜかの」

霧「ううん、誰か噂でもしてるんじゃないかなあ」

雄「確かに明人最近有名人だからな」

康「主に不良に」

霧「二人とも嫌な事言わないでよ」

新「ラグナレクに誘われているらしいから今のうちにしめとけ」

兼「あっそじゃあむこういけ」

新「な、聞いてたのか兼一ラグナレクだぞラグナレク」美「ほほ、大丈夫ですよ新島さん」

新「？大丈夫とはどういう事ですか」

美「その方は兼一さんの昔からの知り合いですわ、ラグナレクに入るなんて事は絶対にありません」

兼「そういうことだわかったらあっちいけ宇宙人」

新「うわっ」

ち、しょうがねえ自分で調べるとするか。

数日後

ふむ、調べてみたが得が変わったところわないな。あの二人からの情報どうりラグナレクの勧誘も断ってるようだし。いやむしろおわ  
れてるか。

それにしてもあいつ強ええな。こりゃ弱みでも握っててごまにしくか。

霧「はあー」

美「あらどうしたんですの」

霧「いやですね、なんか最近誰かにつきまとわれてるきがするんですよ」美「ラグナレクの人でわないんですの」

霧「いえ、ラグナレクならいつもすぐ襲ってくるから違うと思いま

す

美「そうですか、まあ何にせよ気をつけてくださいまし」

霧「はい」

学校

美「のような事をいつてらしたんですの」

兼「そうなんですか明人がそんなことを」

美「何か兼一さん心あたりがある人しりませんか」

兼「そうですねー、あついた」

美「誰ですの？」

兼「今からあいにいきましょう」

美「はいですわ」

新「なんのようだ兼一俺忙しいんだ、要ならてみじかにすませるよ」

兼「新島、おまえこの頃明人に付き纏ってないか」

新「いいや別に」

兼「本当だろうな」新「本当だっつってんだろ、要がすんだんなら

あっちいけ」

兼「あ、おい。たつく、どう思います美羽さん」

美「おそらく嘘ですわね」

兼「やっぱりそうですよね」

美「明人さんに知らすだけしらしておきましょう」

兼「そうですね」

文月学園

霧「うんそうだったんだ、ありがと気をつけるよ。悪魔顔だね了解」

秀「誰からじゃ」

霧「兼ちゃんからだよ、さっきいったたストーカーの情報もらったんだ」

雄「ほう、それでだれなんだ」

霧「本名は新島春男、悪魔顔だからすぐわかるって」

明「す、凄いとくちょうだね」

霧「まあこれで安心だよ」ち、最近なんか警戒されてる感じだぜ。さては兼一の奴いれじえしやがったな。

「おいそこのおまえ」

新「ひいつな、何でしょうか」

「さつきから奴をつけていたな、やつもしりあいか」

新「い、いえちがいますよ」

「嘘つくな、しってるぞ前からあいつのことつけてたたる！」

新「な、なぜそれを」

「ほらやつぱり！」

新「し、しまった」

「テメーよくも騙してくれたな、ぶん殴ってやる！」

新「ひいいいっ」

霧「ヤメロー！！」

「テメーは霧沢」

霧「一般人にてをだすな」

「ちようどいい、今度こそぶちのめしてやる！野郎どもかかれ！」

「」「うおおお！」

霧「うりゃー！」

ドカツ バキツ ドカツ

「くくくわああああ」「」

すげーパンチ一発でしとめちまった

霧「ふーそこの君怪我ないかい」

新「あ、ああ」

兼「おーい明人」

美「大丈夫ですか」

霧「兼ちゃんに美羽さん、大丈夫です」

兼「あ、新島なにやってるんだ」

霧「あ、やっぱりこの人がそうなんだ、不良にからまれてたところを助けてあげたんだ」

兼「新島！やっぱりつけてたんだな」

新「そのことについてはあやまる、しかし一つ教えてくれ」

霧「なんだい」

新「俺の情報ではおまえは武器をつかって戦うとある」

新「しかしなぜさっきの戦いでわ武器をつかわなかったんだ」

霧「ああそれはね、武器をつかってこない相手に武器を使うのは卑怯だと思ってるね」

霧「だから武器を使わない相手には素手で戦うようにしてるんだ」

新「なるほどな、ありがとよ」

兼「あ、こら新島何処へいく。まだ話しは終わってないぞ」

新「安心しろもう付き纏ったりはしねえよ」

兼「本当だろうな」

新「ああ、今度は本当だ。じゃあな」

美「これでストーカー騒ぎも解決ですわね」

霧「うん、二人のおかげだよありがとう」

兼「いいよお礼なんて」

美「当然のことをしたまでですわ」

霧沢明人…奴は兼一と同じでお人よしだ。これ以上調べなくてもいいだろう。

これからはこいつらを利用しまくってやるぜ！ウヒヤヒヤヒヤヒヤ



## 人物紹介1（ケンイチ）（前書き）

今更ですが人物紹介です。

多少ネタばれをふくんでいます。

## 人物紹介1（ケンイチ）

霧沢明人……本作品の主人公。梁山泊の二番弟子で、「史上最強の弟子二号」になる予定の少年。

兼一の習っている武術+しぐれの武器の使い方も教わっている。師を長老、逆鬼師匠、岬越寺師匠、馬師父、アパチャイさん、しぐれさんと呼ぶ。一人称は「ボク」。

兼一、龍斗と別れてから親を事故で失い、しりあいの木下家に引き取られる。

生まれつき不幸な体質で不幸なことに見舞われてるが梁山泊に入ってから減ってきている。

兼一の決意を聞き自分も逃げないときめる。

白浜兼一……本作品の第二の主人公。梁山泊の一番弟子で、「史上最強の弟子」になる予定の少年。武術家としては異例の空手柔術、中国拳法（形意拳、八卦掌、心意六合拳、八極拳）、ムエタイ、武器の知識及びそれに係る発展的使い方など多種の武術を学んでいる。師を長老、逆鬼師匠、岬越寺師匠、馬師父、アパチャイさん、しぐれさんと呼ぶ。一人称は「ボク」。トレードマークは絆創膏と太極バツジ。

元々はイジメられっ子で、フヌケのケンイチ（通称：フヌケン）と呼ばれていた。

イジメ対策のために入部した空手部で同級生の大門寺と退部を賭けて試合をする破目になり、友人となった美羽に教えを受ける。美羽との特訓の後大門寺に勝利するが、敗れた大門寺に同情してしまい、空手にない技を使つての勝利だったと自らを反則負けとし、退部した。この一件で空手部の副主将筑波、さらには学校の不良に目を付けられ、その対策のために美羽の紹介で梁山泊に入門した。

風林寺美羽……本作のヒロイン。梁山泊の長老・風林寺隼人の孫娘。容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能。背後に立たれると人を投げ飛ばしてしまう癖を持っている。性格は品行方正で、誰に対しても優しいが、意外におっちょこちよいで寂しがり屋な面もあり、また嫉妬深さも併せ持っている。やや文法がおかしなお嬢様言葉で話し、語尾に主として「〜ですわ」、「〜ですの」と付けている。一人称も「私<sup>わたくし</sup>」である。梁山泊の家事全般、家計のやりくりを一手に引き受け、梁山泊は彼女がいなくてもはや経営が立ち行かない。猫とあんみつが大好き。元は名門校で有名である松竹林高校に通っていたが、目立ちすぎて友達がほとんど出来無かったため、荒涼高校に転校してきた。そのことから学校内で目立つことを嫌い、伊達眼鏡をかけていた。学校では新体操部に所属している。スタイルが良い（特にかんりの巨乳）な為、ほのかとキサラにひがまれ、敵意を持たれている。

風林寺隼人……美羽の祖父。「無敵超人」の異名を持つ、筋骨隆々の巨体を持つ飄々とした老人。優れた人格者で幾多の方面で円熟の極みにある（ただし、機械類に関しては疎い）。曲者揃いの梁山泊の豪傑らをまとめ上げる長老であり、豪傑中の豪傑でその強さはまさに史上最強である。その武術は我流ながら生涯無敗で、「人手裏剣」「亡心波衝撃」など計108つの必殺技を持つ。本来の実力を0.0002%（50万分の1）に抑えた状態でも、弟子クラスの実力では到底太刀打ちできない超人的な実力者で、鮫や熊を素手で倒したり、海の上を走ったり、プールの水を蹴りで割ったりとその超人ぶりを度々発揮している。また、通常ならば廃人になる危険を伴う“静”と“動”の同時発動も、右半身と左半身を分割して制御することで可能とする。決して弟子をとらないことで有名だが兼一と明人に対しては彼らの心意気に触れたのか秘伝の技を伝授している。修行に関しては秘密主義であり開始当初は修行者本人もこれがどのような修行なのか理解仕切れていないケースが多い。

一人称は「ワシ」。

逆鬼至緒・・・・。「ケンカ100段」の異名を持つ空手、古流空手の達人。あまりの強さゆえに空手界を追放された過去を持つ。腕力、脚力ともに人間離れしておりその腕から突き出される突き、蹴りはコンクリートの壁を粉碎し、手刀は巨岩を両断、貫手は厚畳を貫通させるなど五体を武器のように鍛え上げている。強面で頬から鼻にかけて横断する一文字の傷があり、素肌の上に革のジャケツトと言いついかにも兼一が苦手そうな外見をしているが、性格は面倒見がよい兄貴肌の人物。しかしそれを悟られるのが恥ずかしいらしくわざとそつけない態度を取ることが多いが、とにかく嘘が下手なのでバレバレである。また、小さい子供におじさんと言われた時には「お兄さん」と訂正させるなど愛嬌のある面も。

岬越寺 秋雨・・・・。「哲学する柔術家」の異名を持つ岬越寺流柔術の達人。柔術着にストレートの口髭が特徴的なオールラウンダー。彼の柔術はあらゆる物を取り込んで昇華し、「岬越寺流」と呼ばれる独自の流派と化している。20年以上に及ぶ独自のトレーニング理論により、全身の筋肉をピンク筋（瞬発力の白筋と持久力の赤筋の両方を併せ持つ性質の筋肉）へと変えており、梁山泊の師匠らの中でも比較的小柄、痩身でありながら、逆鬼さえ一目置くほどの恐るべき筋力を誇る。総計して数億回にも及ぶ投げ技の修練をこなしており、相手の関節を空中で極めることも可能であり、対人数戦では遺憾無く投げと関節技を同時に披露する。一人称は「私」。

冷静沈着・才気煥発で、独自の悟りを開いている。ゆえに、長老が居ない時は大体彼が梁山泊のまとめ役。

馬剣星・・・・。「あらゆる中国拳法の達人」と呼ばれる中国拳法の達人。中でも敵の攻撃を受け流して無力化する「化勁」を得意

とする。一人称は「おいちゃん」。兼一よりも背が低い小柄な中年の中国人。小さい体型からは想像もできないような優れた内功、外功を誇り一定以上の腕の者でないと逆に攻撃が勁により跳ね返されてしまうほど。鳳凰武俠連盟の最高責任者で中国本土では実に10万人の弟子を擁するという一門の長であり、中国武術界でもその名を知らぬ者はいない。しかし「飽きた」と言う理由で妻と息子に全権を委ね日本にやって来た。常日頃からその名を討ち取るうと殺し屋達に狙われている。

アパチャイ・ホパチャイ・・・裏ムエタイ界の死神」、「心優しき破壊者」の異名を持つムエタイ、古式ムエタイの達人。タイ人。一人称は「アパチャイ」。髪色は水色。タイの貧しい村で孤児として生まれ、幼い時から命がけの裏の戦いを生き抜いてきている。梁山泊の中でも際立って目立ち、よくアパチャイを見て悲鳴をあげる者も少なくはない。とある南の国でグスコリー一味という海賊集団の用心棒をしていたが、長老が世直しの旅中にグスコリー一味が略奪行為を行っていた近隣の村に差し掛かり、仔細あつてそのまま日本まで付いて来てしまった。かなりいいかげんな日本語を覚えており、普通はカタコトなのに、間違った日本語は流暢に喋る（まともな日本語をしゃべる時はたいいてい誰かから聞いた言葉が、テレビの内容を聞いた通りに喋るだけ）。

香坂しぐれ・・・「剣と兵器の申し子」の異名を持つ香坂流武器術を極めた武器格闘の達人。一人称は「ボク」。年齢不詳（推定十代後半から二十代前半）の美女。東洋において最強と呼ばれる武器使いであり、その剣捌きは飛来する銃弾を斬り捨て、圧倒的に不利な状況から身近な物を武器として扱い切り抜ける応変力も持ち合わせる。十数年前、刀鍛冶の父親が秋雨との決闘により死亡した後、秋雨の友人であった香坂八郎兵衛の養女となり武術を教わる。幼少時より卓越した身体能力を誇っており秋雨を驚かせている。八郎兵

衛が死去した後に秋雨を頼って梁山泊に住み込み、時折、遠出してはかつて父が作っていた「人斬り包丁」を回収している。

闘忠丸……しぐれの相棒と言うべきネズミ。ネズミとは思えないほど賢く多才で、音楽面では天才であるジークが苦悩した譜面を完璧に直したこともある。ねずみ拳(?)の使い手でネズミながらに戦闘能力も中々のもので、猫よりも強く、しぐれからも殿を任されるなど信頼されている。梁山泊の面々とも仲が良い。お風呂が大好きで、シャモジより清潔との説もある。新聞の経済欄の切り抜きと携帯を使ってデイトレードもして儲けており、梁山泊で最も金持ちになっている。アルコールもいける口らしく、逆鬼が飲んでいるビールと一緒に飲んでいたこともあった。鳥獣戯画の兎に恋をしているらしい。

白浜ほのか……妹。兄が大好きの中学生で、いつの間にか兄と仲良くなっている美羽を「ムチプリ」と呼んでライバル心を燃やす。兄の様子をのぞきにいとこうと梁山泊を訪れて助けられて以来、アパチャイやしぐれとは大の仲良しで、アパチャイはほとんどほのかの乗り物と化している。

## 兼一の修業(前書き)

短いですがよろしく願いします。

## 兼一の修業

岬「よし、では今日も修業をはじめる」

兼「はい、岬越寺先生」

岬「まずは基礎からだ、いつものようにこの、投げられ地藏グレートを使って投げの練習だ」

兼「はい！」

兼「そりゃ」「ドスン」「そりゃ」「ドスン」

地藏を何度も投げていく

30分後

岬「よし、そこまでだ兼一君。次は受け身の練習だ」

兼「は、はい」

岬「横、受け身、前回り受け身」「ダンッ　ダンッ」

岬「いやあ、それにしても兼一君君は受け身だけは上手くなったね。受け身のみクロオビ級だよ」

兼「は、はあ」

岬「おっとそろそろ逆鬼君の時間だね。庭にいくといい」

兼「はい」

逆「おし来たな兼一、まずはまきわら突き千回だ」

兼「はい、せい」「ドス」「せい」「ドス」

逆「よし突き終わったな、次は組み手だ。俺からわ突かないから安心してついてこい！」

兼「はい、うおおお」

逆「おせえ！」「ドカッ  
蹴りが決まった。

兼「うう、蹴りはあるんですか」

逆「当たり前だ。おめえは体が小せえから相手のふところに入る練習だ」

兼「な、なるほど」

数時間後

逆「よし終了だ。次はアパチャイの番だから道場にいけ」

兼「はい」

ア「よし来たね兼一、今日もミットウチやるよ」

兼「は、はい」

ア「大丈夫よ兼一、今日はいつもよりもっとてっかめん（手加減）するよ」

兼「は、はあ」

パンツ パンツ パンツ  
ミットをつけていく兼一

ア「いいよ兼一もっとレウ（早く）レウよ」

兼「はい！」

ア「いいよレウ、レウはいそこで避けるよ」

兼「へえ」

ア「イヤバダバドウウウウウ」  
ドカツ ピュー

兼「ギャアー」

ア「兼一~~~~」

馬「ありやりやこれは次のおいちゃん達の番は無理ね、しぐれどん」

ガーン

し「待ちぼうけ」

馬「まあまあしぐれどん、明ちゃんは「っちから」に回してもらっか  
ら機嫌なおすね」

し「う…ん」

## 明人の修業（前書き）

遅くなりました。

よろしくおねがいます。

## 明人の修業

し「今日の修業はボクか…ら」

明「はい、よろしくお願いしますしぐれさん」

し「今日は手裏剣の練習」

明「はい」

し「まずはあそこにある十個の的を、十秒以内であて…る」

明「はい」

し「では始…め」

し「十、九、八、七、六、五、四、三、二、一終了」

明「な、なんとかできた」

し「よし、次は動局的…だ」

明「はい」

し「一発でもはずしたりしたら、杭の上…で腕立て百回だ…ぞ」

明「はつてええ!!」

し「では、僕の投げるリングをねらって…ね。いく…ぞ」

明「ちょっとまってー!!」

し「それー」

明「くっ」

し「えい」

明「うおっ」

し「次は二個・・・だ」

明「なんの」

し「いい・・・ね」

岬「おおやってるね明人君」

明「頼むか話かけないで~~~~」

し「次で最・・・後」

よし、これなら。

明「これで最後!」

ア「アパ、リンゴだよ!」

明「ああ!アパチャイさん危ない!!」

ア「アパ！イヤバダドウウウー！」ブワッ  
風圧で手裏剣が戻ってきた

明「僕が危ない！！」  
カカツ

明「た、助かった」

し「明人はず・・・れ」

明「え、いや今のはなしでしょう。ね、ね」

岬「見苦しいぞ明人君、はずれははずれだよ」

し「腕立て・・・だ」

明「そ、そんな〜」

し「九十九、百」

明「や、やっと終わったー」

し「次は剣星のところ・・・にいけ」

明「はい」

馬「今日は太極拳の化勁の練習ね」

明「化勁ってどんな技ですか」

馬「化勁とはコロの原理で相手の攻撃を受け流す技ね」

明「難しそうな技ですね」

馬「大丈夫ね、しっかり練習すればできるようになるね」

明「はい」

馬「それでわ美羽相手してあげるね」

美「はいですわ、明人さんよろしくお願いします」

明「お願いします」

美「まずはゆっくりいきますね」

明「はい」

スツ スツ スツ

化勁でそらしていく明人

美「あらかなかなかうまいですね」

明「そうですね」

馬「美羽スピードあげるね」

美「はい」

明「くっ」

スツ スツ ガツ スツ ガツ  
少しかすっていく

美「少しきついですが」

明「ええきついっす！」

馬「美羽スピードアップね」

明「ちよとー！無理っすこれ以上は無理！！」

美「馬さん」

馬「やるね美羽！」

美「はい、明人さん失礼します」

ガツ ガツ ガツ ガツ  
完全にあたっっていく

明「ちよ、ま、まっつて」

数時間後

馬「そこまでね！」

美「ふう、明人さん大丈夫ですか！」

明「だ、大丈夫にみえますか」

美「みえませんわね」

馬「明ちゃん最後のほうはなかなかよかったよ」

明「そうですか」

美「ええ。最後のほうわみごとでしたわ」

馬「まあそれはそれとして次はアパチャイの番だから庭に行くね」

明「はい」

ア「来たね明人〜さっきはリンゴたべちゃってごめんよ」

明「もういいですよアパチャイさん」

ア「ありがとよ明人〜、それじゃあ今日もミットつちやるよ」

明「はい、手加減してくださいよ」

ア「わかってるよ！今度こそはてっかめんするよ」

パンツ パンツ パンツ

ミットをついていく明人

ア「いいよ〜明人もっとレウ（早く）レウよ〜」

明「はい！」

ア「いいよ〜レウ、レウはいそこで避けるよ〜」

明「へえ」

ア「イヤバダバドウウウウウ」  
ドカツ ピュー

明「ギヤアー」

ア「明人~~~~~」

逆「おいおいまたかよ」

岬「アパチャイ君、きみはもう少し手加減をおぼえたまえ」

ア「アパ〜きおつけるよ〜」

岬「まあとりあえずアパチャイ君は手加減を覚えるまで最後にまわすよ」

ア「アパ~~~~」

突きの武田（前書き）

遅くなったうえにかなり短いですがどうぞ。

## 突きの武田

岬「よし、では今日も走りこみからだ二人とも」

「はい」

岬「よし、ではしゅぱーっ」

河原

「はあ、はあ」

岬「遅い！もっと早く」

「はいはい」

？「やあ兼一君じゃない」

兼「あれ、武田さんどうしたんですかこんなところで」

武「どうしたってロードワークだよ」

兼「あっそういえばボクシング部に入ったんですね」

岬「左腕のほうはずいぶんよくなったようだね」

武「これは岬越寺大先生、いつぞやはお世話になりました」

霧「あの二人ともその方はいい」

兼「ああ、この人は武田一基さん、まえ話したでしょう」

霧「ああ！この人が。僕霧沢明人ですよろしく」

武「やあ君が明人くんかい、兼一君から話しは聞いているよ。こちら」  
「よろしく」

岬「それでは二人ともそろそろいくとしよう」

「はい」

武「ああちよつとまってくれたまえ」

兼「なんですか武田さん」

武「最近ラグナレクの辻隊がきみたちをねらってるようだよ。気をつけたまえ」

兼「そうなんですか！教えてくれてありがとうございます」

武「いいっていいって、それじゃあね」

兼「はい。武田さんも脱会リンチ気をつけてくださいね」

武「わかってるよ」

霧「いつちやった」

兼「辻隊かゝまた厄介ごとがふえたな」



アパチャイの手加減(前書き)

すみません遅くなりました。  
でわどつぞ。

## アパチャイの手加減

ア「準備いいよしぐれ〜」

し「わかつ…た」

岬「おや、二人とも私の投げられ地蔵を五体も庭に並べてなにをしているんだい」

し「手加減のとつく…ん」

岬「ほう」

し「始…め」

ア「ア〜〜パパパパパ！！」

ドガガガガ ザッ ピシ

ガラ ガラ ガラ

ア「アパ…」

岬「私の投げられ地蔵が…」

美「何してますの、あのお二人」

岬「ん、何でも手加減の特訓とか…」

美「…かわった特訓ですわねえ…」

ア「あ〜〜アパチャイ！敵と向かい合うとどうしても、戦闘モードに入っちゃうよっ！！」

し「……………!!」

し「アパチャイ、見る！」

ア「ああ〜一つ生きてるよ!!」

ア「やったよー初めてブツ殺さずに我慢したよー」

ア「これで二人にムエタイもつとおしえてあげられるよー」

霧「あれ、アパチャイさん手加減できるようになったんですか」

ア「そうよ明人！明日はムエタイ何時も以上に教えてあげられるよ」

霧「はは、手加減してくださいね」

ア「山より深く海より高くするよ！！地蔵も生きてるし平気だよ！！」

ガツ ミシ

霧「地蔵……？アパチャイ出が………痛い……」

ピシッ ゴロン

美「！！首が」

ア「明日がたのしみよ！」

美「明日が明人さんの命日かしらですわ」

翌日

ア「さあ明人ムエタイやるよ、準備OK？」

霧「ええ……まあ残念ながら……」

ア「人をぶつ殺すならムエタイよ」

霧「いや、自分の身を守ればそれで……」

ア「そういう難しい事はぶつ殺してから考えるよ！脳みそは人を殴るためにあるよ！！」

霧「ヒイツ」

ア「今のアパチャイのお師匠さんのモノマネよ！！どう？にてた？」

霧「……いや会ったことないっすから……」

本当に大丈夫かなこの人……

岬「オホン、まずムエタイがどういう格闘技なのか、教えてあげてはどうかね？」

ア「え？人をぶつ殺すための……」

霧「それはもういいです！！」

岬「あゝムエタイはもともと、シャム王国（現在のタイ）で白兵戦用として発展した歴史の古い武術だ！……とアパチャイ君は言いたらしい」

ア「そうよ、そのとおりよ！！！」

霧「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ア「さあやるよ、まずはタン・ガード・ムエイ（かまえ）よ！！」

霧「こつですか？」

ア「次、ティー・ソーク！！（ヒジ打ち）」

ア「とどめはティー・カウ・コーン（回しヒザ蹴り）よ！！コツは  
てつかめんしないことよ！！これで明人の敵はあの世行きよ！！」

霧「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうなる事かと思ったアパチャイさんの特訓も、何事もなく進みま  
した。でもー

ア「よし明人、よくがんばってるよ。今からミット打ちに入るよ  
！！」

霧「はい！！」

どこかで油断していたのでしょうか。まさかあんな事に・・・・・・・・

ア「よし、打ってくるよ」

あれ、本当にアパチャイさん、手加減できるようになったんだ？昔  
感じた威圧感がないもの・・・

霧「！！」

ゴゴゴゴゴ ターベチャウヨ〜 だっ

危ない！！久々に不幸のカンが危ないって言っている！！

美「ちょ、どこ触ってらっしやるの！！後ろに回りこむと・・・ヤ  
〜ッ」

霧「ギャー！！」

後ろに立つたら投げられるの忘れてた

ア「どうしたよアキト〜？早くやるよ。ミット打ちたのしいよ〜」

霧「本当に！ほんつとくに、手加減できますか？」ガーン

ア「アパチャイ悲しいよ・・・弟子に信用されてないよ・・・せっ  
かく手加減の練習を、いつぱいいつぱいしたのに・・・」

霧「あ・・・いや、その・・・」

ア「もうアパチャイ生きていけないよ・・・自信なくしたよ生まれ  
てごめんよ・・・」

霧「あ・・・その・・・や、やりましようミット打ち！！」

ア「本当？」

ア「ほーら、ミット打ちは楽しいよ！！」

バス バス バス

霧「そ、そーっスね！」

霧「ハハハハ」

ア「アパパパ」

ア「はい、じゃそごでよけるよ」

霧「え？」

ア「いゝヤバダバドゝッ!!」

ドツカ!!!!!!!!

オオオオオオン!! ズザーッ テン テン

美「キヤー!! 明人さん!!」

兼「明人ゝゝ!!」

ア「.....おゝゝ」

逆「おーじゃねえ、あほ!! てめー弟子を殺す気か!？」

兼「明人ゝ、明人しっかり!!」

美「明人さーん、明人さんしっかり!!」

馬「なんだ? ついにやったかね?」

岬「やれやれ」

ア「アパチャイ手加減したよ、海よりも高く! 山よりも深くよ!」

兼「明人〜!!」

し「……………」

「「!!」」

兼「こ…岬越寺先生」

美「あ…明人さんが…」

岬「ハハハ二人とも何を大げさな…この程度でくたばるような鍛え方は…」

岬「!？」

岬「心臓マッサージ開始!! 1・2・3・4、1・2・3・4、1・2・3・4、1・2・3・4」

ただいま〜

霧「ケホケホここどこ〜? お花畑は？」

岬「ほら! なんともなかったろ？」

「「いや〜!!」」

明人、臨死初体験。

翌日 公園

「うわーいアパチャイだ！」

「アパチャイオニゴツコしょー！」

「うっん、アパチャイのぼりにしようよー！！」

ア「はじめに…ハトにエサをやるよ」

バサ バサ

「アハハ、アパチャイハトの木みたい！」

ニヤー

「うわーネコまで来た！」

ワー ワー

逆「…！アパチャイ…」

あの野郎、子供と動物には不思議と好かれるよなあ…。

ア「……………」

「アパチャイ、今日元気ないね！？」

ア「じつはアパチャイ昨日、ほんの少し大失敗しちゃったよ…」

「ほんの少しなのに大失敗？へんなの！！」

ア「そうよ…ほんの少してとつてもむつかしいものよ」

逆「……………」

兼「今日もむだな争いをしないですんだ」

美「ふふ、誰も体育倉庫でご飯べてるなんて思いませんわよ」

霧「やあ、兼ちゃんに美羽さん今お帰りですか」

美「あら明人さんもういらしてたんですか」

霧「はい、今日もムエタイ頑張らないといけませんから」

兼「そう…てっ明人昨日あんなめにあつたのにまだ続けるき!？」

霧「あんなめ?だつてまだ技の練習しただけだよ、じゃ早く行かないとアパチャイさんすねちゃうから」

兼「美羽さんもしかして」

美「ええ」

「昨日の記憶なくしてる!!」

美「秋雨さん大変です!いますぐ明人さんを精密検査したほうがいいです」

岬「なぜかね?」

兼「実は明人が昨日の記憶をなくしているんです」

岬「ふうむ!それは、好都合!!」

ズル

美「秋雨さん!!」

岬「冗談だよ。記憶が飛ぶなど格闘技の世界じゃ珍しい事じゃない。昨日ちゃんと調べた、どこも異常なしだ」

逆「うるせえぞ二人とも!そおれより今はアパチャイの方が・・・おもしれーんだ!邪魔すんじゃない!」

こ・・・この人達は・・・

ゴゴゴゴゴ

アパチャイと長老が向かいあっている

ア「アパパパパパパパパ」

ズババババ　ドパパパ　ガツ!　アパチャイのパンチを長老が受けた

長「だめじゃな・・・これではまだ人は死ぬ!!」

ア「うわーんアパチャイのバカバカよ!!」

ア「死ぬ気で手を抜いているのに、どうしても「死んじゃえパンチ」になっちゃうよ!!」

長「アパチャイよ...おぬしはよく公園で、近所の子供達と遊んでおるよのう?」

ア「え?そうよ、アパチャイみんなと仲良しよ...」

長「どうかのう?明ちゃん達と練習するときも、修業だと考えず、子供と遊んでると思ってみては!」

ア「……………」

霧「アパチャイさん？」

霧「おつかしいなーどこ行っかな？いつもなら頼まなくても、無理やり教えてくれるのに」

し「……………」

霧「うおー!？」

いつの間に目の前に？

し「……………」

霧「あ、しぐれさんアパチャイさん見ませんでした？なぜよろいを？」

し「あっ…ち」

霧「どうもー、これからミット打ちなんです」

し「お…い」

し「……………」

霧「……………な、なんすかそれ？」

し「つける…脳…がやられる」

霧「言っている意味が分かりません…」

霧「じゃ、そういう事でし」  
「……………」

たまに不思議な事言うな

ア「今度こそ・アパチャイ手加減するよ!」

あれ?デジャブーだ。昨日もこんな事してたような…

ああ、神様…

ア「はじめよ!」

ア「はい、レウレウ!」

バン　バン

霧「シッ!シッ!」

ガッ

ア「そうよ!近づいたら、首を取ってカウ・ロイ(飛びヒザ蹴り)よ!」

逆「やい、じじい!!本当にあんなアドバイスだけで大丈夫なのかよ!」

長「大丈夫大丈夫」

長「彼は物心つく前から裏ムエタイ界で生死を懸けた戦いをしてきた」

長「手加減できんねは、全力攻撃が、条件反射の域まで達しておるからじゃろっ」

逆「おいおい…」

長「じゃがの、彼の心根の優しさは、遺伝子レベルまで達しておる！…」

逆「へっ！たしかにオレの人生の中で、あいつほどノー天気な奴はいねえ！…」

ア「ほらアキトもつとレウよ！」

霧「やあ！…」

ア「そうよ！…」

ア「そこで避けるよ！…」

霧「え！？」

ア「！！！」

ア「パチャイでけー」

遊ぼうア「パチャイー」

パン

「「「「！」「」」」」

霧「うひゃー驚いた…なんてパンチだ…速すぎてまるつきり見えな  
いやー！」

ア「そゆときは、相手の肩を見てパンチを予想するよー！」

美「や…やったですわー！」

兼「うんうん、ついにやったー！」

ア「スキを見て、アパチャイも軽いパンチだすよー！」

ア「ミット打ちは、避けるのも同時に練習するものよー！」

霧「はいー！」

ア「さっ！レウレウ！もっとレウレウよー！」

し「……………」

馬「安心した、しぐねどん？」

し「べつに…」

ア「はいそこで避けるよ」

霧「え！？」

ア「イヤバダバドウウウウウ!!」

霧「ウギヤー!!」

美「キヤー明人さん!」

兼「明人」

し「次は足加減だ…ね」

## 観察処分者（前書き）

次回から投稿が少し遅れるかもしれませんが、  
でわどつぞ。

## 観察処分者

鉄「よーしおまえら席につけ、これから持ち物検査をする」

一同「「「えー」「」」」

鉄「ぶつくさ言うなさっさと鞆を机の上に出せ。授業に関係のない物は、ぼっしゅうするぞ」

トランプ、雑誌、次々に没収されていく。

鉄「坂本、おまえはポケットの中もみせろ」

雄「ちっ」

鉄「やはりな、没収だ」

霧「災難だったね雄二」

雄「まったくだ、ポケットまで調べられたのは俺だけだぞ」

雄「あれに、買ったばかりの新曲入れてたのに」

明「雄二は日頃の行いが悪いからだよ」

雄「けっ」

鉄「吉井最後はおまえだ」

明「あ、はい」

鉄「おまえは制服を脱いでジャージに着替える」

明「それは、警戒しすぎじゃない!」

明「あ、あのう女子が見ているまえで着替えるのはちょっと」

鉄「ダメだお前はズボンの中にすら何かを隠し持っているおそれがある」

鉄「ここで着替える」

明「そんな!」

明「いくら僕でもそこまではしなないです!」

明「少しは僕を信頼しー」ガシヤ

雄「おい明久裾からDSが落ちたぞ」

明「ん?ああ、ありがとう」

鉄「・・・・・・・・・・・・・・・・」

明「先生少しは僕を信頼してください!」

鉄「お前はジャージすら着るな」

ばッ馬鹿な!?更に警戒レベルが上がるなんて!?

鉄「それにしても、ゲームソフト漫画に小説DVD・・・お前は学

校をなんだと思っているんだ？」

鉄「いいか学校は勉強をするところだ。授業に関係ないものは持つてこないように」

明「ああ、僕のお宝たちがああ」

鉄「さていよいよ一時間目は試験召喚実習だ。全員速やかに体育館に移動するよう」

体育館

………  
サモン  
召喚！

明「朝からついてないね」

雄「まったくだ。」

あのMP3プレーヤー高かったのに」

明「僕も総額3万はいったよ」

霧「それは散々だったね」

姫「お、お願いしますサモン！」

雄「おつ明久いとしての姫路だぞ」明「か、からかわないですよ」

雄「写真はとらんでいいのかムツツリー」

ム「…カメラは没収された」

明「姫路さんとはクラスが違うから体操服姿なんてなかなか拝めないのに残念だね」

雄「実習もこれっきりだしな」

雄「そういえば明久は姫路と知り合いじゃなかったか？」

明「うーん、小学校の頃同級生だったけど…もう何年も話もしてないし忘れられてるんじゃないかな？」

雄「それじゃあ来年同じクラスになる可能性は皆無だし、そのままお前は姫路の記憶から消え去っていくんだろうな」

明「来年って、クラス振分試験のこと？」

雄「ああ、お前と姫路が同じクラスになるのは不可能だろ？」

明「それは…忘れられちゃうのか…なんだか寂しいなあ…」

雄「確かにお前なんか覚えてても何の得もないからな」

明「なんてことを言うんだ」

霧「言い過ぎだよ雄二」

鉄「次！霧沢明人と木下優子！」

霧「げっ優子とか」

雄「秀吉の姉とか。まあ頑張るんだな」

霧「うん」

優「よろしくね明人」

霧「よろしく」

鉄「それでは開始！」

二人「「サモン！」」

総合科目

木下優子3657点

霧沢明人1829点

雄「約二倍差か」

秀「さすが姉うえじゃの」

明「ランスたい剣か、普通なら優子さんが勝つんだろっけど」

優「悪いけど勝たせてもらっわよ」「ダッ

優子さんの召喚獣がっつこむ。

霧「えい」

それを明人の召喚獣が右側にいなして後ろにまわりこむ。

優「なんですって！」

霧「これで、えい！」  
ズブツ

明人の召喚獣が優子さんの召喚獣の首を貫いた。

総合科目

木下優子0点

霧沢明人1829点

鉄「し、勝者霧沢明人」

明「鉄人驚いてたね」

雄「そりゃ、二倍差をひっくり返して勝っちまうんだからな」

優「負けちゃったか、強くなったわね明人。これも道場のおかげかしら」

霧「へへ、まあね」

明「お帰り明人」

秀「凄かったぞい」

霧「ありがと皆、でもやっぱり少し動かさにくいね」

鉄「次！吉井明久と島田美波！」

明「んじゃ行ってくる」

雄「おう、お前は観察処分者候補だからな。しっかり召喚獣の練習

してこい」

明「……あのね、僕は雄二と違って全然問題児じゃないんだからね」  
観察処分者候補だって？失礼な……あんな開校以来一度も出てない  
バカの代名詞を僕が冠すわけないのに。

鉄「吉井！！早くしろ！」

明「へーい」

島「……………」

どうしたんだろう？優しい言葉でもかけてあげるかな。

明「島田さんどうしたの？自分の召喚獣があまりにも貧弱でがっかりしたの」

島「あつやつと来てくれたの吉井、嬉しいわ」

まったく困ったこだな、皆の前であんなにはしゃいじゃって。

島「本当に嬉しい、吉井を殴るのって気持ちいいのよね」

……………本当に困ったこだ。

明「あの島田さん、殴りあうのわ僕らじゃなくて召喚獣のほうだよ」

島「あらそつよね」

よかった。ルールはわかっているようだな。

島「うちが一方的に殴るから吉井は殴らないわね」

明「先生！目の前で校内暴力がおきています。持ち物検査よりこういうのをとりしまったほうがいいんじゃないんですか！」

鉄「…島田、いくら吉井が相手でも暴力は良いことじゃない」

島「でも先生…！」

鉄「でもない、ダメなことはダメだわかるな？」

島「……………はい」

鉄「そうかわかってくれたかそれなら」

鉄「今回だけは特別だぞ？」

島「はいっ！頑張ります！」

明「あれ？その会話なんかおかしくない？」

明「あはは、先生も島田さんもばかだなあ」

明「僕がそう簡単にやられて許しを請うとでも思っているの？」  
ガシッ

あ、明久が頭をつかまれた。

明「それどころか逆に返り討ちに」  
めきユッ

あ、明久の頭蓋が。

明「ごめんなさい許してええッ!!」  
謝たのに許してもらえなっかた。

霧「明久アーメン」

放課後

明「はあ・・・今日は実習だけで授業のない楽な一日だと思ってたのに一日中災難続きだったよ・・・買い物する気分でもないしおとなしく家に・・・ん？」  
あれはもしかすると姫路さんかな？

明「ここで会うのも何かの縁、思えきつて声でもかけてみようかな」  
中学校でクラスが別々になって気がつけばずいぶん疎遠になってたなあ・・・

ウイーン

明「なんだかずいぶんぬいぐるみが多いなあ。まるでファンシーシヨップみたい・・・ってここ本当にファンシーシヨップじゃないか!!」

明「かつ帰ろうこの店に僕は場違いだ」

？「葉月一生のお願いですおじさんっ！」

お「そうは言ってもうちも商売だしねえ・・・」

葉「どうしてもこのノイちゃんが欲しいんです、お願いですっ」

お「ホラお嬢ちゃんだけオマケしちゃうと皆にもしてあげないと不公平だろう?」

お「だからお店の人はそんなことしちゃいけないんだよ」

葉「それでもお願いですっ!」

お「うっ…弱ったなあ」

明「ねえキミどうしてそんなにそのぬいぐるみが欲しいの?」

葉「さ、最近元気がないお姉ちゃんに前から欲しがってたこのぬいぐるみで元気になってもらおうと思ったんです…」

明「元気がないって?」

葉「きつとドイツから引越してきて日本語がうまくできてないから元気がでないんです」

葉「お掃除とかお洗濯とかして葉月と遊んでくれたりもして…それなのにお姉ちゃんはいつもいないパパやママの代わりに…うッ」

明「わわっ!! なっ泣かないで! お兄ちゃんがなんとかしてあげるから!」

葉「…本当?」

明「うん、本当」

葉「…お兄ちゃんありがとう！」

明「それでこのぬいぐるみはいくらなんです？  
このサイズは下手すると五千円以上するかな…」

お「税込で二万四千八百円になります」

明「ごめんお兄ちゃん頑張ったけど無理だったよ」

葉「！！」

明「ちなみに葉月ちゃんはいくら持ってるの？」

葉「一万円しか持ってないの…」

僕の全財産を合わせても一万一六九九円…売値の半額程度か…

明「すみませんコレ一万一六九九円で売ってもらえませんか？」

お「いやだからうちも商売だからねえ…」

葉「お兄ちゃん、それじゃ葉月の時と変わらないよ」

確かに彼女の言う通りだけどここから先が違う。

大人（高校生）の交渉術を見せてあげよう。

明「ところで一万一六九九円だと約半額ですよね？」

お「ああちよつと足りないけどね」

明「葉月ちゃんぬいぐるみが欲しくおっちゃんは売ってあげたい

けど半額じゃ売れない」

明「そこで僕からの提案です！」

明「ぬいぐるみを半分に裂いて右半分だけを売ってもらえば……」

明「あれ、どうして僕をそんなバカを見るかのような目で見てるの？」

お「…キミは本当に高校生かね？」

葉「…バカなお兄ちゃん」

ね、ネズミの次は小学校にまでバカあつかい！

お「じゃあ少しの間売らないで置いてあげるから、その間にお父さんやお母さんに相談してまたおいで」

公園

明「葉月ちゃんお父さんやお母さんをお願いできないの？」

葉「二人ともあまり家にいないの……お金が必要なときはお姉ちゃんに言わないといけないし……」

明「そっかうん……」

葉「そうだ！葉月のマンガを本屋さんを買ってもらえばお金になるよね？」

それだけじゃ全然足りないよあ。今朝没収されたゲーム機とかなら別だろうけど……」

明「ん？そうか・・・その手があったか！」

葉「どうしたのおにいちゃん」

明「よしッ葉月ちゃんまた明日この公園に来られるかな？」

葉「うっうん大丈夫だけど・・・」

明「よし、じゃ明日5時にここに集合ね」

葉「あ、お兄ちゃん」

翌日

雄「はあ？取られたものを取り返すだ」

明「そう、だから手伝ってみんな」

秀「確かに演劇に使う道具を取り返したいがのう」

霧「相手はあの鉄人だし」

雄「下手すると観察処分者に任命されかねんしな」

明「そこを頼むよ、それに明人なら鉄人倒せるんじゃないの？」

霧「いやいや何言ってるの、もし倒したとしても僕退学になるから」

明「そっかーどうしよう、誰か手伝ってくれないかな」

ム「協力する……………」

明「え！手伝ってくれるのムツツリーニ」

ム「コク コク」

よし、これで少なくとも隠密行動にたけた人材がてにはいった。

雄「まあ鉄人にもカリがたまってるし手伝ってやるか」

「「そうじゃの（だね）」」

明「あつみんなもOK？」

雄「んじやまずは没収品の所在を明らかにしないと。んなワケで明久携帯のマナーモードをOFFにしろ」

明「え？なんで？」

雄「いいからやれ、没収品を取り返したいんだろ？」

明「よくわからないけどマナーモードを切ればいいんだね？」

鉄「こらお前ら出席を取るから席に着け」

雄「よし、作戦開始だ」

鉄「島田、清水、山田渡辺（は）」ピロピロピロ

ぷぷつ全くバカなヤツもいるもんだ、授業中に携帯鳴らしたら即没

収されるっていうのに

鉄「・・・吉井出せ」

明「・・・はい」

問題はそのバカなヤツが僕だってことだ。くうつつ相手は一体どのどいつだ!?

着信 坂本雄二

明「!?!キサマ裏切ったな!?!」

鉄「没収だ」

明「ああッ携帯!!僕の携帯!!」

鉄「よし、今日は遅刻が一人もないな。今後もこの調子で頑張るよう」

雄「最初の作戦は成功だな」

明「雄二!僕の携帯どうしてくれるのさ!」

雄「あれは目的の在り処を知るためのおとりだ。あとで回収すればいい」

雄「鉄人が没収品をどこにしまうのかを調べるためにわざと没収させたんだ」

明「それならそうと早く言ってくれれば・・・」

ム「・・・・・・・・・ただいま」

明「おわあッ!!」

雄「おっとうだったムツツリーニ？」

ム「・・・・・・・・・目的のブツは職員室用ロッカーにある」

雄「よし、それじゃあ放課後に決行だ」

放課後

雄「よし、まずは職員室から人払いだ秀吉たのむ」

秀「こころえた」

秀「・・・・・・・・・失礼します」

「おお木下か一体どうした？」

秀「きゅ急に・・・・・・・・具合が悪く・・・・・・・・保健のせんせいも・・・・・・・・いなくて・・・・・・・・」

さすが秀吉、演劇部だけのことわある

秀「すにません少し休ませ」

「きッ木下！？大丈夫か!？」

「とりあえず保健室に運びましょう!」

「そッそうですね!それじゃ先生は足のほうを持ってください」

雄「よし全員ではらったな、いまだ」

雄「ここだなムツツリー二鍵あけた」

ム「了解……」

ム「……………」

雄「どうしたムツツリー二?」

ム「あかない……」

雄「は?」

ム「かたが古すぎてみたことがない……だからあけられない」

明「そ、そんな」

雄「ここまできて」

霧「あの僕がかわろうか」

雄「な!できるのか」

霧「錆付いているし壊していいならなんとか」

雄「あけられるならなんでもいい。とにかくやってくれ」

霧「わかった。じゃあちよっとはなれてて」

霧「香坂流劣化真空斬！」 ガキ

明「や、やったあいたぞ」

雄「よくやった明人、よしとつととずらかるぞ」

明「了解」

ん、あそこに古本があるな。どうせ捨てるみたいだしもらっところ

雄「おい、早くしろ明久」

明「はいはい」

その後ゲームと古本を売って葉月ちゃんに買ったぬいぐるみを渡してあげた。いがいだったのが鉄人の本が以外に高く売れたことだ

後日

鉄「・・・昨日職員室で盗難が発生した。これは大変嘆かわしい事態と思わないか吉井」

明「そうですね全く嘆かわしいことだと思います」  
このくらいで誰が動じるもんか

鉄「ところでその犯人は先生のロッカーの鍵を破壊して私物の本まで盗んでいったんだが」

え？あの古本は捨てる物じゃなかったの？

鉄「度胸のあることにそいつは身分証を提示して堂々とその本を売りさばいたそうだ」

明「それはまた豪胆ですねえ」

鉄「全くだはっはっはっ」

「「あっはっはっ」

明「!？」

明「吉井いッ！歯を食いしばれえッ!！」

明「すすんませんでしたッ!!まさか先生の私物だとは……」

鉄「思わなかったというのかッ!！」

明「いえちよつとは思ったけど「鉄人だしまあいつか」と思って」

ゴッ

明「痛いッ!！」

鉄「まったく鍵まで壊しおって!！」

明「そ、それは僕じゃなく明人が」

鉄「人のせいにするな!！」

ゴッ

明「あいたッ」

霧「せ、先生鍵は本当に僕が」

鉄「明人、別にかばわなくていいんだぞ。それにお前が鍵を壊せるとは思えん」

霧「いやだから」

鉄「それよりも吉井、やはり貴様はバカの疑いがある今後は充分気をつけて視ていく必要がある」

明「これ以上目をつける余地はないと思うのですが……」

鉄「いやあるだろう？お前にピッタリの肩書きが。今朝の職員会議で満場一致で可決した、受け取れ」

明「!？」

「吉井明久」以上の者を文月学園指定＜観察処分者＞として認定する。

明「そんな~~~~~!!」

辻vs兼一(前編)(前書き)

PV10000 ユニーク1500ありがとうございます。  
これからも頑張っていきます。

辻 vs 兼一（前編）

？「辻、白浜と霧沢はまだ仕留められてないかない。他のグループにとられると面倒なんだよ。」

辻「もう少しまでキサラ。あとすこし」

キ「早くしないとウチが潰しちまうよ」

辻「わかってるよ」

美「二人ともすみません買い物手伝ってもらっちゃって」

兼「いえいいですよ」

霧「そうそう、困ったときはお互い様だよ」

兼「まあ、なんで買い物行くのに鉄球付けなきゃいけないのかわかりませんが」

美「弟子を思つての愛のムチですわよ」

辻「のんきに買い物とは脳天気だな白浜に霧沢」

霧「あの、どちらさまですか」

辻「俺か？俺はラグナレク辻隊のリーダー辻新之助だ」

兼「！あなたが…えっとモジャモジャさん」

辻「辻新之助っていつてるんだろっが！」

辻「まあいい白浜ついてこい」

兼「なんでさ」

辻「まあお前にもいい話がある。武田の脱会リンチのこととかな」

兼「！？…美羽さん行ってきます」

美「はい、きおつけてくださいませ」

兼「はい」

辻「おし、おめえらいくぞ！」

「「「「へい！」「」「」

美「行っちゃいましたか」

霧「そうですね」

美「てっ明人さん！なんでここにいるんですか」

霧「いや、だって皆途中から僕のこと忘れてたし」

美「あ、いや、その…す、すみませんですわ」

霧「いや、いいんですよなれてますから」

美「本当にすみません」

霧「いえいいんですって」

馬「二人とも何してるね」

美「あ、馬さん」

馬「早く兼ちゃんたちを追わないと見失ってしまうね」

美「そうですね、行きましよう明人さん」

霧「ちょっとまってください、僕はそんなに早く動けません」

馬「なんね、まだあんなところにいるのかね。近頃の子は足腰が弱いね」

霧「な、なんで屋根の上からいくんですか!」

美「明人さん頑張ってくださいまし」

馬「お、公園に入ったね。明ちゃん、美羽しげみに隠れるね」

霧「ちょっとまってください!」

美「明人さん急いで」

辻「よし、ここでもいいだろう」

兼「いったい何が目的だ」

辻「単刀直入にいう。白浜、霧沢お前俺のぶかになれって霧沢はどうした」

兼「どうしたって、あなたがよんだのは僕だけじゃないか」

辻「あっそういえば（よしついてこい白浜！）確かに。くそ、しくじった」

辻「まあ、なんだキサランとこの兵隊が、何やらちよっかいだしてたらしいが、オレの部隊にはあんな半端者どもはいねえ！！」

辻「奴ら、オメーラを潰す気だぞ！」

辻「辻隊に入っちまえば、奴らも手はだせねえ。どうだい？オレは強い男が好きでね！悪いようにやしねーよ」

兼「……あなたは何がしたいんです？」

辻「決まってんじゃん！」

辻「男の価値は束ねてる人間の数で決まる！！」

辻「もつともつと辻隊を大きくしていつかラグナレクのトップの座に納まるのさ！！」

兼「トップの座に納まったらどうするんですか？」

兼「高校卒業したら不良なんてやってられませんかよ！」

兼「束ねられてた人達だって、いつかは就職しなくちゃ……」

辻「……………」

辻「でりゃあああああ!!」  
ドガア!!

兼「!?!」

何か物壊しはじめたよ!

辻「ぐおおお!!」

バキヤツ

「隊長!!落ちついて!!」

辻「難しいこと並べやがって」

辻「白浜!!てめーには男のロマンってやつがわからねーのか!?!」

辻「自由なんだよ、男ってのは!!」

兼「自由とは…他人を害さぬすべての中にある…」

兼「つまりあなたたち不良が、好き勝手にやって他人に迷惑をかける以上それは」

兼「自由じゃない!!横暴だ!!」

辻「……………」

「隊長!!」

「隊長しつかり!!」

兼「と、とにかくボクは仲間にはならない!!じゃあ!!」

辻「待て、白浜兼一!!オレと勝負しろ!!」

兼「ぐっ!!」

兼「……………」

兼「戦う理由はないはずだ」

辻「ある!!」

兼「!!!??」

辻「お前はオレ達の自由を冒した!!」

辻「口じゃ勝てねーから拳で勝負だ!!」

辻「昔から男つてのは、拳でどっちが正しいか決めてきた!異存はねーだろ?」

うつつ…苦手なタイプだ、こういう人…

兼「ぼ、暴力反対!!」

辻「なんでえ結局口先だけかよ…このフヌケ野郎!!」

美「あちゃーですわ」

霧「あの人禁句を」

兼「……………」

兼「誰がフヌケだって…………？」

辻「いい目になったな…おしいぜ！一緒に暴れられたらうづいよお」

兼「寝言は寝てから言ってくれ。ボクは殺されたって不良なんかにはならない！！」

美「始まってしまいましたわ！！」

霧「僕もいったほうが」

馬「まつね明ちゃんここは兼ちゃんに任せるね」

霧「しかし！！」

馬「いいから、とりあえず弟子の戦いっぷりを撮っとくね」

辻「さあ、来い小僧！！」

辻「口ゲンカなんてなー女子供のやることだ！！やっぱり男の喧嘩はこつでなきやな！！」

兼「理論的に負けたからって手を挙げるのは、卑怯者のやる事だと、ボクは思いますけど！！」

辻「ひ、卑怯だとお〜!! 黙れ、腰抜け野郎〜っ!!」

兼「こ、腰抜けって言うなく、この…暴力バカ!!」

辻「ぼ…暴力…バカ？」

兼「やーいばーか!ばーか!おたんけなす!ぼんぼこぴー!!」

霧「あの、やっぱりとめてきましょうか」

馬「い、いや大丈夫ね」

美「兼一さん…」

辻「ぐおおおお人の事バカって言う奴が…本当のバカなんだぞこんちくしょーっ!!」

ブウン

顔目指してパンチがとんできた

兼「!!」

ガツ ドシイ

それを右手ではじいて、左手で顔面にパンチをあてた。

美「やったですわ!!」

「隊長!!」

辻「いいパンチだぜ!!」

兼「くっ!!」

あさかったか…

辻「ウラッ！もういつちよいくぜ！！」  
ブウン

兼「ヒュッ！！」

ガッ クルン ドスッ

左手でパンチを払い回り込んで脇腹にパンチをあて

辻「うごっ！！」

辻「やろう！！」

ブン サッ

反撃の裏拳をかわした

辻「くーっ！今のは効いたぜ！！」

霧「これなら兼ちゃん楽勝ですね！」

美「ええ！」

馬「いやまだわからないね」

霧「どういうことですか？」

馬「勝負というのは、実力だけで決まるわけではないね」

「あざやかな攻撃だぜ！」

「うちの隊長に2発も入れるなんて…」

辻「ふん！いい調子だ白浜！！ほら、こいよ…もう一発入れさせてやる！！」

兼「！！？」

辻「どうした？ビビっちゃったの？来いよ！ほら殴れって！？」

兼「……………」

辻「へっ！できねえのかこの腰抜け！！！」

カチン

兼「このお！！！」

兼「やあーっ！！！」

辻「だっしやああ！！！」

ズガン

兼一のパンチをぶつきではねかえした

兼「ぐわあっ！！！」

拳が…！？

美「ああ！？？」

辻「うおらああ！！！」

兼「くっ！！！」

ゴシヤアアアッ

パンチのふりをして兼一の足を踏み付けた。

兼「ぐわあっ…!!」

ゴツ!!

パンチを兼一の顔面にあてた

霧「兼ちゃん!!」

馬「フツ…やはりね…あのモジヤモジヤ君…兼ちゃんよりも、ケン力なれしているね!!」

兼「うご…」

もろにもらってしまったあ…パンチは見えていたのにい。

美「見てられませんわ!私が…」

ガッ

美「!!」

馬「まだね!!」

馬「いくら実力が上でも経験を重ねた者にしか得られない、戦いのコツというものがあるね…」

美「なおのこと助けないと!兼一さんの負けは見えてますわ!!」

馬「まだね!!」

美「そんな!!明人さんも何か言ってください!!」

霧「まだです、まだ兼ちゃんの目は死んじやいない」

美「明人さん…」

兼「ガアア」

辻「こんなもんか…意外につまん男だったな…」

兼「おい。勝手に終わらせないでくださいよ…勝負はこれからです…!!」

辻「!!」

辻「いかる根性だ!! たった今おめーを、男として認めてやる…」

辻「そして認めた以上、手加減なしだ!!」

辻VS兼一（後編）（前書き）

遅くなりました。  
ではどうぞ。

辻VS兼一（後編）

前回ケンカなれをしている辻にぼこぼこにされていた兼一。  
兼一は勝負に逆転出来るのだろうか。

カーン カーン

岬「……………なにをしているのかね二人とも」

し「おまじない」

ア「そうよ！剣星から電話あって荷物とってきたら、とっても嫌な予感がしたよ！二人が危険よ」

ア「もう明人の分はおわったよ！今は兼一の分よ！」

岬「あーその呪いもといおまじないはだがねしぐれくん……」

し「おひやくど……まいり」

岬「あ、いや……」

し「百回……やると……大丈夫……！」

エッヘン

まあいいか

岬「ガンバリたまえ」

コクン

「う……ん」

カン カン

ア「ケンイチくガンバよ」

カン カン

「は〜ち、きゅ〜う…たくさ〜ん…」

長「アパチャイおぬしかー!?わしの大事な松に釘を打ったのはー  
!」

ア「うわああああん」

ピュー

辻「さあどうしたこいよ!」

辻「こねえならこっちからいくぜー!」

兼「くっ!」

手が痺れて打撃はきついこっちは…

辻「くらえー!」

ブンッ

兼「扣歩!」

スッ

扣歩でパンチをさけて相手の側面にまわりこんだ

辻「なに!」

兼「擺歩!」

ドガッ

そのまま足を引っ掛け、上体を押してあいてをころばせた。

辻「ぐわっ！」

よし、頭からいったこれで…

む、ゆだんしたね。これで兼ちゃんのまけね

辻「あめえ！！！」

ガシッ！ ドガッ！

兼「な！ぐわ！！」足で兼一の足をからめとりたおした。」

辻「仲間にならねえ以上おめえは厄介なだけだ。右足はいただくぜ」

兼「があああああ！！！」

兼一にのり右足を折ろうとした

美「まずいです！！！」

馬「まつね！！！」

美「きゃ！なにするんですか！早くしないと兼一さんが」

馬「見るね」

美「！！！」

ドガ

辻「グワッ、ちっだれだ！！！」

霧「これ以上兼ちゃんをすきな様にはさせない！」

辻「てめえか、霧沢」

美「明人さん！」

馬「ここは明ちゃんにまかせるね」

美「でも兼一さんが勝てなかつた相手ですわよ！兼一さんと同じく  
らしい実力の明人さんではとても！」

馬「いいから、それに明ちゃんは戦わないきね」

美「え！？」

辻「なんだあ霧沢、次はテメーが相手してくれるのか」

霧「そうだ！！」

辻「はっ！いい度胸だ褒美にさきに殴らせてやるぜ」

霧「その言葉後悔するなよ！」

辻「ごたくわいいからきな！」

霧「うおおお……なんてね」  
ボンッ

辻「な、煙ダメだと！」

霧「じゃ！」

辻「ゴホ　ゴホてめー逃げるきか！」

霧「逃げるんじゃない！これは戦略的撤退だ」

馬「ゴホ　ゴホ明ちゃんやりすぎね」

美「ケホ明人さん…」

辻「てめーらなにしてる！さっさとおえ！！」

「へ、へい」

霧「くーやっぱり重い」

「待て！」

霧「やばい！こうなったら一か八か…でやあー」

「なっ川をとびこえやがった」

ほ、成功してよかった。

「おめーら橋だいそげ」

シュッ

「！…！」

「なんだこのおやじ!？」

馬「二人ともよく頑張ったからね…ほんの少しだけ手助けね！」

スッ

馬「ふん」

ドギャン

蹴りの振動で橋を破壊した。

「!?!？」

美「あやや〜」

「うわーっ」

「何がどうなったー？」

「足がとどかね〜意外に深くぞ!!」

馬「内緒でね」

この人案外、加減を知りませんわね…アパチャイさんといひ勝負な  
ような…

霧「心配したよ兼ちゃんゴメンね助けてあげられなくて」

兼「……………」

霧「て、聞こえてないか」

## 敗北の先（前書き）

今日はあと一話投稿します。

## 敗北の先

ラグナレクのモジャモジャとの戦いに負けた兼一！  
その結果に一番怒っていたのは、本人ではなく梁山泊の師匠たちだ  
った。

いったい二人はどうなる？

兼「う…う…ん…」

美「あ、目を覚ましましたわ！」

ア「アパ！」

兼「うわーっ！ここわ…」

岬「地獄の三丁目だよ」

兼「!？」

し「……………」

逆「あっさり不良なんかには負けやがって！地獄のほづがましと思える特訓が必要なようだな!!」

兼「ひいひいっ!!」

美「何言ってますですよ、兼一さんは頑張りましたよ」

岬「だが敗れた！」

兼「ぐっ」

逆「これからはこうなるぜ。番はってた奴が一回の負けをきっかけに袋だたきにあうってな」

兼「そ、そんな」

逆「それに一回負けると負け癖のがつくからな、せいぜい明日の学校ではきおつけるこつたな」

兼「アワワワワ」

美「だ…大丈夫ですよ…たぶん」

兼「根拠のない慰めは脅迫ににている…」

兼「あれ、そういえばどうやってここに？たしか明人が」

馬「そうね、明ちゃんいなかったら今頃兼ちゃん足へし折られてたね」

兼「そうなんだ、ところで明人はどこに」

馬「明ちゃんなら、戦わないで兼ちゃんかっいで逃げてきたから地獄の特訓中ね」

兼「そんな、止めてくださいよ！」

馬「おいちゃんだって止めてあげたいけどむりね、明ちゃん、兼ち

やんのために川まで飛んだのにね」

美「おいたわしいですわ明人さん」

馬「さて、兼ちゃんは反省会ね」

兼「は、はあ」

馬「これを見るね」

兼「あ！ビデオでとつてある！さては隠れて見てたんですね」

馬「まあまあ、それより見るぬ」

馬「ここね、ここで兼ちゃん敵を倒したと思って油断したね」

兼「ぐっ」

馬「戦いの最中油断はダメね」

兼「はい」

ピッ

兼「！？」

美「キヤー！なに撮ってますの！！」

馬「おしりね」

美「馬さんの変態！スケベ！」

霧「皆僕のこと忘れてない！」

逆「いいからしっかりつけ！！」

霧「はいいい！！」

翌日

兼「うつつ、大丈夫だろうか」

新「おい」

兼「うわあああ！？って新島か何のようだ」

新「聞いたぜ兼一、おめえラグナレクの辻に負けたんだってな」

兼「どつどこまで言い触らした」

新「そりゃあもう学校じゅうに」

兼「なにー！」

新「白浜兼一はここだぞー！！まだラグナレクにやられた傷は癒えてないぞチャンスだぞー！！」

兼「わわバカやめろ！？」

「でかしたぞ新島。やい白浜今まで随分でかい態度とってくれたな」

兼「してないって、そちらの勘違いだって」

兼「うわーんなぜだ新島!？」

「待てごらあ!！」

兼「悪友とはいえ…友達だと思ってたのに!？」

フッ

オレはお前に期待してるのよ…

フフフフフ

人は変わる事が出来るのか!?!いじめられっ子が本当にヒーローになれるのか!!

ウヒヒヒヒ

…そしてオレ様は面白ければいいんだよ…誰がどうなってもな!!

そしてお前の親友霧沢明人にもあてはまる

ヒィ〜ヒッヒッヒッ

神よ…彼らに七難八苦を与えたまえ!!

ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ

兼「はあ、はあ結局戦ってしまった…むえきなたたかいだ」

梁山泊首脳会議（前書き）

短いですがどうぞ。

## 梁山泊首脳会議

岬「これより梁山泊首脳会議を始める」

岬「今回議題は兼一君と明人君についてだ」

岬「このまま終われば各もんぱのはじ」

岬「今まで我々はあの二人のこと甘やかしすぎていたと思われる」

岬「その不良に敗れてしまったのもそれが原因だと思われる」

岬「よってかねてからから考えていた作戦を実行する」

岬「名ずけて、死んでもともと人生格闘家大作戦!!」

長「それで具体的には何をするのじゃ」

岬「まず、梁山泊に住み込ませます!!そして生活のすべてを武術で染めあげる!

岬「武術でたまった疲れを武術で癒し、武術あつての自由達という事を思い知らせ...」

岬「武術の武術による武術のための生活!!」岬「彼らは二者択一を選ぶでしょう。武術か死か!？」

「はつくしゅ!」

長「つまり、彼らを梁山泊の内弟子にするというわけじゃ!？」

岬「はい!?!これからが本当の修業の開始です!?!」

内弟子（前書き）

遅くなりました。

23話ですどうぞ。

## 内弟子

兼 side

「待てコラー!!」

兼「くるなー!」

美「また追いかけてる」

「いや、本人笑い事じゃないと思うなー」

「逃げるかひきよー者」

兼「これは戦略的てったいだ!!」

side out

明人 side

雄「よう明人あいからわずボロボロだな」

霧「やあ雄二、そうでもないよ。この学園には鉄人がいるから不良もおそってこないし」

明「そうなんだ、鉄人もやくにたつんだね」

霧「そのてん兼ちゃんのほうは大変みたいなんだ、辻君に負けたのがばれて、毎日追いかけてまわされてるよ」

秀「たいへんじゃのう」

霧「まっただよ」

side out

そして作戦決行日

兼一は杭の上で片手腕立て伏せをしていた

兼「51!52!53!」

バツ

兼「ヒュッ!」

時折岬越寺先生の手はらいをよけながら。

兼「54!55!」

ア「兼一すごいよ、50もかぞえられて!しぐれ〜じゅうの次って何よ?」

し「じゅう…いち」

闘「チュチュチュ(おいおい)」

兼「ぐわーっ!もうだめだー!」

岬「よし、今日はこのくらいにしてしよ。無理はよくないからね」

ドサッ

兼「え？」

兼「ど…どうしたんです？いつもなら」途中で崩れたら町内タイヤ引き3周！」「とか言うのに…」

兼「急に優しいふりなんかして？」

岬「ハハハハ、まさかーうちの道場はいつだって優しいじゃないか」

一方明人は美羽と組み手をしていた。

霧「やつ！くそ！！」

霧「うおお！！」

ビュッ

霧「ぐっ！！」

美「ほい！！」

ガッ

霧「ゲフ！！」

グルン ドオッ

霧「ギャ！！」

逆「おいおい美羽、やりすぎだよ。明人、大丈夫か？」

兼「ゲホゲホ」

逆「ほら美羽おりろ！！」

美「はあ」

霧「ど、どうしたんです？おかしいですよー逆鬼さん」

霧「いつもだったら「殺しちまえ」とか言うのに…」

逆「オレが？まさか」

逆「梁山泊は、明るく楽しいよい道場だからな！」

霧「……………」

逆「汗ふけよ、カゼひくぜ！」

霧「……あ…怪しい…」

兼「そう、明人のほうも」

霧「うん、何かあるね」

兼「とてつもなく危険な何かが…」

ア「アパチャイ アパチャイ アパアパチャイ」

兼「あ、アパチャイさん…」

ア「うわあ！アパチャイ何も知らないよ！！」

「……………」

霧「まだ何も聞いてないのに…」

兼「なんです？なにを口止めされているんです？」

ア「アパチャイ知らないよ！アパチャイ知らないよ！それだけしか言っちゃいけないんだよ！！」

じゅ…

霧「！！なんだしぐれさんか。え、何？に・げ・ろ…」

ガッ

霧「うわあ！！」

し「ムームー」

霧「し、しぐれさん！！」

兼「あ…あの手は……長老？」

霧「いったい何なんですかみなさん！」

兼「あまりにも不自然ですよ。いったいなにを隠しているんです！」

岬「…二人とも梁山泊は好きかね？」

霧「え、そりゃあねえ」

兼「辛いこともあるけど…大切な場所です」

長「そうかそうか、よかったのう答えは、はいのよっじゃ」

岬「決まりましたな！長老」

兼「え？え？」

逆「へへ、おめーらならそう言いつと思ってたぜ」

霧「なつなにがですか」

ア「わーいカミカゼ！フジヤマ！テン普拉！」

兼「な…何が決まりなんです？」

岬「内弟子だよ内弟子！！しらんかね内弟子？」

岬「内弟子とは師と寝食をともにし、あらゆる武術のノウハウと秘伝を伝える制度だ」

岬「24時間武術を教え込むことが可能！！まあ、かみ砕いていえば、人生の為の武術が武術の為の人生に変わるだけのことだよ」

岬「その光栄な制度にキミ達は選ばれたのだよ、やったね！ラッキ  
ー！！！」

ピューーーーー

岬「やれやれ…」

岬「逃がすかあああ！！！」

「逃げきつてみせます!!」

岬「甘い!!秘技!畳乱れ返し!!」

バタ バタ バタ

「くっ!!」

「やああ!!」

ドバアッ

馬「ほっ!!」

逆「ちったあい動きするように、なっただじゃねえか!」

ズバア

美「ちよっ…逆鬼さんおじいさま家を壊さないで!!」

「ひい〜」

フッ グルン ドオッ

「ひぎゃああ!!」

「うわーん!!」

ズズーン

「いひゃ〜!!」

長「待てい」

「はい」

兼「いやだーいやだー殺されるー！」

霧「今でもきついのに…24時間完全管理で鍛えられたらー！」

岬「いいかい二人とも、人間…生まれたら必ず死ぬんだー！」

逆「そうだぜ、長く生きりゃいいってもんじゃねえー！」

「ひと殺しひと殺し〜」

馬「やれやれ、そんな言い方じゃ誰だって内弟子になりたがらないね」

馬「もっとうまく説明してやらなきゃね」

岬「うまく？」

馬「いいかね二人とも、梁山泊に住み込むと色々の特典がついてくるね」

「「な、なんですか？」」

馬「まず、美羽と一つ屋根の下で暮らせるね」

「「！！」」

その後1時間、馬先生は梁山泊に住み込むことの素晴らしさをせせつせつと語り続けました。（兼一明人、後日談）

「うん、ぼくら…内弟子になりゆ」

「んじゃ、さっそくおうちの人の了解とってくりゆにゃ」「」

馬「フフフフフフ」

逆「剣星の奴、すげー荒技でやりこめたな」

岬「今、ふと思った事が一つ…本当にあの者達でよいのだろうか？」

長「ホツホツ素直ない子じゃよ彼らは」

ア「二人とも、これからとってもおそろしい事が待ってるよ…」

ア「でも、何も知らないで喜んでるよ。かわいそうだよ」

し「きつと君が一番…おそろしい」

かくして梁山泊の内弟子になることを決めた兼一と明人。

二人の運命はいかに！

親の反応（前書き）

24話です。どうぞ

## 親の反応

明人 side

秀「なんじゃと！道場にすみこみとな！！」

霧「うん、もう逃げないって決めたからね。自分の限界を超えてみたいんだ…ぐふふ」

秀「……鼻の下が伸びておるぞい」

霧「え、そんなことないない」

秀「本当かのう」

霧「本当だって」

秀「しかし、大丈夫かの明人？おぬしいつもボロボロで帰ってきておるのに、住み込みなんぞしたら殺されてしまつかもしれないぞい」

霧「大丈夫、先生達はそんなことしないよ」

秀「でもものう、姉うえも何か言っつけてやってくれんかのう」

優「え、ああ頑張ってきてね明人。死んじゃだめよ」

霧「うん」

秀「姉うえ……」

優「ただしこれだけは忘れないでね。あなたの家はここにあるわ、いつでも戻ってきていいのよ」

霧「優子……うんありがとう。それじゃあ明日の準備をしてくるね」

優「ええ」

秀「よかったのかのう姉うえ？」

優「あの根性なしの明人があんなにボロボロになっても辞めなかった道場ですもの、きっと大丈夫よ」

秀「わしは脅されて辞めるに辞められなくなっただんたと思うのじゃが」

優「大丈夫よ、明人が初めて自分できめた事なんだから私たちが信じないと」

秀「それもそうじゃの」

side out

兼 side

父「なにい！住み込みだとう！？」

ほ「ええーっ！！」

兼「うん」

兼「男として中途半端なのはいけないって、お父さんいつも言うてるよね？」

兼「自分の限界を超えてみたいんだ！！ウフ」

ほ「あーっ鼻の下のびてるー！きっと不純な動機だあ！！」

母「空手は・・・趣味でやってるんでしょう？何もそこまでしなくても・・・」

兼「でも・・・住み込まないとマル秘ラブラブ大計画が・・・あ、いやなんでも・・・」

ほ「あー！なんか口ごもった！！」

父「兼一・・・一つ教えてくれ・・・お前、空手を始めた目的は何だったんだ？」

兼「え？・・・それは・・・」

誰もがみて見ぬふりをするような悪党どもを、片っ端からやっつけるヒーローになるんだ！！

父「よし、その目的を貫くために、どうしても住み込みが必要なら・・・父さんは・・・」

兼「.....」

ほ「ええ〜やだよ〜お兄ちゃん行っちゃうの〜」

そうだった！今の實力ではヒーローどころか自分の身一つ守れない！！

兼「どうしても必要なんだ！住み込んでの特訓が！！」

父「…そうか、よし、ならば行ってこい！！我が…息子よ！！」

兼「ありがとう父さん！！」

大切な事を思い出させてくれて！！

ほ「待つてよー！」

父「……………」

母「……………」

ほ「うえくん、お兄ちゃん！」

父「……………」

母「……………」

母「見事よあなた…」

父「私の兼一が行ってしまっ」

## 修業開始（前書き）

次回からケンイチの技をのせていきます。

## 修業開始

スポーツ化した武術に溶け込めない豪傑や…武術を極めてしまった者の集う場所！……ここは………梁山泊！！  
だが、そんな場所に似つかわしくない二人の若者がいた…

霧「ついに内弟子になってしまったね」

兼「今日から泊まり込みで修業か…きつそう！！」

霧「でも美羽さんと一つ屋根の下で暮らせるんだ！」

兼「そうだね、もう死んでもいいや！！」

岬「本当かね？」

「「はい？」」

岬「もう死んでもいいというのは本当かね？」

岬「もしそうなら、スケジュールをもっとゴージャスに直さねば…」

兼「うわーウソです！ウソです！！死にたくないっス！ねえ明人！」

霧「うんうん！」

岬「冗談だよ、「冗談！」」

この人でも冗談いうんだ！？





「一体どんな修業のスケジュール組んだんですか!?!」

岬「頭の中で今までのつらい修業を思いうかべてごらん」

「……………」

岬「思いうかべたかね……………そんなものは天国だ」

ダッ

長「まで」

「おたすけ〜」

「ひえ〜殺されるー」

兼「これは殺人未遂だ〜!!」

霧「アチチチ! お腹火傷するまえに背中むけないと!!」

岬「名付けて、スルメ踊り」

「名前つけなければいってもんじゃない!?!」

岬「才能がない君達は命がけというもろはのつるぎを使わないとある一定の水準を超えることはできない」

岬「これは火加減が難しいのだよ。サンマを焼く要領にかぎる」

ば、僕たちはスルメでもサンマでもない!!

し「動いちゃだめだ…よ」

とん

りんごが体のいたるところにのせられていく。

これから僕達の身にとてつめない危険がふりかっかってきそうなのはきのせいだろうか。

兼「あの、しぐれさんこれはいつたい…」

し「恐怖を克復する修業…らしい」

霧「らしいって」

ヒュヒュヒュヒュヒュン

「ひえええええー」

し「つぎ…手裏剣…ね」

「!?!」

岬「勝負で最も重要なもの、それは…勇氣…!!」

兼「やっぱりあんたが考えたんかい!」

逆「おらおら!もっとスピードあげんぞ!」

霧「押さないで！これ以上はもうだめ！」

逆「蹴りはつきの三倍の力がある。なぜか、人は足であるくからだ！オレもそう思ってたぜ」

ガガガカガガ

兼「か、顔がすりへるゝってオレも！？」

逆「ガハハおもしろーや！」

岬「もつともてつとりばやく強くなるには、つきを蹴り並に強くするか、蹴りをつき並に起用にするかであるb y 秋雨」

「「またか！！」」

ア「いよいよアパチャイのばんよ」

「「ひいひいっ！」」

ア「大丈夫よ！アパチャイはあんまり変なことしなくていいってアキサメがいつてたよ！」

霧「え、じゃあ何するんですか？」

ア「へへ、普通に自由組み手よ」

兼「それが一番危険なんだよ！」

「「アワワワワ」」

「ギイヤー―」

美「ふんぷん！」

ドガア バキ

美「キヤー兼一さん、明人さんしっかりー！」

「殺されるゝアパパ」

兼「何が一つ屋根のした美羽さんとラブラブだ！」

霧「美羽さん母家だし、僕たち相部屋だし」

兼「明人…」

霧「わかってるよ兼ちゃん」

「こんなところで死んでたまるか！！」

兼「たしかあの本ももってきたはずだ…あつたもしものときの大学館シリーズ「脱獄のしかた」」

カン カン

霧「だめだみはられてる」

兼「こういうときはどうしたらいい。穴をほるいやいやここは二階だ」



にしか教えない絶招というのがあって、誰にも見られない様伝えられるとか…

馬「ついてくるね」

霧「梁山泊の裏庭っておそろしくひろいんですね」

兼「初めてきた…」

馬「かがむね」

「「へっ?」「」

霧「なんですあそこ!?!湯気が出てる!?!」

馬「しっ!ばかもん!?!」

馬「あれは……温泉ね!?!」

「「温泉!?!」「」

馬「しーっ、静かにね!?!ずっと前にアパチャイの奴がいきなりあそこを掘り始めてね」

ア「アパ、チャイアパ、チャイアパ」

ズドドド

長「おおお!?!」

ア「あば!?!」

馬「三日ほどで掘りあてたね」  
おいおい……………」

兼「で、それがどうして、命懸けの修業なんです？」

馬「……………」

「はっ！」「

馬「フッフものわかりがいいね！」

霧「だ、だめです馬師父！！」

兼「それは、人としてやってはいけない事です！！」

馬「そう思うなら、なぜついてくるね」

「いや、師父を引き止めよう」と……………」

「し〜ぶ〜やめてくださいーい」「

馬「もう二人ともずるいんだかね」

馬「む！！動くな！！」

ガサツ ビュツ ザクウ！

ひもにふれたえだにむなかって竹槍がふってきた。

「ひっ……………」

馬「しぐねどんの仕掛けた罠ね。温泉に近づくほど凶悪になるね！」

「…文字どおり命懸けの修業っすね、師父！」

馬「心してかかるね！」

「はい、師父！」

その時、三人の間に

兼「師父あぶない！」

師弟を超えた…

霧「つかまれ兼ちゃん」

馬「すっかりするね明人ちゃん！！もう少しね！！」  
友情のようなものが芽生えた事は言うまでもない。

ジャブ…

「「「！」「」」

いる…！！

「あつ師父ずるい」

馬「弟子は師の後と4000年前から決まってるね！」

ガサ ガサ ヒュイ

長「何じゃ三人とも！入るならさっさと入らんかい！！」

グラ ダッ ガッ

馬「あれ？長老…いつもは一番風呂なのにね」

長「ははは剣星！わしがお主の、行動ばたあんを読めぬとも思っ  
たか！？」

長「まあ三人ともゆっくりと、つかってゆぐがよい！！」  
ドボン

師父…無念です。

なんの、チャンスはまたいつかくるね。

馬「ふ」

長「まーなんだ、一度や二度の失敗で、あきらめてはいかんと  
いう事じゃな」

長「ケンカも温泉ヲオツチングもな」

霧「はあ…ガンバります…」

「」つてどつちを？」「」

## 明久達の訪問（前書き）

扣歩・擺歩  
くしほ・はこほ

攻撃を躲するための八卦掌の歩法の1つ。上体をギリギリまで残し、一気に側面に滑り込むことで相手の視界からは消えたかのように見える。これを応用すると足を引つ掛け、上体を押すだけで相手を転ばせることもできる。（主な使用者：白浜兼一）

## 明久達の訪問

明「聴いたよ明人、道場に住み込みすることになったんだって」

霧「やあ明久早耳だね」

明「大丈夫かい、なんかいつも以上にボロボロだけど」

霧「大丈夫大丈夫だって僕生きてるもん」

明「大丈夫そうにはみえないんだけど」

雄「よお明久、どうした朝から変な顔して」

明「しつれいな、いやねえ秀吉から聴いたんだけど明人が例の道場に住み込みことになったんだって」

雄「ほゝそれがどうした」

明「ほら見てよ明人の顔。まるで死んだ魚のような目をしているよ」

雄「…たしかにな」

明「でさどうだろう、今日明人がかよっている道場に行ってみない」

雄「行ってみないってお前場所してんのか」

明「知らないけど…明人をつければいいじゃん」

雄「ふむ…まあ明人のことも心配だし行ってやるか」

明「ありがと雄」。秀吉とムツツリー二にも知らせてくるよ」

放課後

雄「明人をおつてしばらくたつがあいつかなり大変だな」

明「そうだね」

秀「もう二回も不良に襲われておる」

ム「かなりたいへん」

雄「おつ誰かと話してるぞ」

明「あれは…兼一君ともう一人の女の人はだれだろう？」

秀「お、つごきだしたぞい」

ム「追跡……………」

雄「ついたみたいだな」

明「はいつていくよ」

雄「よし、俺たちもいくぞ」

秀「近くで見ると大きな門じゃな」

雄「開けるぞ、ふぬぬぬぬ…だめだびくともしねえ。皆手伝ってくれ」

雄「せーの」

「「「「ふぬぬぬぬ」」」」

雄「はあはあ、びくともしねえ」

明「あの三人どうやってはいったんだ」

秀「中からかんぬきでもかけられたかのう」

ギギギ

ム「あいた…ッ…ブシャー」

明「ムツツリーニ！くそいったいなにが」

し「なんのよ…う」

明「ッ…ブシャー」

ああこの人が原因か。

雄「なにやってんだお前ら」

秀「まったく…すみませんわしらは明人の友達で」

し「明人の…はい…れ」

雄「おじゃまします、おいおまえらバカやってないでいくぞ」

明「ああまって、ほらムツツリーニいくよ」

秀「ところで明人はどこに…ってさっきの人はどこいったのじゃ」

雄「別にこっちで探せばいいだろ」

明「そうだね」

ドン

明「いた！もうなんでこんな所大黒柱が…」

ア「やあーっ！アパチャイだよー！」

「」「」……………」

ダッ

明「はあはあゆ、雄ニひっしに逃げてきたけど今のはいったい」

雄「わからん」

秀「む、誰かきたぞい」

雄「さっきの奴か！」

ム「わからない」

明「とにかく隠れよう。調度いいところに木の棒がたってるよ」

雄「ナイスだ明久」

逆「ハーーー！」

明「なにをしてるんだろう」

雄「静かにしてる明久」

逆「ドオリヤアー！！」

ドカ バキ ドガア

明久たちの隠れていた棒：もといマキワラが叩き割られた。

「「「「ギャー鬼だー！！」「」」」

逆「おいおいそりゃねえだろ」

明「なに！何なの今は！」

雄「わからん！バケモノなのはたしかだ」

ム「鬼のようだった」

霧「岬越寺師匠さつきから騒がしいんですがなにかあったんですか」

岬「さあ、しぐれなにかあったのかい？」

し「明人の友達だって人がき…た」

霧「って早く言ったださいよ！」

明「まさか道場の先生だったとは」

秀「しつれいしたのじゃ」

逆「いや別にいいぜ」

美「皆さんお茶が入りましたわよ」

霧「あ、ありがとう美羽さん」

美「皆さんとは初めてお会いしますわね。私は風林寺美羽、美羽って読んでくださいませ」

明「あ、あい」

ム「…カシャ…カシャ」

霧「やめたほうがいいよムッツリーニ」

ム「写真なんて撮ってない…」

霧「いや、そうじゃなくてレンズ見てみなよ」

ム「…!!オレのカメラが…」

霧「しぐれさんは馬師父のカメラよく壊してるから写真とると壊さ

れちゃっよ」

馬「ほっまだまだね、しぐれどんを撮るときはさいしんの注意をは  
らうか逃げながらこう撮るね」

ム「！！師匠その技をオレに」

馬「修業は厳しいよ」

霧「ところでみんなにしにきたの？」

雄「なに、明久がお前のことを心配してな、それで様子を見にきた  
ってわけだ」

霧「そうなんだ、ありがとうみんな」

秀「ところで普段どんな修業をしているのじゃ」

霧「え〜と地獄巡りかな」

秀「地獄巡り！？」

岬「こらこら、誤解をまねく言い方をするものではないよ」

兼「名前をつければそんなかんじだと思いますが」

雄「まあ明人も大丈夫のようだしそろそろおいとまするか」

明「そうだね、またね明人」

秀「たまには帰ってくるんじゃないぞ」

ム「またご指導お願いします」

霧「またねみんな」

岬「さて友達も帰ったみたいだし修業をはじめようか」

「「はい」」

岬「それと一つ」

霧「なんですか」

岬「いつもの修業はまだじょのくちだよ」

兼「はは、まさか」

岬「それでは修業開始！」

「「ギヤーーーーー」」

おせつかいなほのか（前書き）

香坂流五月雨

持っている武器を瞬時に持ち替えて相手に攻撃する技。変幻自在な攻撃をかのうとする。

（使用者：香坂しぐれ・霧沢明人）

## おせっかいなほのか

明久たちの訪問から数日後梁山泊にまた新たな訪問者が訪れようとしていた。

白浜家

ほ「お母さんの手作り弁当と、チョコにあめに、お兄ちゃんの大好きなチーカマと……」

母「明日はちょっと行って様子を見てくるだけでしょ？それじゃまるで雪山登山の準備よ、ほのか」

ほ「陸の孤島みたいな道場なんだから、不自由してたらかわいそうだもん！」

お兄ちゃんは修業の邪魔になるから来るなと言ってたけど、あのムチプリの魔の手にかかる事だけは断固阻止せねば……！

父「よーし！ほのか、護信用にわしのセバスチャンもっていけ……」

母「……！」

ズガーン

ほ「え？」

ほ「何か言ったお父さん？」

母「気のせいよほのか！」

翌日

岬「……起床〜〜!!」

「ぐわああああ」

美「おっ、お目覚めの時間ですわね」

二人が梁山泊に住み込み始めて一週間

兼「うわあ何だ!!何だ!?火事か!?地震か!?!」

霧「お、落ち着くんだ兼ちゃん!こゝこゝいうときこそ冷静な判断が!」

岬「いや、朝だよ」

霧「朝って……」

兼「まだ4時じゃないですか……」

岬「早起きは三文の得というだろう?やったね!すごく得したね!」

「……………」

岬「ね!?!」

「はい!?!」

岬「朝飯前にかかるーく町内を6周しとこうかね」

兼「なんか日に日に朝が早くなり、距離がのびているような…」

霧「のびてるね……」

美「いってらっしゃーい」

うちでの生活にももう慣れたようです。

ピシィ

「「ヒィ呪ってやるう〜…」

毎日とても楽しそう！

馬「今日はおいちゃんの番ね」

朝食前の組み手も充実していて

馬「おいちゃんに触れられたらかちね」

「「はい!」「」

兼「やあーっ!」

馬「ほっ」

霧「オリヤー!」

馬「なんの」

「ゼエゼエ」

馬「だめね〜もっと力をあわせるね!」

「は、はい」

美「みなさん、朝ごはんですよー」

みんなと食べる食事の時間…

霧「キーツ」

兼「フーツ」

馬「なんの」

ア「アーパ」

霧「ああ、もう!」

兼「自分の食べてくださいよもー!」

逆「いつまでやってんだよ…」

だいぶ抵抗できるようになりました。

美「ん〜二人がきてからお買い物がんばると楽ですわ、感謝してます」

兼「なんの！なんの！美羽さんのためならお安い御用です！」

霧「そうそう」

霧「まあ鉄球ひきづって行かなきゃいけないのはたいへんですが」

美「でもこの間まで荷物だけでもばててたのに、基礎体力がだいぶ上がりましたね」

霧「まあ、あれだけやって体力がつかなかったら、神様恨みますよ本当」

兼「この調子でがんばれば美羽さんを守る日もちかいかな…」

美「ん？なにか言いました？」

兼「わはは…何でもないっす、何でも！」

霧「がんばれ兼ちゃん」

馬「その前にまず自分の身を守れるようにならんとね」

兼「うお！いつの間に!？」

霧「ああ、重りふやしてる!?!」

梁山泊前

ほ「いつ来てもきぢやない道場だじょう…」

ほ「門しまってるよ、もう」

ほ「ふふ、このくらいであきらめるほのかちゃんではないのだよ」

ズル　ズル　ヒョイ

ポリバケツをはこんできてうえにのった。

ア「？」

ほ「うんしょ」

ばったり！

ほ「きやああああ！！」

ア「あばああああ！！」

サッ

なんだいまのは

ギギギ

ほ「！！」

ア「じーっ」

サッ

ほ「……………」

ソロリ ソロリ チラ  
だれもないじょ

ほ「ううせまい……」

ほ「だっ!!」

ほ「いたいの……」

ア「オロ オロ」

ほ「!!」

ア「やあ、アパチャイだよ!」

ほ「うおお!!」

ほ「クッキーアタック!!」

ア「アパ!」

今のうちなのだ…

シュッ

ほ「どひゃー!!…いつの間に!?!」

ほ「チョコ、ポテチアタック!!」

ダッ

ほ「わっぷー！」

ア「やあ、アパチャイだよ！」

ほ「ひいひいひい」

バッ

ほ「なに、この生き物〜っ!?」

シュツ

ア「やあ、アパチャイだよ！」

まずい！！持ちゴマが底をつきそうなのだ！  
なんとしてもお兄ちゃんのお好物のチーカマと、  
お母さんの手作り弁当だけは守りきらねば…

ほ「いったん退却だーっ！！」

ア「アパパパ」

ほ「うんしょ」

カラン  
ほ「！！」

ほ「キヤーー！！」

ドシ ポス

ほ「!?!」

ア「アーパ」

ほ「あつ……助けてくれたの?」

ア「アパ」

ほ「案外いい奴じゃないか、ちみは……この道場の人間はみんな悪人だと思つてたのに」

ア「逆鬼大酒飲みだけどいい人だよ。剣星もすけだけどいい人。秋雨も難しい事言うけどいい人。しぐれも刀振りまわすけどいい人だよ!」

ほ「まあとにかくお兄ちゃんのいるところまで案内してちょ」

ア「らじゃらじゃー」

シーン

ア「あれえ?」

ほ「うーん、誰もいないのか?」

ググ…

ほ「お!」

バビュン

ほ「ひいひいっ!!」

ズズン

ほ「わう!!」

と、飛んだよこれ……

ア「ここにもいないよ!!」

ア「きつと買い物だよ。剣星が鉄球つけてたから」

買い物になぜ鉄球?

ゴソ ゴソ

ほ「ん?」

鬨「チュ?」

ほ「どっひゃあ!!」

ほ「お兄ちゃんのチーカマがネズミに持ってかれちゃった!!」

ア「あば!?!あれはよく盗み食いをアパチャイのせいにする、しぐれのネズミの鬨忠丸だよ!!」

サササ

し「だ…れ?」

ぬっ!!!?

ボン キュツ ボン

ムチプリが……もう一人!?

ほ「……………」

ほ「人を待たせて何してるんだろう、あの二人」

し「あつた?お茶」

ア「ないよ!アパチャイ、前に美羽がいれてるの見たのに……」

し「やっぱりお客さんには、お茶だよ……ね?」

ドス 水槽

ア「湯のみはあつたよ」

カサ カサ のり

し「お茶ってこんなのだ……よね?」

し「あとはお湯だ……け」

ア「案外、簡単だつよ」

ほ「何…これ?」

「「お茶?」「」

ほ「あたしに聞いてどうするー!？」

ほ「お茶っていうのは「じゅちゃってー!」  
さくら さくら

ほ「「じゅちゃってー!」」

ドポドポ

ほ「「じゅいれるのー!」!」!」!」  
ドンー!

「「「おおおお」」

ア「すごいよ!手際いいよ!」!」

し「やるねキミ!」!」

ほ「え…そう?」

ア「天才だよ!びっくりしたよ!」!」

し「やるねキミ!」!」

ほ「家庭科…成績悪いんだけどな…ま、二人とも飲んで」

ア「うん!いただくよ」

ズズ…

ア「あちっ!アパチャイネコ舌だったよ、忘れてたよ!」!」

し「やるねキミ……」

美「疲れました？」

「「な…なんの…」」

兼「くっ、この門いつも重くて……」

美「コツですわコツ」

ア「あばばばば」

霧「やけに、にぎやかですね？」

兼「む？あれは……」

美「あら、ほのかちゃん!!」

ほ「あっ！お兄ちゃん!!」

ほ「探したじよ!!」

美「うわーかわいいですわ!!」

兼「ばか、みつともないだろ!!」

兼「言つたる！兄は今、本気で武術に打ち込んでいるんだ。邪魔になるからくるなって」

ほ「だって…」

美「兼一さん、そんな言い方しなくても…」

兼「甘やかすとくせになります」

美「ほのかちゃん、いつでも遊びに来てね」

ほ「よるなムチプリ！」

美「ムチプリ？」

霧「ほのかちゃん久しぶりだね」

ほ「ん？あんた誰？」

兼「忘れたのか明人だよ昔遊んだことあるだろう」

ほ「ああ！明人兄ちゃんか久しぶりだじよ」

霧「兼ちゃん言ってなかったの？」

兼「そういえば忘れてた」

岬「二人とも、そろそろ稽古を始めようか？」

「「はい！」」

ほ「ぬ！！」

稽古…そうだ、この道場の実態を調べなくちゃ

兼「やーっ！」

バン！

ほ「！！！」

岬「立ちたまえ」

兼「うう！！！」

岬「早く！！敵は休みなど与えてくれないよ！！！」  
ガツ　ズガアアツ

ほ「やめてーっ！！！」

ほ「お兄ちゃんをいじめるなーっ！！！」

霧「ちがうよほかのちゃん」

ほ「え？」

霧「いじめているんじゃないよ。みてっらん」

兼「うぐ……」

霧「兼ちゃんの目を！！！」

兼「まだまだ！！！」

ほ「！！あの目……」

兼「やめろー！」

ほ「お兄ちゃん!？」

兼「やめろーっ!妹に手を上げる奴は、ぼくが許さないぞ!！」

「ふん!」

「本ばっか読んでいるもやしコンニャクがかっこつけんな!」

ガッ ドツ ガス ドカ

ほ「やめてよー」

「どつだまいつか!？」

兼「いや…」

「!？」

兼「まだまだ!！」

「う、うわぁ…なんかこいつこえーよ!」

兼「どうした?もう終わりか?」

「にげるーっ!！」

お兄ちゃんのおんな目…みるの何年ぶりだろう。

兼「もう一本！」

ほのかけが知っているかと思つてた…お兄ちゃんの中にある強さ！

この道場の人達にも見つかつちやつたんだね！！

兼「かあさんの手作り弁当うまかつたよ。でも、あんまり兄に会いに来るな！」

兼「白状すると兄のボロボロな姿を、できれば妹には見せたくないんだ！」

ほ「うん、わかつた。約束する。お兄ちゃんの様子を見に来るのはもいやめるよ！」

次の日

兼「おい。お前…人の話聞いてないだろ？」

ほ「えっ？だってほかのはアパチャイとしぐれには毎日会いにくるつもりだよ」

霧「はは、また騒がしくなりせうですね」

美「そうですね」

ほ「梁山泊って楽しいじょうー！」

ランキング急降下(前書き)

香坂流真空斬

目にも留まらぬ早さで相手を切り付けるわざ

使用者：香坂しぐれ・霧沢明人

## ランキング急降下

新「見る！ラグナレクの辻に負けて以来、学ラン（新島の作っている学園でのパワーランキング）での貴様の順位は急降下だぞ！！」

新「失った信用を取り戻すというのは大変なんだぞ。分かってんのか兼一！！」

兼「何がいいたいんだ、宇宙の人？」

新「呑気に弁当食つとる場合かってことだ！」

兼「あ、美羽さんの手作り弁当が！！」

美「立場をわきまえろ！！」

兼「弁当かえせ宇宙人！！」

美「二人とも〜おい」

新「ええい！！親友がこんなに心配してやってるのにい〜！！」

兼「知るか！！そんな、お前がお前のためにお前の汚れた手で作りあげたランキングなぞ！！」

兼「だいたいボクは、ランキングとかで、威張りちらすために武術をやってるわけじゃない！！」

新「ほう、では何のためにやってる？」

兼「べ…べつになんでもいいだろ」

新「人に堂々と言えないような動機で武術やってんのか!? なめんなあーん?」

新「くやしかったら、納得できる理由言ってみろ!」  
ムカツ

兼「誰もが見て見ぬフリするような…悪人を片っ端からやっつける…正義の人になりたいんだボクは」

シーーーーーン

パチ パチ

兼「!?!?」

パチ パチ パチ

「おおーすげーよ! あんなくせーセリフ真顔で言いきったぞ!」

「前々から、不良に一人で立ち向かってるとは聞いていたが……」

「いいぞ兼一ひそかにオレ達お前に期待してたんだよ!」

兼「……………」

「そつだよ! 不良をやっつけて、この学校を住みやすくしてくれよ」

兼「え？」

「へ〜言うじゃん。そういうの嫌いじゃないよ〜！」

「無理しないでよ〜！」

兼「え？」

新「ガーツ！いつまで乗っている〜！」

兼「ぎゃあ〜！」

新「気づいたか？自分の背負ったものの重さに」

新「貴様のようないじめられっ子がどこまでやれるか、オレだけじゃね〜学校中が期待してるんだよ〜！わかったか！？ああん〜！」

新「起立〜！きおつけ〜い〜！」

兼「は、はい〜！」

新「わかったらしゃんとしろ〜！」

新「よし、では本題に入ろう！」

兼「いや、だから、なぜお前がいばっている？」

新「木本淳、三年。武田なき今急激に、勢力を伸ばしてきた男だ〜！」

兼「モ…モジャモジャああー!!」

新「うお!なんだよ!?!」

美「どーどー。この間の辻とかいう方に負けて以来、そういうモジャモジャした髪型に拒絶反応がでるんです」

新「……………」

兼「モジャ…」

新「貴様の精神状態などどーでもいい!!とにかくこいつを倒せ!!」

新「最近、こいつはラグナレクをバツクに、リンチ!カツアゲ!何でもありだ!!」

新「こいつを殺れば貴様の株は急上昇まちがいなしだぜ!!」

兼「!!一つだけ言っとくが、ボクは人気取りのためには絶対に戦ったりしないぞ!!」

新「えっ、みんなのヒーローって、ようは名声が欲しいんだろ?」

兼「し…心まで腐ってるなお前…」

新「じゃあいいよ明人君にかたずけてもらっつから」

兼「明人がそんなことするもんか」

新「助けてー殺されるー！って電話したらすぐ来てくれたぞ…三回も」

兼「お、お前ってやつは」

兼「とにかく明人にも来るなど連絡するし、お前の言いなりのケン力なんかしない！！」

新「き、貴様ーっ！今まで何のために生かしたと思っっているーっ！！待てこらー！！」

そうはいくか！ダメ人間がどこまでできるかオレは試してんだよ！貴様らは二足歩行型モルモットだ！！

兼「ふう…まったくいつにもまして邪悪な奴だ…疲れた……」

兼「美羽さん、すみません園芸部が長引いて…あれ？」

兼「なんじゃこりゃ？」

兼「えーと、大事なお話があります。体育用具室まで来てください美羽！」

だ…大事なお話…！！

バツ

兼「今、行きますよー！美羽さん…！！」

フフフフ

ウフフフフ

ウヒヒヒヒヒヒ

兼「美羽しゃあーん!!お呼びでしょうかーっ!？」

淳「あーん?」

「誰だてめーは?」

兼「モツ・・・モジャモジャああああー!!」

淳「誰がモジャモジャだ!!」

「ケンカ売ってんのか!？」

ブン

先手必勝 敵の意表を突け!

ガッ

兼「やーっ!!」

パンチを飛んでかわしてそのまま一人にとび蹴りを当てた。

「う・・・うわあ!!」

兼「？あれ・・・でも、美羽さんは・・・？」

「あ・・・あのこれ・・・」

兼「え？君のдар？しまつて帰りなよ」

「あ、ありがとう！君、噂の1のEの白浜君だろ！ほんとうだ！すごい男だよ、君！！」

兼「どうなっているんだ？・・・む！？こ・・・こんなところに・・・に・・・新島じるしが・・・」

兼「おのれーっ！新島ーっ！！」

新「兼ー？ああ、生きてか死んでつか、明日のお楽しみにとつてあんの」

新「それより今は二人でエンジョイしましょう」

美「二人でつて・・・兼ーさんがここで待てつて言っただんですわよね？」

美「フツ、まあ・・・そんなような事言いたそうなオーラを察知した、オレ様の独断かな！」

文月学園文化祭（前書き）

山突

相手に上下同時突きをはなつ技

主な使用者：白浜兼一、霧沢明人

## 文月学園文化祭

鉄「あー今日はもうすぐある文化祭について話し合いたいと思う」

鉄「なにかやりたいものがあるやつは手をあげる」

ム「…スッ……」

鉄「なんだ土屋いつてみる」

ム「メイド喫茶……」

鉄「喫茶店だな」

ム「ちがメイド……」

鉄「他に何か意見ないか」

鉄「ないなら喫茶店に決定するぞ」

明「ちよつとまったー！」

鉄「なんだ吉井」

明「ムツツ…康太の案はメイド喫茶のはずだ断じてただの喫茶店じゃない！」

「そつだ！そつだ！」

「よく言った吉井」

「ちゃんとメイド喫茶にするべきだ！」

「はあ、何言ってるのよ男子！」

「ふざけないでよ！」

島「吉井、お仕置が必要なようね」

明「くっ、ひ…怯むなどにかく男子はメイド喫茶を推奨する」

「いいぞ吉井」

△「ともに戦おう…」

島「ならこっちは普通の喫茶店を推奨するわ！」

「いいわよ〜島田さん」

「素敵…おねーさま」

鉄「ああ、いいかお前らもう少し穏便に進めろよ」

雄「お前らどうだ、ここは召喚獣バトルできめないか」

明「召喚獣バトル？」

雄「そうだメイド喫茶側と普通の喫茶店側に別れて代表を五人決めて先に三勝したほうが勝ちってことでどうだ」

島「いいわね、その勝負受けてあげるわ。いいわよねみんな」

「「「ええ!!」「」「」

明「男子もそれでいいかー?」

「「「おー!!」「」「」

雄「それじゃあ30分後に勝負開始でいいか」

「「「「おう」「」「」

雄「それじゃあ鉄人たのむぜ」

鉄「西村先生と呼べ!まあいいだろうそれでは第一回戦土屋康太対  
安城命、教科はなんにする」

△「保健体育……」

鉄「よしそれでは第一回戦開始」

「「「サモン!!」「」

安城命 201点

土屋康太 465点

一瞬で勝負がついた。

安「ゴメンあれにはかてないわ」

島「大丈夫よこれから挽回すれば」

明「やったねムツツリー」

ム「これくらい当然」

それから続く第二回戦、三回戦と男子が負け越し第四回戦。

吉「頼むよ明人君に全てがかかっているんだ！」

ム「敗北は許されない……」

霧「はいはいがんばりますよ」

「明人！てめえもつと気合いいれやがれ！」

「負けたら承知しねえぞ！」

霧「わっわかったよ」

鉄「それでは第四回戦佐藤美穂対霧沢明人教科はなににする」

佐「英語でお願いします」

明「まずい、明人の苦手教科だよ」

鉄「それでは第四回戦開始！」

「サモン」

佐藤美穂 391点

霧沢明人 104点

佐「悪いけど決めさせてもらいます」

霧「……………」

佐「あ、当たらない」

霧「こんなの師匠達の動きに比べれば」

じわじわと明人の攻撃があっっていく相手の点をへらしていく

42点 95点

霧「これで終わりだ！」

佐「くっ……」

佐藤美穂 0点

霧沢明人 95点

鉄「勝者霧沢明人！」

霧「ふう……あぶないあぶない」

明「いや……どこが？」

霧「最初に一発かすったじゃん」

明「それだけ！」

霧「それだけって結構神経使ってるんだよ。あの点数差だと一発でももらったらふきとぶからね」

ム「ともかくこれで二勝」

明「そうだね、最後は僕が決めてくるよ」

「負けんじゃねえぞ吉井」

「お前に全てがかかっているんだからな」

ム「いってこい」

明「わかってるよ。さあ最後の相手はだれだ！」

島「うちよ吉井」

明「げ、島田さん」

島「さあ始めましょう吉井」

霧「きおつけてね、明久。君は観察処分者なんだからね」

鉄「それでは教科はなににする？」

そつだ島田さんの苦手な古典にすれば！

明「教科は古典…」

島「数学でお願いします！」

明「あつちよつと！」

鉄「よし、島田美波対吉井明久、数学勝負開始！」

島「サモン」

明「くつサモン」

島田美波 182点

吉井明久 59点

「負けるな〜吉井！」

「根性見せる！！」

「意地でも勝ちやがれ！」

明「わかつてる！」

とは言ったものの点数けの差は約三倍だしなあ。

島「行くわよー！」

明「くっ」

こえなつたら一か八か明人のまねを。

島「えい！」

明「そりゃ」

島「キヤツすばしっこいわね」

あれ今なんか変な感じが

島「こんどこそ、えい！」

明「ほっ」

島「もうなんであたららないのよ！」

やっぱりだ、召喚獣が動かしやすくなってる。…そうか！日頃観察  
処分者としての仕事で細かい動作がしやすくなってたんだ。

明「今度はこっちからいくぞ！」

島「キヤツ！」

明久の細かい攻撃で島田さんの点数を削っていきそして

明「これで終わりだ〜！」

明久の召喚獣が美波の召喚獣の首に木刀を突き立て勝者は決した。

鉄「勝者吉井明久！」

島「そんな…」

明「やったぞ〜みんな！」

ム「よくやった明久」

「お前ならやってくれると思ってたぜ」

島「ごめんみんな…」

「いいわよ島田さんは頑張ったわよ」

「そうそう、きにしないで」

明「ともかく僕らが勝ったんだから、文化祭はメイド喫茶でいいよね鉄人」

鉄「西村先生と呼べ！まったく…不本意だがしかたがない」

「」「」「よっしゃー！！」「」「」

梁山泊

霧「てなことがあったんですが、皆さんどうです文化祭来ませんか」

兼「行く行く、ね〜師匠行ってもいいでしょ〜」

岬「そうだね〜」

美「いいじゃないですか、たまには休みも必要ですよ」

岬「まあ、いいか。いつといで兼一君」

兼「やった！」

これで修業を休める。

岬「時に明人君」

霧「はいなんですか？」

岬「さっきの話を聞いたかぎり君は一般人に一撃もらったわけだね」

霧「いや、だから召喚獣での攻撃ですって」

岬「受けたことにはわりはないよ。これはもっと厳しい修業が必要だよだね」

霧「でも、召喚獣は動かさにくいし……」

岬「問答無用！さあきたまえ！！」

霧「キョエ〜〜！！」

兼「はは、明人ご愁傷様」

逆「なにいつてんだ、おめーもこんど休むんだろ！そのぶんたつぷりと修業だ！」

兼「ヒィ〜〜〜」

「「ギャーーーーー!!」」

文化祭当日

霧「いちいちち」

明「どうしたの明人？」

霧「召喚獣バトルで一撃もらったのをしられてしごかれた」

雄「それは大変なこつたな」

霧「まっただよ」

秀「そろそろ開店じゃぞ」

明「早く着替えてきたら島田さん」

島「わかってるわよ」

秀「……………」

明「何見てるのさ秀吉も早くいかないと」

秀「わしは男じゃ!」

明「うん分かってる、秀吉は秀吉だよね」

秀「会話がかみあっておらん」

霧「諦めたほうが良さそうだよ秀吉」

秀「むう…不本意じゃがしかたない」

「「「「いらつしゃいませ」「」「」

明「見てると爽快だね」

ム「たしかに」

秀「おぬしらもみとらんで手伝ってくれんかのう」

「「「「い、いらつしゃいませ」「」「」

霧「あ、兼ちゃん達来てくれたんだ」

兼「やあ明人」

美「にぎわってますわね」

逆「さ、最近の文化祭はすげえんだな」

ア「すごいよ！きれいな服がいっぱいよ」

馬「オネーチャンビール二つね」

「お酒はちよつと…」

霧「あれ他の師匠がたはどうしたんですか？」

逆「他の奴らなら召喚獣バトル大会てのをみにいったぜ」

島「なにになにだれなの？みんなの知り合い」

明「ああ、島田さんはまだあつたことがなかったね。明人の友達の白浜君にその師匠達だよ」

島「あつこの人達が私島田美波です」

兼「僕白浜兼一です」

美「私は風林寺美羽ですわ」

ム「師匠お久しぶりです」

馬「おお君かねどうね写真は上手く取れるようになったかね」

ム「ちかき日にせいかをお送ります」

馬「うむ」

岬「いやあみんなおまたせ」

し「おまたせ」

霧「あつしぐれさんに岬越寺師匠、どうでした大会のほうは」

岬「なかなか興味深かったよ」

し「全員武器…の使い方がなつとら…ん」

霧「はは、まあ一般人だし」

岬「もう少し近くで観察したかったのだがね」

雄「それなら教師を呼んできましようか？そしたらここここでじかにみれますよ」

岬「ほう、それはいい。ぜひたのむ」

雄「わかりました。ほら明久誰誰でもいいから呼んでこい」

明「了解！」

明「えーと先生は、げ鉄人か…この際しようがないか」

明「先生…ちよつといいですか？」

鉄「ああなんのよう…すまん間違えた」

明「は？」

「一体なにを間違えたんだろう？」

鉄「今度は何をたくらんでいる吉井！」

明「間違えたのは僕へのせっしかたですか！？」

明「まったく失礼な。僕はただ召喚許可をとりにきただけですよ」

鉄「なぜだ？」

明「お客様の中に召喚獣を近くでみてみたいという人がいるんです」

鉄「そうか、それなら許可してやる」

明「ありがとうございます」

明「もらってきたよ」

雄「よし、それじゃあ明久召喚しろ」

明「え、なんで」

雄「観察したいんだから触れるお前の召喚獣のほうがいいだろう」

明「それもそうかさモン」

ポンッ

明久の召喚獣がでてきた

岬「ありがとうございます」

雄「いえいえ、それと明久の召喚獣は特別で触れますよ」

岬「ほう、それは好都合だ。吉井君の点数ではどれくらいの力があるんだい」

明「あいにくぼくの点数くらいじゃ人の3よくても5倍くらいしかありませんよ」

岬「では私のことをおもいつきりその木刀で叩いてみてくれないかね」

「「「「ええ!?!」「「「「「

明「そ、そんなの無理ですよ!」

雄「いくらあんたでも死んじまうぞ!」

秀「いくらなんでもきけんじゃ!」

ム「無謀……」

島「そうですよ!」

霧「大丈夫だよみんな」

兼「その人なら余裕で受けれますよ」

美「そうですわ」

明「でも……」

岬「いいからきたまえ、心配はむようだ」

明「そ、そこまで言うのなら」

明「それっ!」

ブッ

岬越寺師匠の頭に向かってはなたれた召喚獣の木刀

ガッ

それを指一本で止める岬越寺師匠

「「「「「な!?!」「」「」」

岬「こんなものか…ああ、ありがとう吉井君。おやどうしたのかね？」

明「いやそりゃあ」

雄「人の何倍の力のある召喚獣の攻撃を指一本で止めたんだ」

ム「驚きもする」

岬「ははは、普通だよ」

この人の普通っていったい…

ア「さつきから秋雨バツカリさわってずるいよ!アパチャイにも触らせてよ!」

岬「やれやれ…いいかい吉井君」

明「あ、いいですよ」

ア「ワイありがとよ吉井」

霧「きおつけてくださいよアパチャイさん。明久の召喚獣はダメー

ジをつけると痛みが少しかえってくるんですから」

ア「わかったよきおつけるよ」

ア「わーすごいよ！尻尾もあるしちっちゃい動物みたいだよ」

し「アパチャイ僕にも触らし…て」

ポヨン

明「お！！」

この首筋に感じる柔らかい感覚はまさか！！

霧「ん？どうしたの明久」

明「え、ううんなんでもないよ」

秀「鼻の下がのびてるぞい」

明「はは、そんなばかな」

ア「しぐれ、そろそろ帰してよ！」

し「あ、引っ張るなアパチャイ」

ア「帰してよ！」

し「いやだ」

明「デデデデデー！！」

美「ちょっと二人とも明久さん痛がってますわよ」

ア「そうよ！しぐれはなすよ！」

し「アパチャイがはな…せ」

霧「ちよっそれ以上やったら首が…」

ボキッ

明「首がもげたようにイタイイイイ！！」

それではこれで今年の文月学園文化祭を終了します。皆さんきおっけてお帰りください。

雄「終わったな」

島「ええ」

秀「途中からうちのクラスめちやくちやじゃったの」

ム「収穫はおおきかった」

雄「ところで明久はどうだ？」

霧「まだ気を失ってるよ」

雄「そうか。明人よくお前あの道場通ってられるな……しかも住み込みで」

霧「もうなれたよ……修業以外」

雄「そうか」

霧「うん」

雄「これからも頑張れよ」

秀「死ぬでないぞ」

ム「応援はしてる」

島「頑張ってるね」

霧「……………うん……………」

## 手が出ない(前書き)

カウ・ロイ

ムエタイの技のひとつで、首を押さえ込む首相撲状態からの膝蹴り。わざと相手の顔を狙った突きをかわせ、よけた隙を狙い、取りに行く場合もある。主な使用者：白浜兼一、霧沢明人

手が出ない

「おおおおおー!!」

バキッ ドギア

? 「自分に気合いでござる!!」

? 「あの場所は見つかったか!？」

「はい!」

? 「そうか! いよいよでござるな! ……梁山泊の最期も!!」

梁山泊

兼「でいやああ!!」

美「よっ」

兼一の正拳を左にかわし

美「やつ!」

兼「ぐっ!!」

まわし蹴りをはなった

馬「どーしたね兼ちゃん? もっと攻撃しなくちゃ!」

兼「いや…そう言われてもスキが全然なくて……」

馬「スキがない？もっとよく相手を見るね」

兼「み、見てますよ！！」

美「はあ！」

兼「くっ！！」

美羽の猛攻が続く

馬「どんな達人でも、常に守りと攻撃を完璧にこなしてるわけじゃないね」

美「どうしました？手を出さなければ絶対に一本とれませんよ！！」

兼「出す暇がないんです！！」

馬「戦いを長引かせれば、どこかで必ずスキを見せるもね！」

兼「くそっ！！」

ガッ

手刀で攻撃した

兼「！！」

あれっ？今…脇腹にうちこめば…一本とれるんじゃないあ…あれはスキだよな！？

ザワッ

兼「うっ！！？」

美「遅いですわー！！」

兼「あっ！！」

馬「ふう……」

兼「いたた……」

馬「何やってるね！？」

馬「せっかく美羽がわざと、打ち込めるスキをつくってくれたの  
ね！」

兼「え！？」

わざとだったのか……

兼「うわーん！！」

美「あっ、待って……」

兼「ひどいやひどいやーっ！！」

美「何でバラすんですか！？」

馬「格闘家にとって、自分の力を過信する事ほど、危険な事はない  
ね。わざと負けるのはだめねー！」

ああ、兼一さん傷ついたかしら…

霧「あの、二人ともちよつといいですか？」

馬「なんね明ちゃん」

霧「しぐれさん知りませんか？さっきから見つからなくて」

馬「しぐれどんならさっきアパチャイと一緒に外に行つたね。多分ほのかちゃんを迎えにいったんじゃないかね？」

霧「そうですか、困つたなあ稽古つけてもらおうと思つたのに」

馬「だつたらおいちゃんが見てあげるね」

霧「え、でもいま兼ちゃんがやってるんじゃない…」

馬「大丈夫、今兼ちゃんはちよつと相談に行つてるからね」

霧「相談？なんのですか」

美「実は…」

霧「なるほど…でもそんなに落ち込まなくても大丈夫ですよ美羽さん」

馬「そうね」

美「そうですか…」

霧「あ、それと馬師父ムツツリーニからあずかりものです」

馬「なんね？」

霧「さあ？とりあえず開けてみたらどうですか」

馬「そうするかね」

ベリッ

馬「これは！！」

美「何がはいつてましたの？」

馬「なっなんでもなかったよ、ただの紙ね」

美「ほんとですか？」

馬「ほんとね！さっ明ちゃん修業を始めるね！」

霧「はい」

どうせこの間の文化祭の写真なんだろうな。

ほ「行ってきまーす！！」

母「あら、今日も道場へ？」

ほ「うん！」

父「はっはっはっ、せっかくの日曜日だ。どうね、わしもちよっと行って道場の先生方に挨拶してくるかな」

母「真夏にコートですか？あなた」

父「……………」

母「セバスチャンは置いていきなさい！！」

父「ええい！セバスチャンなど持っていないぞ！断じて持っていない！！」

ほ「そんじゃ行って来るねー！」

父「ああ、こら待ちなさいほのか！お父さんが車で送ってやるう！！」

母「あなた！」

ほ「お父さん悪いけど、ほのか、もっといいので行くから！」

「「？」「」

ピィ〜〜ッ

フツ　ズズーン

ほのかが口笛を吹くとアパチャイが降ってきた。

ほ「ごめんまった？」

ア「アパチャイ、その公園でハトと遊んでたよ！」

父「ぬうう…出たな怪物…！」

父「いでよ！マクシミリアン…！」

猟銃のマクシミリアン

父「娘をはなせ！怪ぶっ…！」

ゲイン

ほ「んっ！？」

母「夕御飯までには、帰ってくるんですよ」

ほ「ほのかはもう子供じゃないもん！夕御飯もあっちで食べるの！」

ほ「さあ、レッツゴーだじょ…！」

ア「……………」

ア「あー夕御飯までには、ちゃんと連れて来るよ…！」

母「え？あ、どうも…」

バビュン…！

母「キャッ…！」

屋根を渡って飛んでいった。

母「……いい方のような……」

ギシッ ギシッ

兼「自分の部屋に戻るのに、毎回ロープなんか登ってたら体が持たないよ！しかも弟子は足を使っちゃいけないときだ」

兼「なぜ、この離れには階段がないんだろう？」

岬「それはね昔、逆鬼と剣星が酒に酔ってね……」

兼「あ、岬越寺師匠」

逆「このやろー階段のくせに段なんか作りやがって！！」

馬「こまごましていやね！！」

逆「ちくしょー階段のくせしやがって！！」

馬「そうね！全部階段のせいね！！」

逆「うおおおおお！！」

馬「チヨワーーー！！」

岬「なぜか二人して階段が悪いという結論にいたったらしい……まあ、何かあたる物が欲しかったのだろう……」

兼「おいおい」

岬「直そうとも思ったが、これはこれで、早くて良いのでね！」

バツ

成るほど飛び降りたほうがはいいのか。

兼「あ、師匠！！師匠、ちょっと相談が……」

ピシヤ

兼「……………」

兼「困った……誰に相談しよう……」

コン コン

逆「あいてるぞー」

兼「失礼しまーす」

グッ

兼「あれ？」

ギギ

兼「あれれ？重い扉だなあ……」

兼「うおおおおお〜!!」

逆「何だよ!やかましいなあ?」

ビュッ

兼「ああ〜っ!!」

兼「が吹っ飛んだ」

兼「うっ…逆鬼師匠〜っ!!」

逆「なにやってんだおめえ?」

兼「実は……」

逆「何〜い?」

逆「打ち込むスキがあったのに、打ち込めなかったあ?」

兼「ええ…なぜなのでしょう…」

逆「しるか!」

兼「少しくらい考えてくださいよ!」

逆「やれやれ、うるせー奴だな…そういう事は秋雨あたりにきけよ!」

兼「岬越寺師匠も馬師父も、出かけちゃいました!」

逆「さあーな、気のちいせー奴の心なんざ、オレにはさっぱりだからな！」

逆「ただ、反撃が怖くて手が出せねーって奴は、よくいるぜ！」

逆「相手を倒すきめの突きは、はずせば途端に自分を不利にしまう。チャンスがピンチに早変わりってわけだ！」

逆「まあ、オレだったらどうせ一撃で終わるからカンケーねーがな」

逆「あーあ、ビールが切れちまったよ。かってくらあ」

確かにあの時…ボクは反撃を恐れた！！

逆「兼一！」

兼「！！！」

逆「生死を分けるチャンスの時に、突きが出せるかどうかで・男の価値は決まるんだぜ！！！」

兼「……はい！！！」

道場破り(前書き)

一本背負い(いっぽんぜおい)

相手の片腕を肩に背負い、投げる。

(使用者：白浜兼一)

## 道場破り

? 「ついに見つけたぞ! ここが伝説の梁山泊か!」

その頃のほのか達はどうと…

ほ 「あははははは!」

ア 「あははははは!」

ほ 「いやっほーっ」

し 「……………」

闘 「…! チュッ」

し 「!」

ア 「あ、しぐれだよ」

ほ 「え!」

ほ 「迎えに来てくれたんだ?」

し 「うん」

し 「今日は何してあそぶ?」

ほ 「トランプー!」

ア「ええーまたアパチャイがビリになるよー」

ほ「んじゃオセロ」

ア「それもアパチャイまけるよ！」

梁山泊

兼「……フウ……」

兼「ここだという時に突きが出せるかどうかで…男の価値は決まる  
！…！か」

兼「確かに、ボクはあの時……」

美羽さんの反撃を恐れ、突きをだせなかった！！

兼「ああ……ボクの根性なし……」

？「たのもーっ！」

兼「！」

？「たのもーっ！…！」

兼「だれだろうっ？」

ドッ

兼「わっぷー！」

？「たのもつでいじめるー!!」

兼「うわあああー!!」

門を開けられた勢いで吹き飛ぶ兼一。

兼「ど…どちらさまでしょうか」

熊「せっしや死拳己流師範!!熊鳥権瑞でいじめるー!!」

兼「ご…ご用件…は？」

熊「梁山泊の看板をいただきにまいったー!!」

兼「ひー!!」

兼「明人!美羽さん!明久!美羽さん!たいへんだーっ!!」

「「ほえ?」」

兼「どど…ど…道場破りだー!!」

霧「なんだってー!!」

美「あら、そうですか」

霧「つて、あらそうじゃないでしょーっ!」

兼「なんかごう、見るからに強そうなのとその弟子っぽいのがつじ

やっじやと!!」

美「まあまあ大勢で？」

美「道場の方へ御案内しないと」

「「してどーする!?!」」

兼「逆鬼師匠はもどってきてないんですか？」

霧「岬越寺師匠は？馬師父か、アパチャイさん、しぐれさんでもいいです!!」

兼「はやく誰かよばないと!!」

美「え〜と…全員でかけて留守ですわ」

「「ええーっ!!?!」」

美「逆鬼さんはビールを買いに行ったきり、岬越寺さんは接骨院、馬さんは鍼灸院に。おじいさまは南の方にふらつと…アパチャイさんとしぐれさんは、ほかのちゃんを迎えにいきましたわ」

兼「あ〜〜いつもいなくてもいい時はみんないるのに」

霧「…なんでこんな時だけ…」

美「とにかくお待たせしては失礼ですわ」

トン

熊「……………」

美「粗茶ですが、どうぞ！」

「師範！毒入りです飲んでではありません！」

熊「せっしや馴れ合いに来たわけではないのでござる…！」

美「わかりました。ではこちらに住所、氏名と流派を書いてください」

美「あと、これ長老からの注意事項ですわ」

熊「なに、挑戦者は一名につき金一万円徴収…！」

美「さらに一円で一度に全員襲い掛かる権利もつきますが…！」

おいおい…

「き、き…貴様いい加減にしろ…！」

熊「までい…！いいであろう。で…あといくら足せば、ケンカ100段逆鬼至緒を、りくえすとできるのでござるか？」

逆鬼師匠を！？

熊「梁山泊に豪傑、数あれどやはり同じ空手家を、まず、血祭りに上げるのが筋というもの…！」

美「あら、ごめんなさい。今、誰もいませんので、私がお相手しますですわ」

「「「「！」「」」」」

美「さあ、こちらへどうぞ」

熊「……………」

熊「ぬ…ぐぬぬぬ…」

熊「ぐぬうう…おのれええーっ！小娘があー！！」

熊「こ、こ、ここまでこけにされたのは、生まれて初めてだー！！」

熊「堪忍袋の緒が切れたー！！死にさらせええー！！」

美「！！」

「「「待てー！！」「」」

熊「ぬう、出たか梁山泊の豪傑！？姿を見せーいつー！！」

ドオオッ

美「ああ！壁をー！！」

「「その人に手をだすな…」「」

「「なんだ、さっきの小僧か！？」」

「それにもう一人の方もガキじゃねえか。うせろ！ケガするぞ！」

「「やかましい！！」」

兼「ボクらは梁山泊の弟子、白浜兼一！！！」

霧「霧沢明人！！！」

霧「そ…その人に手を上げるならボクらが相手になるぞ！！！」

兼「こ…この、この…カニ頭！！！」

## 男の価値（前書き）

### 武器偏

手裏剣：投げる事で相手に遠距離攻撃が可能。しぐれは香坂流五月  
雨手裏剣という技で手裏剣の軌道をもあやつる。  
主な使用者香坂しぐれ、霧沢明人

## 男の価値

兼「僕らは梁山泊の弟子、白浜兼一!!」

霧「霧沢明人!!」

霧「その人に手を上げる気なら」

兼「僕らが相手になるぞ!!この…この…カニ頭!!」

ふ…二人とも!

熊「うぬぬおのれ、どいつもこいつも…バカにしおってーっ!!」

熊「おい、バットをもて!!」

「は、はい!!」

熊「でりゃ!!」

バキィ

熊「はーっ!!」

ドギヤ

熊「むう〜ん!自分に気合いでござる!!」

仲間にバットを打ち付けさせ体でバットをおった

「う…す、すい…」

「はっ！われら死拳己流空手は全身を鋼のように鍛え上げる！」

「ハハハ、びびったか小僧ども！！」

「熊鳥師範相手にお前らが戦う？笑わせるな！」

美「二人とも、ここは私が…」

霧「美羽さんは下がってて！！」

兼「こんな僕らでも梁山泊の弟子なんだ！」

美「しかし…」

熊「せりゃあーっ！」

熊「しっ！」

ブン！！

二人に向かって蹴りが放たれる

（（見える！？））

兼（普段から…師匠達の人間ばなれしたスピードの攻撃を見てきた  
せいだ！！）

（（だが！！））

ドゲシィ

「げふうー！」

(見えるのとよけられるのは別だー！)( )

美「ああー！やっぱりー！」

「ゲホ ゲホ」

霧(だめだ！導体視力に動きがついてこないー！)

熊「ふーやれやれもう終わりでござるか…」

熊「伝説とまで謳われた梁山泊も、どうやら、たいしたものではなさそうでござるな」

熊「このような青びょうたんが弟子とあつては、師匠の底がしれるというもの」

熊「フン、なにがケンカ100段だー！どうせ名ばかりが大げさに伝わっていったのでござるっ」

( (師匠…) )

熊「他に戦う物がないのなら、看板はもらっていくでござるー！」

美「だから、さっきから私がやるって…」

「か…カ二頭ー！」

熊「……………」

( (そうとも) )

「「かつてに…終わりにしないでください…」」

( (僕は梁山泊の弟子だ!!) )

熊「ほう、拙者の蹴りをまともにくらって、立ち上がってくるとは、根性だけはあるようでごぞるな」

霧「フフ師匠がいいんでね!」

兼「受け身を徹底的にやっています!」

熊「だが、もう一撃くらえば確実に死ぬぞ、小僧ども!そして・打ち込む度胸があるなら…」

熊「打ち込ませてしんぜよう!そして自分達の無力さをして、散ってゆくがよい!」

( (な、なに!?) )

「ふん!…こりゃあいい!突いてみる、小僧ども」

「フツ!恐ろしくて突けるものか!」

「次に反撃されたら死ぬからな」

「」  
「」

熊「……………」

うっー!!

反撃が怖くて、手が出せねーって奴は、よくいるぜー!!

「「うっ…」「」

だめだ!二人とも気を飲まれていますわ…

熊「フッ、やはり根性なしでござるな…」

「「!」「」

ギョッ ダッ

「「うおおおおー!!」「」

なっ、なに!? やりやがった!!

この状況で突きましたわ!!

熊「……フ…グ…フウッ」

熊「おのれ小僧どもー!! 腹筋の力が抜けた瞬間を狙いおったなあ  
?」

そうですね! どんなに全身鋼のように鍛えあげても、筋肉が緩んで  
いる時に突かれれば、まったく無意味ですわ!!

ここだという時に突きを出せるかどうかで…男の価値は決まる！！

熊「ガアアアアア！！」

熊「死ねい小僧ども！！」

……や、やられる！！

ゴオオオオ　　ガシッ

逆「おいおい、うちのかわいい弟子達に、なにしてんだよてめえ？」

二人に向かってふりおれされた手刀を逆鬼がとめた

「ぬう、師範こいつが…ケ…ケンカ100段！！」

「逆鬼至緒です！！」

逆「何だ、道場破りか？」

熊「ぐお！？離せ！！」

逆「兼一・明人、留守番ごころうさん。見てたぞ、なかなかいい突  
きだったぜ！！」

逆「明人はオレの助言なしでよくついたな、褒めてやるぜ」

「か…隠れてみてたんですか！？」「」

へナ　へナ

美「二人ともしっかり」

逆「さてと、弟子達をかわいがってもらったお礼をしなくちゃな！」

ビキ

熊「ギヤアアアア…骨ガー」

逆「全員寝ちまいな!!!」

ドガガガガ

「「「「「ギヤアアアア!」「」「」「」

「「キイヤアアアアア…」「」

ドカツ

霧「グヘッ」

兼「ひ!？」

美「キャア! 明人さん……ちょっと兼一さん!! 放してください」

兼「カ! カニが一瞬でー!」

ボクは生まれてこのかた…

逆「もうしまいか。今日の道場破りは一段としけてやんなー」

こんな恐ろしい生き物を見たことはありませんでした。

ほ「アパチャイ、オセロしないの？」

ア「アパ、逆鬼のおつかいが先よ。岬越寺の診療所までこれを持ってからだよ」

ほ「ふーん、できあこの人たちなんで寝てるの？病気？」

ア「逆鬼が上手に寝かしたからだよ！岬越寺のどこ持ってけば、みんな元気になるよ！格安だよ！」

ほ「へーよかったあ」

美「まったく明人さんまでまきこんで…今日はおちようし一本つけようかと思いましたがけどなしですわね」

逆「そりゃねえだろ！たのむ美羽！」

美「だめですわ」

兼「……………」

道場破りも…梁山泊運営の大事な収入源だったのか！？

## 明人の両親（前書き）

クナイ

手に持って相手のことを切り付けたり相手に向かって投げたりすること  
ことで攻撃がかのう。

しぐれは刀にそえ相手の重い一撃を止めるためにも使った。

主な使用者：香坂しぐれ・霧沢明人

## 明人の両親

兼「そういえば明人ってなんで木下さんの家にすんでいるの?」

兼「お父さんたちはどうしてるの?」

霧「……父さん達は死んだよ」

兼「え!? それってどうゆう……」

霧「そのままの意味だよ……じゃあ僕修業があるから」

兼「あ、明人」

逆「あゝあゝ やっちゃった」

兼「え?」

ア「やっちゃったよ」

兼「ええ!」

馬「兼ちゃん最低」

兼「ええ!?! だって僕知らなくて……」

岬「まあ、知らないのは当然かな」

兼「あ、岬越寺師匠どういう意味ですか?」

岬「明人君の両親の死はね隠されていて事件にもならず事故死ということでもかたずけられてるんだよ」

兼「そんなどうして」

岬「そこから先は明人君に聞くんだ」

兼「……はい」

夜

兼「明人」

霧「なに兼ちゃん？」

兼「さつきはごめん、僕なにも知らなくて……」

霧「ああ、そのこと……別にいいよ気にしてないから」

兼「そう……それならよかつたらでいいんだけど本当はなんで明人の両親が死んだか教えてくれない？」

霧「いいよ……あの時父さん達は車で崖のあたりを登ってたらいいんだ」

霧「でもそのとき車が急にスピンして崖から落ちてしまったらしいんだ」

兼「それだと普通の事故死に聞こえるけど……」

霧「もちろんその話には続きがある。その時僕は木下家にあずけられててね、僕の両親の死を知らされてその車をみにいったとき車にはあきらかきタイヤを銃で打ったようなあとがあっただ」

兼「それで？」

霧「それをみた木下家の人達も警察にいつてくれたよ。でも警察は事故死の一点張りで結局事故死のままかたづけられてしまったんだ」

霧「その後は事件のニュースにもならなかったよ」

霧「それで僕はそのまま木下家に引き取られて今にいたるってわけ」

兼「明人はさびしくないの」

霧「そりやさびしかったよ。でも秀吉達が慰めてくれたりもしてくれたし。このままいじけてても死んじゃった二人にもわるいからね。」

兼「そつか……嫌な事思い出させてごめんね」

霧「別にいいよ、それより早く寝よ。また明日も修業だよ」

兼「そうだね、おやすみ」

霧「おやすみ」

## いざ風林寺島へ（前書き）

烏牛擺頭うぎゅうばいとう

心意六合拳の技。相手の蹴りを避けながら足を取り、膝の関節を破壊しながら胸部に頭突きを入れる技。実戦ならこのまま金的攻撃を加えることもできる。主な使用者：白浜兼一・霧沢明人

いざ風林寺島へ

「「師匠!」」

「「僕らに休みをください!」」

岬「なんで?」

霧「理由なんてどうでもいいでしょ」

兼「もう一ヶ月も休みなしなんだから欲しい!欲しい!」

岬「うんいいよ」

霧「はいはいわかってますよ」

兼「言ってみただけですよ…っ」

「「ええーっ!」」

霧「本当に休んでいいんですか?」

岬「うむ、私だっておにじゃない。高一の夏は一度しかないんだ。そつだ今度みんな海に行こう」

「「海!」」

霧「学園のみんなもよんでいいですか?」

岬「ああ、いいよすきなだけよびたまえ」

霧「ヤッホー！早速知らせてきます」

兼「僕も美羽さんにしらせてきます」

岬「ふふふふふ」

思い起こせば梁山泊に入って四ヶ月、美羽さんとのなかまもまったく進展しなかった。でも海ならムードもバッチリだ。

美「へ？海ですか」

兼「そうです海ですって」

美「それなら水着かえないと…去年のはもうきつくって」

兼「脳内」

胸がきつくなっちゃって」

兼「ッ…ブシャーー！」

神様今までうらんでごめんね」。

美「キヤア！兼一さんどうしたんですか！？」

出発日

「「「「「今日はお招きありがとうございます」「「「「「

長「なんのなんの、さあ船に乗りなさい他の者はもう乗っておるぞ」

海上

明「潮風が気持ちいいね」

秀「そうじゃのう」

ほ「アパチャイ達ってあんなぼろい道場にすんでいるのに以外とお金もちなんだね」

岬「そうでもないよ」

優「こんなに立派な船を持っているのにですか」

岬「まあ、自作だからね」

明「自作って？」

馬「アパチャイそこ」

ア「あっここ塗り忘れてる」

雄「まさかこの船自分達でつくったのか!？」

ほ「し、沈まない?」

長「ホッホッ、大丈夫。目的地の島へは、赤兎馬2号を使ってよく行くとるからの」

雄「2号ってことは、一号はどうなったんだ?」

長「おもかじいっばーい!!」

ほ「ねえアパチャイ2号って…」

ア「それはね…ムグ ムグ」

秀「この船大丈夫かのう」

優「まあ、なんとかなるでしょう」

明「ところで白浜君と明人はどこにいるんですか？」

岬「二人はいま仕事をしに船の下にいるよ」

明「へー」

岬「スピードが上がらないな、エンジンの様子を見てこよう!!」

岬「美羽、進路をたのむ！」

美「あ、はい」

岬「さてと、どうしたエンジン君達？これじゃ今日中に着かないぞ  
!!」

エンジン。

「「キイイ…」」

キコ キコ

ペダルを回して船のスクリーンが回るしくみになっている。

逆「うーん、そろそろ本当に限界かな？二人とも水着みたさにいつもの三倍はがんばってたからな…」

「水着…水着…美羽さんの水着…」

岬「そうか、しかたない。ここからは、我々で漕ぐとするか…」

岬「ゆくぞー!」

逆「おう!」

「どづりゃあっ!」

ドシユウン

「うわあああ」

ほ「すいーすいー!」

ア「アパパパパ」

長「ぐわっはっはっ!宇宙の海はわしの海!」

美「おじいさま、これならあと2時間程ですわ!」

長「ふはは!船長と呼ぶよ!」

長「ここじゃ、ここじゃ!地図にもつとらんわしが見つけた島、

風林寺島じゃ！」

ほ「やっぱりお金もちじゃん！こんな立派な別荘持っているなんて……」

美「いえ、これもただですの」

『え？』

ア「わ〜い木〜切るよ〜」

逆「もういいんだよ！」

岬「もう完成したからね」

これも造ったのか！？

岬「さあ、海にいつといで。ああ、兼一君と明人君はみんなの荷物を持って行ってくれ」

「はい」

海辺

明「結構綺麗な海だね」

雄「そうだな」

明「ムツツリー二はどつ思つて？」

ム「今話かけるな」

明「あ、ごめん」

ム「ツッリーニはききせまるかおでカメラを磨いていた。」

明「女の子達はおそいね」

雄「おつきたみたいだぞ」

ム「ツッ!」

カシヤ カシヤ カシヤ

明「大丈夫ムツッリーニ?」

ム「これしきの...」

明「あれ、島田さんに木下さんにほのかちゃんなんでそんなに落ち込んでるの」

島「いや、ちょっとね」

優「あれはやばいわ」

ほ「ムチプリめ〜!」

雄「お、また誰かきたぞ」

明「美羽さんかな...ってムツッリーニ!...どうしたの」

ム「すまない…先に…い…く」ブシャー

明「ムツツリーニ…！ちくしょうだれだ！ムツツリーニをこんなめにあわせたのは…！」

美「皆さんお待たせしましたわ」

明「危ない僕！」

ブス

秘技セルフめつぶし

美「なにやっているんですの明久さん？」

明「いや、なんでも」

秀「相変わらずさわがしいう」

美「なんで秀吉さんは上をきてるんですか？」

秀「いや、ちょっと訳があつてのう」

美「へ…あつ兼一さん達ですわ、お…い」

ほ「お兄ちゃん達…早くおいでよ！」

岬「ほら呼んでいるよ、早くいきたまえ」

逆「待ちにまつた美羽の水着だぞ」

兼「そりゃあ行きたいですよ…けど」

霧「どうして…」

ザッバー

「どうして僕らは崖から飛び降りなきゃいけないんですか…!」「

ほ「やいムチプリ、お兄ちゃん達あんな所でなにやってんの」

美「さあ?」

雄「哀れなやつらだ」

明「ほんと」

馬「ほれ起きるね…まだ海は始まったばかりね」

ム「う…し、師匠」

馬「さあ、武器はもったね。それではいくね!」

ム「はい」

カシヤ カシヤ カシヤ カシヤ カシヤ

岬「ほら、早くいきたまえ」

「だから何でこんな所から行かなくちゃいけないんですか…!」「

逆「は…いいか二人とも、ケンカで一番大事もの…それ

は気組みだ!!」

逆「敵から逃げ出したり、反撃を恐れて突きが出せなかったり、モジャモジャ恐怖症になってみたり・・・その度胸のなさが今のおめーらの最大の弱点だ!!」

岬「うむ。君達のいじめられこ気質は、明らかに技を鈍らせている!!」

岬「まあつまりなんだ、せつかくの海水浴だしこの際、度胸をつけようかと・・・」

「「えーっ!そんなーっ!!」」

なんてことを考えるんだこの人たちわ!?

兼「だいたいこの間、突きは結局出せたでしょう!」

霧「なんでこんなとこまで来て、恐怖を克服する修行をしなくちゃならないんです!」

岬「南太平洋にペンタコストという島がある!」

「「!!」」

岬「その島の原住民は、成人式に高さ30メートルの台から、足にひもを付け、飛び降り勇気を試す・・・」

岬「いわゆるバンジージャンプだ!!」

岬「我々も君達がもし飛び込めたら、この島での2日間修行は免除しよう!」

「そんなむちゃくちゃな!」

霧「これは成人式じゃない!」

兼「だいたいひもがないじゃないですか!下に岩があったら、どうするんです!」

スタ スタ

ん?しぐれさん

しゅる...

「!」

馬「うひよおおお!」

ム「ツ...ブシャー!」

逆「おいおい、なぜふんどし...」

フツ

「あーっ!」

美「ああっ!」

ほ「うああー!!」

ザブーン

崖からとびおりた

「し、しぐれさん!!」

「しぐれさん!!」

チャポッ

し「岩……ないよー」

兼「し……調べてくれたのか」

逆「ちっ、少しスリルがへったな……」

岬「さあ!次はキミだ!!」

「……」

ほ「しぐれー無茶だよー!!」

美「そ、そうですね!ちゃんとした水着きてください!!」

ほ「それはちがうだろ!!」

し「いつも海はこれ……だ」

雄「ついていけん」

明「まっただよ」

秀「二人は大丈夫かの」

島「あの人も……」

優「うう…島田さん貴女は仲間よ」

島「ええ」

兼「ううっ…三人とも…絶対に美羽さんには内緒ですよ。実は僕…  
…かなづちなんです…」

霧「ええ！そうだったの！！」

岬「それが何か？」

逆「おっ、兼一のスリルが増した」

岬「さあ、いいから飛びたまえ！」

逆「そらさっさと飛べって！でなきや修業だぞ！！」

霧「この人たちは……」

長「これこれ、そう急かしては飛べるものも飛べなくなるじゃろ！」

逆「こいつもふんどしかよ」

逆「でじじい〜なんかいい飛ばし方あんのかよ?」

長「じじいづのは優しく近づいて…」

ポン

長「一気に投げ込むのじゃ!」

「ひいひいひい」

「ぎ…や…あ…あ…」

長「泳ぎなんぞたった今わしが教えてやるわい!ふははははははは」

岬「当初の目的は投げ込む事ではないのだが…」

ドッパン

ほ「ん?」

雄「死んだか」

明「さあ?もう開き直って楽しむことにしたから」

秀「二人とも生きるんじゃ」

「……………はっ」

岬「あれでは、自信をつける修業にはなりませんよ!」

長「ふむ、すまぬ…調子にのった」

逆「そうだな。何度でもやらせようぜ!」

サササ

霧「あんな事言ってるよ兼ちゃん」

兼「うっ…皆は楽しそうに遊んでいるのになんで僕らだけこんなめに」

霧「まずい…このままじゃまずい…」

兼「か、確実に僕らは殺される!?!」

「「なんとしても脱出せねば!」」

「「この風林寺島を!」」

## 脱出（前書き）

朽木倒し（くちきだおし）

足を掬い上げて転倒させる柔道の投げ技。主な使用者：白浜兼一・

霧沢明人

## 脱出

夏、梁山泊一行とバカテスマメンバーは地図にない無人島…その名も風林寺島に海水浴に来た！！

しかし、そこで二人を待っていたものは想像を絶する過酷な特訓であつた。

岬「ほーいよけてよけて」

「ひいいいいい」

竹槍よけ少林寺風

馬「もつと早くね」

「アチ！アチ！アチ！」

歩法・火渡り地獄

このままでは殺されてしまう…：…なんとしても脱出せねば！この風林寺島を！！

.....

美「ええーっ！」

岬「二人が逃げた！」

馬「そ、そうねおいちゃんとの修業してるとき」

兼「あ！？美羽さんのブラが！！」

霧「あ！？優子のブラが！！」

馬「なに！ブラがどうなったね！？」

ム「ツ…ブシャー」

馬「…というわけね、面目ない」

(…(まっただ)

おいおいですわ

明人の奴私をだしに使って見つけたらただじゃおかないわ。

その頃二人は

霧「うっ…なんか寒気が」

霧「兼ちゃんこれは逃げてるんじゃないよね」

兼「そうとも、僕らはただ…」

「死にたくないから…お家に帰るだけだ」

岬(それを一般に逃げるという)

「「!？」」

そんなことをいいながら逃げていた。

美「早く探しにいかないところは小さいながらも崖とがありますし」

岬「やれやれ困った弟子だ。しかたない…山狩りだ〜!!」

明「なんか大変なことになったね」

雄「まあ、いいさ俺らも探しにいこうぜ」

秀「そうじゃのう」

ム「騙された恨みはらさしておくべきか…」

優「私達はここでほかのちゃん達とまってるわ」

岬「よし、それでは探しに行こう」

霧「兼ちゃん、よく考えたら赤兎馬2号がなきや家に帰れないんじゃない  
「や」

兼「そういえば…絶対見張ってるよな〜」

兼「こうなったら帰りまで隠れとつすしか…ん？あれは」

霧「しぐれさん…何してるんだろ？」

し「……………」

ピシャ ピュン ガッ

川から跳ねた魚を弓矢でとらえた。

し「……………!?!」

兼「やばっみつかった」

霧「にげよう」

ヒュン ガッ

「ヒイイイ!」

弓矢を近くの岩に当てられた

し「なぜ逃げ…る」

兼「実は今逃亡中でして…」

事情説明中

霧「という訳なんですよ、酷いと思いませんか」

し「ふんふん…」

兼「僕は泳げないっていつてるに…」

し「泳ぎ…教えてあげよう…か」

兼「え？」

し「明人はこ…れ」

霧「あの…この弓矢でなにをしると…」

し「一匹でいいから魚をと…れ」

霧「は…はあ」

し「とれなっかた…ら秋雨にしら…す」

霧「それだけごかんべんを！」

し「じゃ…とつてね」

霧「はい！喜んでやらせていただきます…！」

兼「あの…生死にかかわるのとか…死んだほうがましな練習は嫌ですよ」

し「川には流れが…ある」

兼「あ、はい」

し「水は…逆らつと…おっそつてくる…」

し「だが…身をまかせれば…なにもしない」

し「こい」

兼「わ！！」

バシヤ

兼「わっぷー！」

兼「……………」

し「……………」

兼「……………！」

ぷくぷく

す、すごいすすんでる！あつ、手足を動かせば…もっ…これは泳げてる！？

兼「ケホケホお、驚いた！今、一瞬泳げた！！」

し「う…ん、あと…息つきだけだな」

そのころ明人は

ヒュン スカ ヒュン スカ

霧「くそ、的と違って狙いにくいな」

霧「でも少しはまともになったぞ。これならもっ少しで…」

と頑張っていた

し「つらくなったら肩越しに…後ろを見てやればいい…」

兼「それって伸泳？」

兼「……プハア……プハア」

し「そうそう…いいよ。ちょうど流れでうちけされるスピードで練習するところわく…ない」

し「僕もこうやって…泳ぎおぼえたんだ…よ」

兼「…!!」

その時しぐれさんが一瞬ほほえんだように見えました

し「一日で泳げるように…なったね」

兼「は、はい!!」

光の加減かもしれないけど、その時確かに僕は初めて、この人の笑顔を見たんです」

霧「しぐれさん…んとれました〜!」

し「よし…じゃあもう大丈夫だ…ね」

「「は？」

霧「ひいい!」

兼「待ってー!!」

兼「まだ早いーまだだーっ!」

し「二人とも泳げれば…とべるでしょ?」

「くわーっ!なんでみんな飛ばしたがるんだーっ!」

逆「あ、おい見ろ!!あんなとこにいやがった!」

馬「さんざん山の中搜してたのにね、しぐれどんといたのか」

岬「おっ、もう一度挑戦する気かな」

長「かんしんかんしん」

雄「ついにあいつらも死ぬか」

明「二人ともがんば」

ム「恨みがかってに晴れた」

秀「もし生きてても明人には姉上の折檻地獄がまっつておる。本当についてないのっ」

グイ  
グイ

兼「んっ!?あれ、あんなところにボート?」

霧「あ、ほのかちゃんに優子。ほのかちゃんに頼まれたのかな」

兼「まったくめいわくかけて…」

霧「あ！イルカまでいるよ」

し「あの泳ぎ方…イルカじゃない」

「「え？」」

ザバアアアア

「「キャアアアアア！」」

明「え！なにになに！」

雄「なにがあつたんだ！？」

逆「サメだ！！」

秀「なんじゃと！！」

長「いかん！！」

兼「ほのかアア！！」

霧「優子オオ！！」

ザブーン

「「ばあ…！！うおおおお…！！」」



四匹の鯨に向かって目にも留まらぬ早さで攻撃した

ザブーン

「「!?!」」

モヤアア

「「うっ!?!」」

プカア

「「ひ…ひいいい!?!」」

血まみれの鯨と一緒に鯨が浮かんできた

長「今夜は…ふかひれかのう?」

「「助かった(わ)…」」

ほ「えくんえくん」

「「死ぬかと思った…」」

長「見直したぞ二人とも。大した度胸じゃ」

長「それに…」

「「はい?」」

長「わしゃ前から思ってたんじやがのう…」

長「おぬしらはわしのわしの若い頃に、どこかにとる…!」

優「……………明人」

霧「あ、優子大丈夫だった」

優「ええ、そのことにかんしてはお礼をいうわ、ありがとう」

霧「いいって当然のことをしたまでだよ…あれなんで僕の腕をつかむの？」

優「助けってくれたことは本当に感謝してるわ。でもね私をだしに使って逃げたことはゆるせないの」

霧「あ…その腕はそっちにまがら…な…」

ボキッ

霧「ギヤアアア!!」

秀「あいからわず不幸じやのう」

海に行こう(前書き)

ソーク・クラブ

ムエタイの回転ヒジ打ち。 主な使用者：白浜兼一・霧沢明人

## 海に行こう

風林寺島から帰って来て一週間、また修業のひびをおくっていた二人に今度こそ至福の時がやってきた。

岬「二人とも朗報が入ったよ」

霧「何ですか岬越寺師匠？」

岬「明久君からね、海に行こうという連絡が入ったよ」

兼「え、本当ですか！…でも行っちゃだめですよね」

岬「いや、別に行ってもいいよ」

霧「え！？本当ですか！」

岬「ああ、今回我々は行かないから存分に楽しむといい」

兼「やつほうー！早速準備しなくっちゃ」

夜

兼「ふふふ、師匠達の邪魔のない今この本の出番かもしれない」

「もしもの時の完全告白マニュアル」

霧「頑張ってね兼ちゃん」

兼「うん！」

馬「ないない」

兼「わっ、いつのまに?」

逆「やめとけ。変な期待すんのは…振られたときのショックが、でけーただぞぞ!」

兼「し…失礼だな二人とも!」

ア「ケンイチ、振られても海に還っちゃだめだよー!」

兼「うわ!何窓から覗いてるんですか」

闘「チュチュウ」

兼「悔しい!みんなでバカにしてーっ!」

兼「み…み、みてるよーっ!」

翌日

美「楽しみですわー。私風林寺島以外の海って行ったことがないんですの」

霧「そうなんですか。あ、集合場所が見えましたよ」

兼「急ぎましよう」

明「やあ、おそかつね」

霧「ごめんごめん、ちょっと支度到手間取ってね」

新「なあにいいってこつよ」

兼「ありがと…ってなんで貴様がここにいる新島!?!」

雄「なんだ、二人の友達じゃないのか？」

兼「だれがこんな宇宙人友達なんか…貴様どうやってこの情報をへた!」

美「すみません、昨日の買い物の時言ってしまいましたわ」

新「あんみつ二杯でな」

兼「って買収したんかい!?!」

美「ごめんちゃいですわ」

秀「何だかわからんが、まあいいではないか兼」

島「そうよ、話してるかんじ悪い人じゃなさそうよ」

兼「皆がそういうのなら」

ム「……バスがきた…」

雄「おっそうか、それじゃあ出発だ!」

『おお〜』

海

美「うん潮風が気持ちいいですわ」

島「ほんとね」

霧「平和っていいね」

兼「まったく」

秀「せっかく海にきたのにおぬしらわ…」

明「そうだよもっと楽しくいこうよ」

カシヤ カシヤ カシヤ

新「ほいいい動きじゃん、どうだい俺の部下にならない？」

兼「こら！怪しげな誘いをするな」

新「そこの悪鬼刹羅の人でもいいけど」

雄「なに！貴様どうしてそのことを！！」

新「ケケケ俺さまの情報網をあまくみるな」

明「ねえ、悪鬼刹羅ってない？」

雄「お前はしらんでいい」

兼「新島いい加減にしろ！！」

霧「まあまあ、今日は楽しみに来たんだから争いごとはなしにしよう」

秀「そうじゃ、見てみい女性人を楽しそうに遊んでるじゃろ」

兼「はっ！こうしちゃいらんない美羽さ〜ん」

明「はや！」

秀「わしらもいこうかの」

霧「そうだね」

雄「ほれムツツリーニも写真は後にしろ」

ム「写真なんてとっていない…」

明「よくそんな堂々と嘘がつけるね」

ム（ブン ブン）

それから皆は楽しく遊んだ。一度不良に襲われるというハプニングがあつたもののそれ以外はとても充実した一日になった。

そして兼ちゃんの告白わというと

兼「美羽さん…」

美「はい？」

兼「あの、その…ぼ…ぼくと…っ、っ、付き合ってください！」  
言った言い切ったぞ。

新「つきあう？…そうかそうかとっとう不良になるきになったか」

兼「に、に、に、新島！なぜ貴様がここにいる！美羽さんはどこだ  
！…！」

新「美羽ちゃんなら島田とかいう女につれられていったぞ」

兼「そ、そんな」

新「そんなことよりまず誰から殺る？やっぱり仕入のリベンジか」

兼「うっさい宇宙人！！」  
バキイ！

新「ホギヤア」

殴られ吹っ飛ぶ新島

兼「うわ〜ん！！」

新「俺が何を…し…た…」ガク

そんなこともあったけど、とっても楽しい一日になりました。

## 夏休みの宿題（前書き）

すみません、もしかしたらこの三連休投稿遅れるかもしれません

## 夏休みの宿題

夏休み最終日それは誰もが通る道。そしてここにも…

霧「宿題なにもやってな〜い!!」

宿題というあの敵と戦っている少年がいた

岬「なんだね明人君まだ君は宿題を終わらしてなかったのかね？」

霧「いつやる暇があったというんです!!」

岬「兼一君は終わってるじゃないか」

霧「兼ちゃんの所は宿題がないんです」

霧「誰か手伝ってくださいよ〜まだ観察日記しかおわってない!」

霧「もし忘れたら日がくれるまで僕は鉄人補習室に監禁されてしま  
います」

ア「アパ、アパチャイ手伝うよ!明人なにやればいい」

霧「い、いえアパチャイさんはおとなしくしてくれていれば…」

ア「アパ、わかったよ」

霧「お願いします美羽さ〜ん何か手伝ってください!」

美「わ、わかりましたわ。それでは数学でも」

岬「しかたない…私は美術を手伝おう」

霧「ありがとうございます二人とも。これで残る問題ただ一つ…この真っ白な日記だ」

霧「残ってる人でまともなのは…」

霧「逆鬼師匠は…だめだ日記をかけるとは思えない。馬師父は…できるかもしれないけど日記に下ネタを書くおそれがあるし…どうしよう」

長「なんだ明ちゃん日記の宿題がのこってるのかの」

霧「あ、長老実はそうなんですよ」

長「ならわしが手伝ってやるわい。夏休みのことなら全て覚えてるからの」

霧「本当ですか！ありがとうございます長老」

長「なんのなんの」

これならなんとか終わらすことができるぞ。

翌日

鉄「よし今日のホームルームはここまでだ宿題を提出した者からかえってよし」

△「……………」

鉄「どうした土屋はやくだせ」

△「…やったけど家に忘れた…」

鉄「そうか、それならすぐとってこい」

△「……………」

鉄「吉井もだ早く出せ」

明「僕はなにもやってない！」

鉄「そうか…それでは補習室で補習と鉄拳をくらわしてやるからま  
っている」

鉄「次霧沢」

霧「はい、どうぞ」

鉄「……………なんだこれは」

霧「なんだって宿題ですけど」

鉄「美術がうまいのはまだわかる…だがなんだこの日記わ」

霧「へ？日記」

鉄「〇月×日今日は東の方にある麻薬組織を三つほど潰しました」

霧「……………」

鉄「お前はどこの始末屋だ!!」

霧「あ、あのそれは……」

鉄「言い訳無用!お前も補習だ!!」

霧「そ、そんな」

## 人物紹介2（ケンイチ）

ラグナレク

武田 一基…18歳。元ラグナレク・キサラ隊の精鋭「技の3人衆」の一人でリーダー格。「突きの武田」の異名を持つ、ライト級の元プロボクサー。恩人である秋雨を大先生と呼ぶ。ボクシング界でも期待の新人だったが、友人とともに不良と戦った際に利き腕である左腕が不随となり、以後落ちぶれる。ラグナレク時代は右腕一本で戦っており、両腕が使えたら拳豪級と評されていた。左のストリートは幻の左と呼ばれておりスローカメラで撮ってもどこを殴ったのか分からないという逸話もある始末だが中盤に入ってからはその左のストリートと呼んでいる。語尾に「〜じゃない」と付け、常に葉っぱを口でくわえておりいかにも軽そうな性格をしているが本質は熱い闘志と情愛を持った男で作中では兼一の新島、美羽に次ぐ親友になっている。

宇喜田 孝造…18歳。元ラグナレク・キサラ隊の精鋭「技の3人衆」の一人。「投げの宇喜田」の異名を持つ、柔道家。かつて名門の柔道場に在籍していたが勝つためにどんな手でも使う品性の無さから破門され不良に身を落とした。武田が兼一と戦ってラグナレクを抜けてからもう一度柔道家に戻る事を決意し、柔道を続けている。荒涼高校の柔道部は弱小だが、宇喜田が立て直しにかかっている。武田とは馬が合うようでよくつるんでいる。

南條 キサラ（なんじょう きさら）…17歳。第八拳豪バルキリ1。テコンドーの使い手で、帽子と片方の足が破れたジーンズがトレードマークの小柄な少女。努力家で、何事にも真摯な思いで臨む性格。この作品には珍しく貧乳。テコンドーに関しても男に負けた

くない、との思いで練習を続けていたが、試合の対戦者の男性が自分  
分が女であるとの理由で手を抜いていたことを知り、それ以来ルー  
ル無用のストリートファイトに明け暮れる。そんな中、第三拳豪の  
フレイヤに強い感銘を受け、彼女直属の部隊ワルキューレの一員と  
してラグナレク入りを果たす。しかし男と対等に戦うためには武器  
を持つことが重要だと考えるフレイヤに対し、素手で男と対等に渡  
り合うことを信念とするキサラは、その後ワルキューレの一員であ  
ることを辞め、「キサラ隊」の長として独自の路線をたどること  
になる。しかしフレイヤに対する敬慕の念は一貫して変わっていない。  
猫好きが共通する美羽のペースに巻き込まれたり、兼一に感化され  
たりしている内にその変化を反逆と見なされラグナレクからの脱退  
を余儀なくされる。

千秋 祐馬ちあき すすま：16歳。第七拳豪トール。相撲を異種格闘技用に自ら  
改良した実戦相撲の使い手で、優に100kgを超える巨漢。友情  
や約束のためならば命をも懸ける男気溢れる好漢。才気煥発という  
タイプではないが、激昂しても状況を見失わない冷静さを持ち、頭  
も意外に鋭く切れる。また、体は相当に鍛えこまれており、誰の弟  
子にもつかずに独学で新必殺技を編み出してしまふなど、類まれな  
努力家でもある。

自ら開発した実戦相撲を最強の武術にし、世界中に普及させる事を  
生涯の目標としており、ラグナレクに加わったのも、ルールの無い  
闘いを数多く経験し実戦相撲に磨きをかけるためであった。

谷本 夏たにもと なつ：16歳。第六拳豪ハーミット。馬槍月の弟子で、中国  
拳法の劈掛拳と八極拳の使い手（間合いを離して戦う劈掛拳と接近  
戦を旨とする八極拳を同時に学ぶことは実際によくある）。6歳ま  
で重病を患った妹・楓と共に孤児院で育つが、一代で巨大コンツエ  
ルンを作り上げた養父・谷本に、妹の治療を見返りに跡継ぎとして

引き取られる。そんな中、養父が妹を診療していた女医と恋に落ちるが、財産目当てで近づいた女医の手により妹・養父、共に死去（ただし劇中で女医は容疑を否定している）。天涯孤独の身となり莫大な遺産を狙う者達に命を狙われるが、拳聖によって救われ、彼の言葉から武術を学ぶ決心をした。「拳豪鬼神」と呼ばれる達人、馬槍月に弟子入りし、さらにスリーオブカードの統率力を学ぶためラグナレクに入隊、第六の拳豪となる。

学校では心優しい優等生を演じているが、気に入らない相手を前にすると一変。友情・愛を否定する冷酷な性格を現す（しかしその冷酷な言動も、上記のような環境で人を欺く事を余儀なくされたが故のものである）。性格はクールだが若干高飛車で、自分よりも弱い武術家をザコ呼ばわりする事が多くある。しかし、兼一の妹ほのかなど、弱き者に対しては時折優しさをのぞかせる。

九弦院 響ひびき：16歳。第五拳豪ジークフリート。「不死身の作曲家」の異名を持つ、変則カウンターの使い手。絶対音感により攻撃のタイミングを察知し、受けた打撃の威力を「軸」をずらす事により殺し、円運動で相手に返すという変則カウンターを使いこなす。作曲家としても特異な才能を持ち、セリフの端々にやたらと音楽用語（イタリア語）を挿入する癖があり、作曲を妨害されると殺意を抱く。最高のメロディーは戦いの中から生まれると信じ、より刺激的な戦いの場を求めてラグナレクに参加。強敵と戦うという体験それ自体に音楽的な価値を見出す芸術家肌の人物であるため、ラグナレクの勢力拡大など政治的な方面には興味が無かった。そのせいかラグナレクでも浮いた存在だったが、第七拳豪ツールとだけは馬が合った。

ロキ：第四拳豪。本名不明。「戦う参謀」を自称する新島同様の策略家。相応の実力の持ち主ではあるが自ら表立って動くことは少なく、多数用意した影武者や直属の部下を“号”とナンバリングして統括、策略に依じて動かしている。時に拳聖の名を騙りほかの

拳豪すら己の陰謀のために利用する。ラグナレクで五本の指に入る美形であるが、自分の素顔を見られるのを嫌うため常に網眼鏡をつけている。

久賀館 くがたに 要 かなめ：第三拳豪フレイヤ。久賀館流杖術の正統後継者で「武人」と呼ぶのがしつくり来るようなクールな女杖術家。色黒で顔に傷のある少女。かつては拳聖の教えを受けるためにラグナレクに加入した。「神武不殺」（真の強さは人を殺めない）を信念としている。

バーサーカー …… 本名不明。「無敵のケンカ屋」と呼ばれるストリートファイター。特に誰の指導も受けたことはなく、純粹な我流であり武術に関しては全くの素人だが、強靱な肉体と生まれ持った格闘の素質は弟子クラスとしては最高レベルにあり、さらにこころ一番でも勝負強さをも併せ持つ、第一拳豪オーディーンと並び称される強さを誇る天才。スリーオブカードのなかで実は最も恐ろしい男といわれている。典型的な“動”タイプの格闘家で、リミッターが解除されるとバーサーカーのあだ名の所以たる「バーサクモード」と呼ばれる戦闘態勢が発動、とてつもない怪力を発揮して攻撃力が倍増する。その際アドレナリンの大量分泌によつて痛覚が麻痺するため、打撃に対する耐久力も強化される。

朝宮 あさみや 龍斗 りゅうと …… 緒方一神斎の弟子で、「オーディーン」のコードネームを持つ古流武術？の使い手。ラグラレクの第一拳豪。自身の間合いを「制空圏」として統括する格闘術をマスターしており、弟子クラスとしては数少ない“緊湊”のレベルに到達している武術家。オーディーンの名の由来は、魔術と予知の神オーディーンのように相手の動きを読む能力（動きの一つ一つではなく全体を見て動きを読む、武術で言う「観の目」と相手のリズムを感じ取る能力の併用による）と、必中の魔槍にちなんだ技・グングニルから。師を拳聖様と呼ぶ。

## 馬家

馬<sup>ば</sup> 連華<sup>れんか</sup>：馬劍星の実娘。16歳。「鳳凰武俠連盟最高責任者の娘」の肩書きを持つ中国拳法の使い手。腕前は弟子級の中でもトップクラス。チャイナドレスに大きな鈴の髪飾りを付けた美少女で剣星を「パパ」と呼ぶ。鳳凰武俠連盟最高責任者という地位を捨て日本へ渡った父を中国に連れ戻す為に、自身も日本へと渡り、横浜中華街の親戚、馬良の元に身を寄せている。武術は実戦主義で行動派な面もあり一人で突っ走ることが多い。中華街では自警のようなことを務めており市民を中国マフィアから守っている。猫のように動く物を追う習性があり、耳のようになっていて髪は本物の猫の耳のようにその時の感情によってぴこぴこ動き、そこをつかまれると力が抜ける。そのために美羽から猫扱いされることがある。高飛車で強気な性格に加え、かなり破天荒でわがままなため、当初は兼一と明人の事も優柔不断や身軟弱男と小馬鹿にしていたが、次第に彼らの優しさや強さに惹かれていき、再登場したときは兼一にべた惚れになつており、可愛らしい態度を取るようになっていた。

馬<sup>ば</sup> 槍月<sup>そうげつ</sup>：「拳豪鬼神」の異名を持つ中国拳法の達人。殺し屋。過去の年齢から推測して44歳。馬劍星の兄。一影九拳の一人であるが、放浪癖があり、数少ない友の魯慈正に預けていた。谷本夏の師。化剄を得意とする剣星とは対照的な剛拳の使い手で、かつて中国では「剛の槍月」「柔の剣星」として剣星と共に最強の拳士として並び称された。最高級の酒34ダースと2本を報酬に谷本夏に中国拳法の劈掛拳と八極拳を指導した師父でもある。谷本夏を「類稀なる武芸の才と、地獄の修行に耐える強い意志を持っている」と称しており弟子としても認めている。チャイニーズ・マフィア「紅獄会」の用心棒として雇われていたこ

るに噂を聞きつけた剣星と対峙。剛拳と呼ばれる圧倒的攻撃力で剣星に攻める間を与えず、ビルが崩れた際に生じた隙を突いた肘打ちで勝利したかのように思えたが、友との修行により格段に腕を上げていた剣星にあと一步で及ばず敗れる。敗戦後は燃え盛るビルと共に焼死することを望んでいたが、これを良しとしない二人に引き止められ「剣星も可笑しな弟子を育てたものだ」と語りながら二人を助け、行方不明なっている。

馬良ばりょう：「白眉」の異名を持つ中国拳法の達人。剣星からは「白眉伯父しゅーふ」と呼ばれており、異名のように眉毛のみが白い。横浜一の物知りであり、横浜中華街で逆鱗飯店という中華料理店を営んでいる。馬剣星の伯父で、情報を入手するのによく訪ねる人でもある。戦闘シーンは無いが、武術の実力は達人級であり、蓮華が失踪した時には悲しみのあまりに中華街に潜むマフィアに八つ当たりして片端から倒していった。その辺の達人の一匹や二匹なら面倒を見られると豪語する程の腕前。風林寺隼人とは顔見知り。頭が禿げていることから剣星と共に二人にハゲ仲間と呼ばれたことがある。

## 知り合い（前書き）

長らく更新止めてしまい申し訳ございません。

体育祭やら文化祭やらで忙しく今もテスト前なのでなかなか更新できませんが、これからもよろしく願います。

## 知り合い

夜 公園にて

キ「デヤア！」

「ぐほゑ」

そこではラグナレクキサラ隊とチームギャリソンが戦っていた。

ドサツ！

「「頭！！」」

キサラの蹴りが決まり敵の大将をたおした。

キ「残敵を掃討しな」

「「「はっ」」」

「「ギャアー！！」」

キ「フハハハハハ！」

side out

ここは！！梁山泊

スポーツ化した現代武術に溶け込めない豪傑や…武術を極めてしま

った者の集う場所！

岬「二人にはそろそろ本格的な技の修行に入ってもいいと思うんだが…どうだろう？」

馬「そいね、かなりきつい修業だけどそろそろかね」

逆「おいおい、二人は体に恵まれてるわけでもねーただのガキだ！あんまり急いで技の修業に入ると…しぬぜ！！」

ア「ゆっくりゆっくり教えれば、アパチャイ二人なら生きのびると思うよ！」

ア「いつも二人が死にそうなのは…皆が無茶するからよ！」

逆「おめーが言うな！！」

霧「あのう…みなさん……」

兼「死ぬだの…生きるだのそういう相談は…修業している本人のいない所でしてください……」

し「45…46…47…48……」

岬「いや、君達てきにはどうかと思ってね」

霧「それってきついですか？」

岬「はいきついです」

「……………」

兼「もう少しまってもらえますか」

岬「もう少ししてどのくらい、明日？」

「……………」

秋雨の奴早く修業始めたくっつてうずうずしてんな

学校

先「うお〜い浜君、泉ちゃん花の水やりおねがいね〜」

兼「はい」

泉「おまかせあれ」

兼「それじゃあここからまきましようか」

泉「ええ」

泉「……………白浜君ってさー…風林寺さんとよくいるよね」

兼「えっ？ええまあ……………」

泉「もしかして二人って……………」

兼「はい？」

武「ははは！兼くん！！」

武「やあ、元気そうだね」

泉「……………」

兼「あ、武田さん。これからロードワークですか？」

武「はは、左腕の復活を機に学校でも、ボクシング部に入ったんでね」

兼「脱会リンチとかいうの…まだ、大丈夫ですか？」

武「うーん、それがどうもラグナレク内部でいろいろ忙しいらしくてね。なんでも僕の元・上司のキサラちゃんが昇進したとかで…辻君もそれどころじゃないみたいよ！」

兼「そうですね、とりあえず大丈夫なんですね。もし何かあったら…」

武「何かあったら？」

兼「あつたら…僕も戦…戦う…」

武「ハハハ、気持ちだけで嬉しいよ」

武「大丈夫！自分の事は自分でね！…」

武「じゃあ僕は行くよ凄腕の君のハニーよろしくね」

兼「頑張つてー！…」

凄腕？八二一？？」

泉「でさー白浜君と風林寺さんて…」

兼「え？」

新「つめたい…」

泉「ひいひいひい！」

兼「うわっ！何だよ新島？そんな所でなにしてる！？」

新「フツ。データの入力は、人目につかない所でいつもやっている…」

新「兼一よ、南條キサラが近じか七拳豪に入るらしい！！」

兼「え？ああキサラって、うちの生徒でラグナレクの幹部だっついてう、あの？」

新「そう、南條キサラ2年。最近どんどん力をつけている女幹部だ」

新「女だてらにテコンドーの遣い手で、かなりのもんらしい。自分の倒した相手を次々と傘下に加えるそのやり方から、ヴァルキリーと呼ばれている」

新「ちくしょー、こいつは伸びるとよんではいたがこんな早七拳豪入りするとはな〜」

兼「なんだい七拳豪って？」

新「ラグナレクの幹部で、特にその実力をかわれた者だけがリーダーの拳聖直属の兵として選ばれるんだ!!」

新「ラグナレクの兵隊全てを恐怖で束ねている七人…おっと、キサラが加わったら八拳豪か」

兼「なんか…：すごそうだね？」

新「あほー！他人事かーっ！？お前らが早く南條をたおさねーから力をつけちまつたじゃねーか！」

兼「お、大きなお世話だ！！それとお前らって明人のことが」

新「そうだよ！貴様が余計な事を吹き込んだせいでオレ様の言うことをなかなか信じなくなっちまった！」

兼「自業自得だろうが!!」

新「ええい、オレ様の計画が…微妙にずれてきたぜ…」

兼「計画ってなんだ？」

新「まあとにかくだ！！お前らは辻新之助とリターンマッチをやって倒せ!!」

新「今、奴は長い間、狙ってた八拳豪の座をキサラに奪われ、精神的ダメージを受けている」

新「それにオレはながしていたのさ、奴の悪口をな。あることない

ことえんえんと……」

新「結果、奴の兵は激滅し……辻隊は崩壊寸前!!」

お……恐ろしいやつ!

兼「なんか……可哀相になってきたなあモジャモジャさん……」

新「だーほう!!」

ドン

兼「ブツ」

新「情けなんてかけてる場合か!!」

兼「痛い馬鹿やめろ!本気だすぞこの!!」

新「いいか、武田の脱会リンチを任されたのは奴だぞ!」

新「奴を倒せば……うまくすつと、あやふやにできるかもしれないぜ。俺の力も使つてな……」

……武田さんの力になれる?人助けのための戦い……

新「まあ負けたら、元も子もないからな。俺は、辻と八拳豪の情報をもつと手に入れる」

新「おめーらはもつと腕を上げとけや!!じゃな」

兼「なんか上手い具合に貴様にのせられた気がする……よかろう」

美「兼一さん、新体操部終わりましたよー!!」

兼「あ、どうも」

泉「ああー！お迎えが来ちゃった!!」

泉「負けるもんですか!!」

兼「やれやれ今日もなんとか平和にすごせましたね」

美「ええ」

霧「オーイ二人とも」

兼「あ、明人」

美「明人さんも今おかえりですか」

霧「はい」

兼「それじゃあ行こう」

霧「うん」

美「はいですわ」

美「それにしても二人とも、少したくましくなりましたね」

兼「いやーこの間の海水浴は大変でしたからね」

霧「まさかサメと戦つはめになるとは…」

美「まあ何事も経験ですわ」

霧「まあ、おかげで度胸はつきました」

兼「モジャモジャでもなんでも、どんとこーい！って感じですよ！」

美「あ、だったらちようどいいですわね！」

美「噂をすればモジャモジャさんですわ」

「「ひい！！」」

美「どうします？勝負申し込みます？」

兼「ちよ、ちよ、ちよ、ちよとまってね！」

霧「こんなとこで何してんのかな？」

兼「少し様子を見てみよう！？」

辻「俺はぜってーに認めねーぞ！」

辻「てめーが八拳豪だど！？実力だけでラグナレクの序列は決まるはずだったんじゃないのか？」

キ「そうとも、だからこそ私が選ばれた…」

辻「なにいゝ？」

キ「それよりずいぶん兵が少ないんじゃないか？わざわざ私を待ち伏せしたわりには、備えが悪いねえ……」

「俺達は辻隊長の親衛隊だ！」

「他の連中は貴様が流したデマで、他の隊に移ったんじゃないか！」

キ「私はそんなまどろっこしい事は……まあ信じないか……」

辻「こんちくしょうめ！いいだろう、今ここで決着をつけようじゃないか！」

辻「女だからって容赦はしねえぜ……！」

キ「女：女だからなんだってのさ？」

「「！」「」

美「どうしたんですか二人とも？」

だっ

「「やめるモジャモジャ……！」

辻「！？」

「「女の子に手をあげる奴があるかあ……！」

辻「ブッ」

二人のとびげりがきまった。

か…かなり見事な不意打ちですわ…

「てめー!!」

「よくもー!!」

ゴツガッ

襲ってきた二人に裏拳をきめてたおした。

キ「ほう…」

なかなかいい不意打ちだ!

すごい!モジャモジャさんプラス二人の適を全て一撃で倒してしまいましたわ…二人がかりの不意打ちとわいえ!

兼「あのーケガはないですか?」

キ「やるじゃない坊や…たしか白浜と霧沢…とか言ってたっけ?」

霧「……どっかでお会いしましたっけ?」

キ「うちの部下が何度も世話になってるじゃないか!私はキサラ…南條キサラ」

「「ああ、これはどうも……ってええっ……っ」

な、な、南條キサラ!?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3294n/>

---

バカとテストと梁山泊

2010年12月9日20時29分発行